
けいおん! 僕の奏でる音

icbb

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 僕の奏でる音

【Zマーク】

Z8594Z

【作者名】

i c b b

【あらすじ】

初めての執筆です。生暖かい目でみてやってください

けいおんの一次小説です

初めての執筆で悪い文章ですが、意見、感想のほどよろしくお願ひします

なるべく頻繁に更新をしていくつもりなので、よろしくお願いします

主人公、天城空也。

共学になつた桜ヶ丘高校に入学することになり、唯たちとは同級生。澪や律とは中学からの知り合いであり、自覚無しのイケメン。学力は小さいときの教育によりできる、運動も上の下。小さい時からギターを弾いていた。実力はプロになる一歩手前でギターはG r a s s R o o t s の F O R E S T。 グラスルーツ フォレスト 料理もでき、家は琴吹家と肩を並べる大企業である

主人公の幼馴染、不動大地。

空也と共に桜ヶ丘高校に入学した幼馴染、空也からは煙たがられてはいるが空也も信頼する親友。もちろん澪や律とも知り合いである。見た目はそれなりだが空也のおかげで霞んでいる

主人公の父、天城空吾。

いつもは豪快で人のプライバシーを考えないが、ちゃんと空也の事を考えている良き父。一代で会社を琴吹家と肩を並べた卓越した手腕を持っており、空也は父以上の才能があると信じている

大地の父、不動英雄。

空吾の執事であり、友人。物腰の柔らかな口調で、大人の男性。天城家の執事長

執事、和田知哉。

空也の執事。一人で空也の身の回りの世話、料理、食材調達をこなす、英雄曰く、期待の執事。空也曰く、優秀だが性格に難あり。だが空也も頼りにしている

以上がオリキャラの簡単なプロフィールです。新キャラが出るたびに更新していきます。

一応ヒロインは澪です。完全見切り発車ですのでご了承を

第零話（後書き）

次の話より本編です

第一話

四月某日

「こんな感じか？」

桜ヶ丘高校の制服であるフレサーに袖を通し姿見で確認する

「あ…そのうち賣れるだろ」

自己完結し、俺の部屋から出た

あぐ おはる、阿モ

「あんた、何か部活するの？」

- れる?」

曖昧な返事をし朝食を食べ、鞄を担いだ

「おへりいじ、せじ」

言葉少なめに家を出た。しばらく歩いていると後方から面倒な存在がやって来た

「おーーーう、元氣か？空也ー！」

「お前が来なきや元氣だ…」

大地に暴言を浴びせ、無言で歩みを進める

「お前は毎回うごくな……」

大地はそう言いながらもしつかりついてきた。そして学校に近づくにつれて桜ヶ丘高校の生徒が多くなつていった

「女子ばっかりだ…」

「黙れ」

大地の腹部にパンチをいれ氣絶させクラス表を見にいつた

天城空也 平沢唯 不動大地 真鍋和

「何であいつと一緒になんだよ…」

ため息をついて教室に向かつた。

入学式を終え、一人一人自己紹介をしていく

「天城空也です。よろしく…」

簡単に自己紹介を終わらせ、部活の勧誘チラシがある掲示板に向か
つた

「うーん……めぼしい部活はねえ……か……

踵を返し教室に戻つて返す支度をしていると大地がやつてきた

「空也ー帰ろ!うぜー

「…………

それを無視し昇降口に歩いていったそこに澪と律がいた

「あー空也ー

「ホントだ。クウじゃん

俺を呼び捨てで呼ぶのは秋山澪、クウとあだ名で呼ぶのは田井中律。二人とも俺の中学からの友達である

「よう、一人とも。今帰りか?」

「ああ、空也も?」

澪の言葉に俺は小さく頷いた

「じゃあ一緒に帰ろ!うぜー

律の言葉に頷いたのは俺ではなく大地だった

「俺も一緒に帰るーー…………ぐはー!」

大地の腹部に蹴りをいれ俺は歩き出した

「空也と不動は高校に行つても相変わらずだな……」

澪が呟き俺に着いてきた

「澪はどうなんだ？」

「ん？ 何が？」

「人見知り……俺と大地以外の男と喋れる様になれそうか？」

澪は少しあせつた表情を見せた

「まだ厳しそうだな、頑張れ」

「うん……やつぱり空也こは分かつちやつか……」

澪は苦笑いを浮かべた。それから談笑しながら帰路についた

第一話

桜ヶ丘高校に入学して2週間がたつた

「空也ーー、お前部活何に入るんだ?」

購買から帰ってきた大地が言つてきた

「まだ何も決めてねえよ」

俺の言葉に大地が驚いていた

「なんだとーーお前..和ちゃんが言つてたぞ。部活をしない奴はーー
トだつてー!」

「また極端だな。そうこうお前は?」

「俺か?俺はテニース部だ」

「お前如きがテニースだと?」

「酷い言われようだな。ちゃんとした理由があるのだよー!」

大地は意気揚々と立ち上がった

「こ」の学校は元々女子高ーつまり..「言ひてえ事は分かつたどりあ
えず黙れ」ヒドッ!」

大地の言葉を遮り、昼食を手早く済ませた

「そういやお前… 軽音部入らねえの?」

「軽音部?」

「ああ。さつき張り紙が有つたぞ?興味があるなら行ってみるよ

「そうだな…」

言葉少なげに頷き、午後の授業が始まるまで軽音部について考えて
いた

その日の放課後…

「こ」の先ね…」

山中教諭に部室の場所を聞き、音楽準備室に向かうが一人の少女を
発見した

「平沢……だっけ?何してんの?」んなとこりで?」

「え?と……誰でしたっけ?」

少女は頭をかきながら聞いてきた

「天城空也。一応お前と同じクラスだ」

「そりだつた。空也だからクーくんだね!」

「好きに呼べ。んで?何してんの?」

「あークーくん一緒に音楽室に来て!」

「何で?」

話を聞くと軽音部に入部したようだが、バンドを組んでもギターができないと理由でやめたいとの事だった

「えじや…何ならできるんだ?」

「えっと…カスタネット?」

俺の中で想像しているととても似合っていた

「はあ…まあいい、行くぞ」

俺は平沢を連れて音楽準備室に向かった

「へーん」

音楽準備室につくと平沢はドアを開ける躊躇つていた

「ま、早々入れよ。入部断るんだろ?」

「へ、うん…でも…」

まだ入るのを躊躇つっていた

「はー…」

俺は平沢の前に立ち、変わりに音楽準備室のドアを開けた

「うーあれ？ 鶴と律じゃん」

そこには鶴と律、そして初対面の女子がティータイムをしていた

「空也？ 何でこんなところに？」

「俺は軽音部員を連れてきただけだ」

俺は背中にいた平沢を前に押し出した

「貴方が平沢唯さん？」

「は、はい！」

「入部希望の？」

「は、はい！」

律と鶴が平沢を質問攻めにする

「ありがとー！ ギターがすっごく上手いんだよねー。平沢さんみたいな人に入つてもらつて心強いよー！」

律が平沢の両手をつかんでブンブン振つていた

「尾ひれが付いちやつてんな…どうする気だ？」

みんなに聞かれない程度に呟いた

「平沢さんはどんな音楽がやりたいの？好きなバンドは？好きなギタリストは？」

律が質問で攻め立てる

「じ…じ…」

澪がじから始まるギタリストを上げていき遂に平沢は黙ってしまう。実は入部を辞めさせてくださいを言いたいだけなのに…仕方ない…

「澪も律も落ち着け、平沢がお前らに話したい」とあるから来たんだ」

「え？」

澪と律、それにムギと呼ばれた少女も一斉に平沢を見た

「ほり、頑張れ」

平沢の背中をポンと押した

「クーくん…あの、実は入部を辞めさせてください…」

平沢の言葉に三人が固まった

「ギターは弾けないし、もつと違う楽器をやるんだと思つて…」

「じゃあ何ならできるの？」

「カスタ……ハーモニカ！」

見栄を張つたのが間違いだつた

「あ、それなら持つてるよ！吹いてみて」

律が持つていたのだつた

「『めんなさい！吹けません！』

凄い速さで平沢が謝罪した

「でも、入部しようとしたことは音楽に興味があるんだよね？」

澪のフオローを皮切りに三人がなんとか入部させようと頑張ついた。お菓子で餌付けしてみたり、他に入りたい部活がないならと誘つてみたり、すると平沢は申し訳なさそうに泣いてしまつた

「『めんなさい、軽い気持ちで入部するなんて言つてしまつたばっかりに…』

こうなつてしまつたら平沢を留めらるるために…

「澪…ちょっと…」

小声で澪を呼んだ

「お前ら演奏できるの？」

「え？あ、ああ簡単なものなら…」

「なら聞かせてやれ。ああなた以上留まらせるためには演奏だ。
それで駄目ならしかたねえ」

「わかった

澪は頷き三人を集めた

「平沢

「グスツ…クーくん？」

「皆が演奏してくれるってよ。それ聞いてからでも本当に入部しね
えつて事決めても遅くねえんじゃねえか？」

「演奏…してくれるので？」

平沢が三人を見ると全員が頷いた。平沢は泣き止み長椅子に腰を下
ろした。俺は壁に背中を預けた

「ワン・ツー・スリー・フォー…」

翼をくださいのカバーした曲を演奏した三人、とてもじゃないが上
手いと言えないがそれでも充分平沢の心に響いているのを確認でき
た。そしてそれは俺にも響いた

パチパチパチ

平沢から拍手が起こり席を立つた

「なんていうか…凄く言葉にしていいですか…」

律が期待をこめた眼差しを平沢に向けたが

「あんまり上手くないですな…」

バツサリと切られた

「でも…なんだかすっごく楽しそうでした！私…この部に入部します！」

その言葉を聴いた澪と律はお互の頬を抓つて夢じゃない事を確認すると律はその場で万歳し澪はこいつにやつてきた

「ありがとなー空也のおかげで廃部にならなそつだー。」

「よかつたな…」

俺は澪の頭をポンポンと叩いた

「あ、ああ…それでなんだが…空也も入部しないか？」

澪が顔を赤らめながら提案してきた。そんなもの最初から答えは決まっていた

「ああ、てか俺は最初から入部するつもりだったよ。それに…」

「それに…何だ？」

「澪からりの頬みを俺が聞かない訳は無いからな

その言葉を聞いた澪はさうに顔が赤くなつた

「お熱いねえ、おー一人さん。まあ今はいいや。記念写真撮り一ぼり
澪もクウも！」

律が手招きして呼んでいた

「行くか」

「ああ」

ふたりは並んで歩き出した

第一話（後書き）

アニメ第一話です

オリジナルの部分も有りますがご了承ください

第三話

俺が軽音部に入部して翌日…

「うーん…」

俺は自室にあるエレキとアコギを見比べていた

「エレキでいいか…」

エレキギターを左肩に担ぎ自室をでた

「ん? 何だお前? ギターなんて持つて

「使いから持つてんだよ」

親父が興味なさ下に新聞を読みながら聞いてきた

「近くの秋山さん所の娘さんと同じ部活に入ったんですけど

母さんが朝食を運びながら親父に付け足した

「お前ら、小さい時から…お前…もしかして…うるせえ…」「ぐあ…」

親父のボディにパンチをぶつけ朝食を食べた

「あ…一生に一度の高校生活だ…後悔するなよ…」

「わかつてゐる…」

朝食を食べ終わるとギターを担いで家を出た

「あ、おはよう空也」

家の前に澪が待っていた

「何でいるんだ？」

「同じ部活に入ったんだ。一緒に登校してもいいだろ？」

「好きにじるよ。とにかく一刻も早くここから立ち去りてえ」

俺は自宅の窓を指差した、そこには親父と母さんが覗き見をしていた

「や、そうだな……」

俺が歩を進めると澪はそれについてきた

「わ、いや、律はどうしたんだよ？」

「律は寝坊したから……」

澪は俺に携帯を見せそこには『寝坊したから先にいって』と書いてあった

「ていうか、空也。ギター持つてたんだな……」

「ああ。お前は俺んちに入ることが無かつたからな。大地とかなら知つてたぞ

「へえ… 空也のギター聞いてみたいな」

「放課後に見せてやるよ」

か話題を繰り返しつつ桜校の校門までついた

新編 井戸子を置地圖

澤が音楽準備室の鍵を見せ 軽く頷した

しゃあ方譲りでな」

一
ああ

澪と別れ、それぞれ自分の教室に向かった。教室に入ると大地が飛びついてきた

「……」アヘ：――――――――

大地の腹部にハンチを浴びせ教室に入る

「ん？ ああ真鍋か… もはよ！」

真鍋が近寄つてきた

「大地君ほつといていいの？」

「俺の知ったことではない。そのまま永遠の眠りについてほしぐらいいだ」

そういうながら俺は席に着くと真鍋がそれに着いてきた

「空也君、唯の事ありがとね」

「唯？ ああ平沢のことか」

「うん、あの子高校に入つて何か部活したいって言つてたから」

それを言ひ真鍋はあるで保護者の顔だった

「空也君なら何か安心できそつなんだ、唯の事よろしくね。後、和でいいよ」

そういうと満足したかのように真鍋…もとい和わ自分の席に着くとすげに担任がやってきた

昼休み…

「やつこや空也、今朝澪ちゃんと一緒だつたな」

「何で知つてんだ？」

「見たから」

「つざわくべ」

「うわせーお前にもてない男の気持ちが分かつてたまるかー」

「お前のがうるせえ。つーかどつかいけ」

「空也の……バカー……！」

大地が泣きながら廊下に飛び出していった。これで静かに昼食が食べられるな。それから午後の授業は寝てしまふ

放課後：

「クーくんー一緒に部活にいこーー！」

平沢が満面の笑みで近寄ってきた

「ああ

特に拒否する理由も無いので一緒に音楽準備室に向かった

「こないだねー」

「……」

平沢が元気よく挨拶するとすでに来ていた澪、律、琴吹がそれぞれ挨拶をした

「まさかクウがギターやってたとはなー」

律が俺のギターケースを見ながら言った

「えーーークーくんギター弾けるのー！」

「誰が初めてつったよ… ょつと…」

ギターのストラップを肩にかけアンプをつなげる

／＼

軽くストロークすると次はこの前三人が弾いていた翼をくださいを
ロック調に弾いた

「ま、軽くこんなもんだろ」

四人を見ると表情が固まっていた

「どうした?」

俺は首を傾げた。静寂を破ったのは澪だった

「すゞ…」

「ああ…」

澪と律が目をキラキラさせていた

「俺のことはどうでもいいが、琴吹、茶が零れてるぞ」

「え？ ああっ！」

今それに気づいたようで慌てていた

「やついえば、なんで澪ちゃんはギターじゃないの？」

平沢がふいに澪に聞いた

「ギターは……その……恥ずかしい……」

「恥ずかしい？」

「ギターはバンドの中心で自然と観客の目も集まるだろ？それを想像しただけで……もう……」「……」

ボフン！

澪の頭から爆発音がして澪は机に伏せた

「澪は恥ずかしがり屋だからな。まあギターはイケメンのクウだけどな～」

「俺はイケメンでは無いだろ」

「その顔で何を仰るのかな？クウがイケメンじゃなかつたら大地はどうなるんだよ」

「そうですよ。空也君はカッコいいと思います。」

琴吹がおつとりとした表情で告げた

「もうなんでもいいが、ギターは俺と平沢で、ベースが澪、キーボードが琴吹、ドラムが律だな？」

「つむぎさんばーリムって感じだね」

平沢の言葉に律が反応した

「私にだつて深い理由があるんだよ！」

「理由? どんな?」

平沢が目をキラキラさせながら律に聞いていた

「それは……その一ヵツコいいから」

「えー、そ'うなの?」

「だつてギターとかキーボードとか手でチマチマしてイーーーってなるんだよ」

律が全身で表現していた

「ムギちゃんは向でキーボーイかひかと思つたの?」

「私小さこじろからピアノを弾いてたの。」コンクールで賞も貰つた
のよ」

「（なんでそんなやつが軽音部にいるんだ？）」

俺の思いをよそに復活した澪が声を発した

「平沢ちゃんはもうギターリードでいいよね？」

「私もう澤ひやせんの」とを澤ひやんって呼んでるし、あークーくんも唯てよこでー。」

「じ、じゅあ…ゆ、唯…

澤が平沢に向かつて上田遣いで唯つて呼ぶと。丞先が俺に向いた

「じゅあクーくんもー。」

「唯、もう二からギターはもう置つたのか?」

あつさり唯とこうと唯は不満げな顔をして、なぜか澤も同じような顔をしていたが見なかつたことによつて

「空也君!私も私もー。」

「わかったよ。紬でいいんだろ?」

「はーー。」

何がそんなに嬉しいのか分からんが紬は「ハハハ」と笑つた

「ギターって値段じれぐらーするの?..」

「安いのなら一万円べらりこからあるが…

「安くても駄目だ、やうだな五万円べりこのを買えばーこみ

俺と澤がギターの値段について説明する

「じゃあクーベルは、どうぞしたの？」

「俺のは八万ぐれーだった中学の二年間必死で小遣いを貯金してたからな」

「そんなこするのーあのーりつちゃん…」

唯が笑顔で律に向いた

「部費で落ちませんかね？」

「おひめさん…」

唯がバツサリ切られ、元気をなくした唯に紬がお菓子で元気付けていた

「とにかくだ、誰に楽器が無い」と始まりんだぞ」

「じゃあ、今度の休みに音楽室見に行こうぜー」

律の提案に唯は頷いた

「俺もか？」

「当たり前だ。絶対が届なきや詳しいこと分からぬしな」

「やうですか…」

行くしかないよつだつたそして週末…

「行くぞー空也ー！」

俺がエスケープしないように澪が迎えに来た

「はいはい」

一人で待ち合わせ場所の商店街に向かっていった。商店街に行くと律と紬がすでに待っていた

「見せ付けますなあ、美男美女のカップルは」

「ヤニヤしながら寄つてきた

「り、律ー名に言つてんだー！」

「ヤニヤする律と慌てる澪の漫才を見ると唯がやつってきたが、人にぶつかり、犬を可愛がりに行つたりとなかなかたどり着けないでいた

「お金は大丈夫だったの？」

女子が一、三歩前を歩き、俺が後ろから付いていくと唯がふいに立ち止まつた

「今なら買えるー！」

ブティックのショーウィンドーに目を光らせていた

「楽器買つんだろー？」

律が連れ戻そつとすると、唯が店の中へ入つていつた

「澪、俺その辺の本屋に居るから帰つてきたら呼んでくれ」

「わかつた…」

女子四人はブティックの中に姿を消していった。俺は本屋の音楽雑誌を読み漁り、しばらくすると澪が迎えに来た

「！」めん、待たせた

「想定内だ」

読みたい雑誌を一通り読んだところで楽器屋に行くかと思えば喫茶店に入つていつた

「楽しかったねー」

だの

「へへー買つちつた」

だの唯と律は思い思ひの事を口にした

「次はどうにこなつか？」

「ここにはなんなことを言つ出した

「樂器だ樂器…」「

俺と澪は口を揃えて言つた

そんなこんなでやつとこも楽器店『10GHA』に着いた。これは品揃えがよく俺も頻繁に来ている場所である

「ギターがいつぱいだねー」

唯が感想を口にすると同時に俺は単独行動で自分が欲しい弦の換えやらその他諸々を物色し、唯に合ひそうなギターを探していると

「これいいんじゃね？」

価格が四万八千のネックが細めのギターを発見し、澪たちに合流した
「あつちにお前に合ひそつたギターが合つたんだが…それがいいのか？」

唯はあるギターに夢中だった

「止めはしないが払えるのか？ そんな額？」

値段を見ると一十五万と書かれていた

「うーん… わすがに手が出ないなあ…」

と言いつつも視線は離れなかつた

「私もあのベースを買ひとき相当悩んだからなあ

「あたしもあのドラムを買ひとき値切りまくつたしなあ

「店員さん泣いてたがな」

澪、律、俺がそれぞれ口にした

「あのー値切るつて?」

「欲しいものを安く手に入れるために努力と根性で安くさせたんだ」

紬の質問に律が自慢げに答えた

「す」「ーいーなんか憧れます!」

「「憧れる要素がど」「ー?」

そんなやり取りをしても唯はギターから目を離さなかつた

「じゃあ自分でバイトしようか! 唯のギターを置うためー!」

律が言ひ出した

「これも軽音部の活動だよー!」

「私やりたいです!」

律と紬が賛成し、唯も嬉しそうな表情だつた

「バイトか…」

澪は不安そうな顔で呟いたのを俺は見逃さなかつた。その日の帰り道

「 ～ ～ 」

律が先行し、俺と澪が並んで歩いていた

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「バイク

「不安はあるけど。唯の為、軽音部のためって思えるとできると思
う」

「せうか

俺は軽く笑うと逆に澪から話しかけられた

「空也も…ありがとうございます。心配してくれて

澪が俺に向かって笑った。その顔を見て俺は顔を背け

「澪とは長い付き合いだし……な

そっぽを向いて喋るしかなかつた

翌日の放課後…

「どのバイクがいいかなあ

全員でバイト探しをしていた

「ティッシュ配るのは?」

「無理…」

「ファーストフードの店員は?」

「駄目かも…」

律と紬の意見をことじとへ澪が却下していた

「澪にはハードルが高いかもなー」

律がフォローするとまた悪いことを考えたのか澪は頭から蒸気を発して机に伏せてしまった

「やれやれ…」

求人雑誌に田を通していくと澪でもできそつなのを発見した

「これなら澪にもできんじゃね?」

机に広げて俺が指差したのは道路交通調査の求人だった。これは比較的に人と関わり無くできるもので澪にも適していた

「車の台数や通行人の量を調べるんだよ。カウンターをもつてな。どうだ?」

それならと澪は頷き、週末の一日間は交通量調査のバイトが決まった

週末…

「……」

力チ、力チ、力チ

カウンターを押す音だけが俺たちの中で響いている

このバイトは総勢八人で行い女子四人、男子四人で別々の場所で調査している。俺の他には大学生と見られる明らかにがり勉の男三人で話すことが何も無い、よつて無言でカウンターを押している。向こうは俺を不良だと思っているらしく、ビクビクしている

「（やりにくいつたらねえな）」

仕方なしに鞄から音楽機器を取り出しイヤホンをつけ音楽を聴きながらカウンターを押していく

そんな感じのバイトが一日続き一日目の夕方

「「「お疲れ様でした」」」

バイト代を貰い頭を下げる一日八千円で一日で一万六千それが五人で八万、当初の五万を足してもまだ足りない

「分かりきった事だつたが、まだ足りねえな」

「そうだな、後何回かバイトするか」

「また探そうぜ」

俺、澪、律がそれぞれ口にすると唯が口を開いた

「私、やつぱりいいよ、このバイト代は誰それで使って。私は
クーくんの薦めてくれたギターを賣つよ、私、早く練習して誰と一
緒に演奏したい、だからまた楽器店に行くのにつきあって」

唯がそう言つたら俺たちは頷くしかない。バイト代を返却され唯は
帰つていった

それから数日後俺たちは『10GIA』にいた

「いやしだ

「よし、またバイトするか」

俺が案内をしてくるとやつぱり唯はあのギターの前で立ち止まつた

「やつぱりあれがほしいんだな」

澪と律が意氣込んでいたが紺が何かを閃いたようだった。なんとな
く察しつづがな

紺がカウンターから帰つてくれるとあのギターを五万で売つてくれる
とのことだった

「このお店のうちの系列なの」

「えー」「

紺の言葉に澪と律が固まつた

「やつぱり琴吹財閥の娘さんだつたか…」

「はい、天城グループの息子さん」

同じ調子で返してきやがつた。秘密にしていたのにな…

「「ええ…」」

澪と律はなお固まつた

「空也、それ本当なのか?…」

「まあな、俺たち直接会つた」とは無かつたが財閥の跡取りだ

「クウの家普通の家じやん!」

「贅沢する必要が無かつたからな」

そんな中何も知らない唯がギターを買って帰つてきた

「ただいま～皆何してゐの?」

「何もしてねえよ。まあ帰るべ

俺は踵を返して家路についた

翌日…

「ふんすー。」

唯がギターを持つて胸を張っていた

「ギターを持つと様になるな」

「何か弾いてみて」

澪と律がそれぞれ口にする

「うーん…」

唯が弾いたのはなぜか ルメラだった

「まだ練習してないのか?」

「ギターってなんかキラキラピカピカして触るの怖くって

「弾けよ」

「まだフィルムも外してねえしな」

それを見た律は一気に唯のギターのフィルムに手を掛けばがしてしまったショックを受けた唯に紬がお菓子で期限を取り戻させた

「どうやつたらライブみたいな音が出るのかなあ……」

「アンプに繋げればできるよ」

律が唯のギターをアンプにつなげ唯がギターをストロークする

「いいからやつとまじまる…」

「軽音部が…田標はでつかく卒業までに武道館ー。」

「それは無理だ」

俺の突っ込みに律はぶつぶつ言つていたが無視した

「やっぱ私にはまだはやいねー」

唯はアンプのコードを抜いていた俺はその瞬間鞄からイヤホンを
だしてノイズ セリングを起動した

とたんに爆音が流れ俺を除く四人が耳をふさいだ

「ボリューム下げてからじゃないといつなるんだよ」

「先に言つてよ~」

「クウ、卑怯だぞ!」

「正当防衛だ」

そんなこんなで唯もギターを買いやつとこれから桜高軽音部が始動
する

第三話（後書き）

アニメ第一話です

いろいろひとつ飛んだ設定になつております
ご了承を

唯がギターを始めてじばりぐが過ぎた…

「クーくん、こいが分かんないんだけど」

澪から渡された『サルでも分かるギター』とこう本を貰い、唯はその本を見ながら分からないとこには俺に聞きながら熱心に「一矢の練習に励んでいた

「ギターの弦つて怖いよね、細くて硬いから手が切れちゃいそう」

「やうだな。手の皮が柔らかいつちは手が血まみれになつてもおかしくはないが「キヤー——!..」ん?」

「澪ひやんどうしたの?」

唯が隅ついで小さくなつている澪に問いかけた

「痛い話は黙田なんだあ」

両手で耳を塞いで聞くえなそぶりをみせる

「澪ひしけな……」

そんな澪に唯がトコトコ歩いていて手を差し出した

「大丈夫だよ、澪ちゃん。本当に血が出てるわけじゃないから」

それを確認した澪は立ち上がり咳払いをした

「まあ、やつてゐるうちに皮膚が硬くなつてくるから大丈夫だよ」

「まうと澪は唯に右手を差し出すと唯は見当違ひの事を言つ出した

「本當だーふにふにー

澪の右手をぱにぱに押してこくと遂に澪のせつが恥ずかしくなつてあたよつて俺に田線だけで助けを求めてきた

「唯、練習再開するわ」

唯の首を掴んである手を引つ張つていく

「はあ……」

澪は助かつたようなため息をついていた。しばらく練習していくとお開きの時間になつてきたのでギターを片付け帰路についた

「せつこやもうすぐテストだな」

「やつだな」

「…………」

俺の言葉に頷く澪と無言で汗を流す律

「澪は大丈夫そうだな」

「あたしはあ……」

律が声をあげ抗議する

「俺の目を見て大丈夫って言えるか?」

「うう……」めんなさい…みーお~

ついに澪に泣き付いてしまった

「毎回だな」

「うむせークウー・中学から50位しか取れないのに…」

「じゃ勝負してみるか?そつちは澪に教えてもらひえよ」

「空也、大丈夫なのか?」

澪は心配そうに俺を見るが俺は黙つて親指を立てた

「律に負ける気がしねえ」

「そこまで言つならやつてやるー」

律が俺に向かつて拳を突き出した

「俺が買つたらハンバーガーのセットを奢れ、お前が買つたらハンバーガーのセットを奢る」

「いいぜ。」さすがに澪がついてんだ!」

「澪が証人だ。踏み倒しはきかねえからな」

そんなこんなでテストの点数を競うことになった俺たちはテスト期間に突入する

「負ける気がしねー」

それから数日、テストが帰ってきた

「ん~！テスト終わつたあ！」

「高校に入つて急に難しくなつたから大変だつたわ」

「そうだな、そしてもつと大変そうな奴がここに」

唯が力のない笑いで答えていた

「クラスでただ一人追試だそうです」

暗い顔で12点の答案を見せた

「うわあ…」

「大丈夫よ唯ちゃん、今回の勉強の仕方が悪かつただけだつて

「そりだよ。追試なんて余裕余裕！」

紬と律が励ましていたが数秒後に過ちだつたと気づかされる

「まあ、勉強はやってなかつたんだけど……」

「あたしの励ましの言葉を返せーーー！」

律が怒鳴つた

「ねえりつちやんは何点だつたの？」

唯がいつもの指定席で律に聞いた

「ふつふつふ。今回あたしは頑張つたのだよ。見よーーー！」

テストの答案には89点と書かれていた

「ここのりつちやんのキャラじやない……」

「今日はクウとの勝負してたからな」

「やつなんだ。澪ちやんとムギちやんは？」

一人から渡された答案を見ると律が絶句していたが俺を視界に入れるとニヤリと笑つた

「セーーて問題のクウは何点だつたんだ？」

「ん」

「あいたー！」

ピッヒテストの答案を紙飛行機にして律の机に当つた

「あくしょー負け惜しみしゃがつて…」

ガサガサと紙飛行機を戻していくと律の汗の量が多くなった

「澪に教えてもらひてそれではまだまだだな」

「空には何点だったんだ?」

澪が覗き込むと澪も驚愕していた

「あ…満点…」

「澪も紺もをして変わんねえだろ」

「やつだけど…」

律はずいと固まっていた

「これが実力だ」

ポンと律の肩を叩いた

「あくしょー…」

律は叫びながら準備室から出て行った

「でも中学のときまあんまり取つてなかつたのに一体どうしたんだ?

？」

その質問に答えたのは俺じゃなく紺だった

「でも天城グループの御曹司ですから、これくらいことは普通じゃない？」

それを聞いて澪が頷いた

「そういえばそうだったな

「中学のときはそんなことバレて無かったから、50点くらいで抑えてたんだよ。んなことより唯の追試を考えねえと」

すっかり忘れられた唯こもつ一度焦点を当てた

「確かに追試の生徒は合格点取れるまで部活でぐれねえりいからな

「やうなのー？」

「詳しことは明日告知されんだる。今ロベーリはみつけり教えて

「そつ言つて俺は長椅子から立ち上がりお開きになるまで唯にギターを教えていた

翌日…

「クーくんの言つとおりでした、一週間後の追試まで部活に出ひも駄目なんだって」

「言わんじひも駄目にな、しっかり勉強して来い。ま、今日のお菓子

「子ぐらいは食つてけ

今日のお茶菓子である羊羹を指差した

「うそー。」

「一〇一一〇しながら羊羹をたべる唯の前に俺の分の羊羹を差し出した

「やる

「ありがとー！ クーくん！

俺は長椅子に座りヘッドフォンをあてギターを持った

「空也何じてるんだ？」

「ん？ ああ、ちょっとな

曖昧な返事で澪は頭にマークを浮かベティータイムに戻つていった

今俺は夏休みに向け作曲中である。気が早いような気もするが現時点では唯が追試で練習できないし、夏休み中に練習できれば桜高祭で演奏できる。それをするためにも今からでも開始しないと間に合わないかもしれない、なんせ現時点で音あわせ自体出来てないのでだから俺は鞄からルーズリーフを出し思考を巡らせる。しばらく考えてみると紬が田の前にいた

「お茶はいかが？」

俺に紅茶を差し出してきた

「ああ、サンキュー」

素直に受け取り、一口飲む

「ん、うまい」

「よかつた～」

感想を聞くと笑顔を見せ自分の席へ戻つていった

一息ついた後に作曲を再開するがお開きまでまるではからなかった
翌日以降、唯は部活に顔を見せなくなつた残りの三人は唯の心配を、
俺は作曲に専念していた

そして田は過ぎ追試前田…

「澪ちや～ん。勉強教えて～」

唯が澪に泣きついてきた。どうやら勉強できなかつたようだ

ダダダダダッパン！

「空也、勉強教えてくれ！」

大地が準備室に駆け込んできた

「うちのクラスの追試つてお前だつたか

「頼むよ～。空也しか頼れないんだよ～」

「わかったわかった。部活上がりにお前んち行つてやるから、家で待つてろ」

そういうと大地は頷いて準備室から出て行った

「やれやれ…澪は唯を教えるんだろ」

「ああ、このままだと唯が退部にならうだからな。唯の家でみつちり教える」

「澪ひやーん…」

唯が抱きついて感謝を表していた

「なら今日もさうしてやれ。少しでも時間が長いほうがいいだろ」「空也まだするんだ？」

「俺はあの馬鹿を教える。まあ、アイツが退学にならうと知ったことは無いが」

そつこつしている間にも俺はギターをケースにしまい立ち上がった

「じゃあな。唯しっかり勉強しろよ？俺達と軽音部続けたいならな

それだけ言つて準備室を出てドアを閉める瞬間に

「また明日なー空也ー！」

澪が笑顔で言つていたので澪に分かるように右手を上げて応えた

「行きたくはねえがな」

階段を下りながら、鞄からヘッドフォンとルーズリーフを取り出した、ヘッドフォンからは出来かけの曲をルーズリーフからの譜面を出し考えながら大地の家にむかった

大地宅…

「あら空也くんいらっしゃい」

「どーも。大地は？」

部屋に居るわよと家に招き入れられ、大地の部屋に入る

「空也ー待つてたぞー」

あらうことがゲームをしてやがった

ブチッ

無言でコードを引っこ抜く

「ああっーなにじやがるー」

「それはこいつの台詞だ。わざわざお前如きの馬鹿のために来てやつたんだ。勉強しやがれ」

「お前言葉に棘しかねえ…」

大地はしづしづ勉強をはじめた。そして俺はコードを繋ぎゲームをはじめた

「教えてくんねえの？」

「質問は五分に一回受け付ける。自分の分かる範囲でやつてみる」

大地は素直に従つた。このペースで勉強を教えていき七時頃にはある程度まで問題を解けるようになった

「こなだけできつやあ充分だ。あとは明日結果を出すだけだ」

「くわやー！」

大地が俺に飛びついてこよどしたが避けた

「男に、ひともあらうかお前に抱かれて喜ぶ趣味はねえ。俺は帰るぞ」

そう言って大地の家からるとケータイが震えた

「なんだよ」

ケータイのディスプレイには律と書かれていた

「クウモ」「ひうね」など?

「は？」

「だから唯の家にだよ」

「何で俺が、唯を教えるのには澪がいるだろ？」

「いいからーいつも唯と別れるといひで待つてるからな」

それだけ言って律は電話を切ってしまった

しばらく歩いていると律を見つけた

しばりく歩いていたと律を見つけた

「仕方ねえ、いくか……」

「遅いぞー！クウー！」

「やつや悪かった。さつとと行くぞー！」

俺は唯の家に向かつて歩き出した。律は俺の横に並んで歩き出した

「最近や、お前何してるんだ？」

「人に物を聞くには説明不足だな」

唯の家に行く途中で律が聞いてきた

「部活でだよ。澪やムギが聞いても曖昧な事しか言わないじゃん」

「今の段階ではまだ話せないな

俺の言葉に律は不満げな顔をしたがすぐ笑顔になつた

「音楽だけは真面目だからな。話せる時になつたらちやんと話してくれよな」

見透かされたような気はしたが素直に頷いた

「ううだい」

雑談を繰り返していくと唯の家に着いたようで律はインター ホンを押していた

「律さんおかえりなさい」

唯に似た少女が出迎えてくれた

「誰?」

「妹の平沢憂です。よろしくお願ひします空也さん」

少女と俺の目が合つと少女は礼儀正しく自己紹介してくれた

「うー寧にヒー も。天城空也だ、よろしくな」

「お姉ちゃんからよく話は聞いてます。ギターを教えてもらつてるつて」

平沢妹からスリッパを出され俺たちは唯の部屋に向かつた

「皆一クウが来たぞー」

律が先頭に次に平沢妹、最後に俺の順番で中に入つていった

「和?」

そこには軽音部のみならず和がいた

「こんばんは、空也」

適当な所に腰を下ろすと平沢妹がお茶を差し出した

「空也さん、お茶どうぞ」

「ああ、サンキュ。しかし出来た妹だな」

「でしょークーくん! 豊~クーくんに褒められた~」

唯が平沢妹にくつつく

「別に唯を褒めてるわけじゃないんだが」

この言葉に平沢妹が反応した

「お姉ちゃん男に人に呼び捨てにされてるんだ。凄ーい! いいな~」

今度は平沢妹が姉を称えた

「私も名前で呼んでもらっていいですか?」

田をキラキラさせて平沢妹が迫ってきた

「じゃあ憂ちゃんでいいか?」

はい、と満面の笑みで返され律が眩しがつていた

「で?俺をここに呼んだ理由は?」

「特に無いぞ」

澪が予想外のことと言い出した

「帰つていいか?」

「それは駄目だよクーくん」

「駄目です」

唯と紬が拒否した

「大変ね、空也も」

「和だけだな分かつてくれるのは。」

それからしばらくなで雑談し不意に俺と和の口が揃つた

「「そんなことより勉強は?」」

俺と和以外の全員が黙ってしまった

「澪……忘れてたな？」

「ハハー。」

澪は慌てていた

「はあ……わつわと教えられて待つてやるから」

わつこつて立ち上がった

「あ……ああー。」

澪は笑顔で返事したのを見ると軽く俺も笑った

「憂ちゃんむっこい、お姉ちゃんの邪魔になるからな

「はーー。」

「じゃあ私も帰るわね」

和も立ち上がり帰る支度をしていった

「また明日な和」

「ええ、空せてもおやすみなわ。またね憂」

玄関で和を見送りリビングに向かう

「空せよ、お茶いかがですか」

「あつがと、いただくよ」

憂ちゃんとしばりへ雑談していると律が下りてきた

「憂ちゃんなんかゲームしない?」

『ひかり居心地が悪くて降りてきたようだ

「いいですよ」

憂ちゃんがそこつと一人はゲームをやりだした俺はギターを弾くのはさすがに迷惑なので文庫本を読んだしばりゅうと漆と紺が下りてきてお開きになった

「遅くまで悪かつたな」

「いえ、皆さんまた来てくださいね」

漆と憂ちゃんのやり取りを横田に全員が出て最後に俺が出ようとすると

「[空せ]さん、連絡先交換してくださー」

とケータイを差し出してきた。漆たちに先に行つてくれと図して俺のケータイを出して連絡先を交換した

「またな。憂ちゃん」

挨拶を済ませ家を出て漆たちに追いついたそれから紺と別れ、いつもどおりの通学路を三人で歩く、夜も遅いので一人を家まで送る

「姉ちゃん、遅かったね」

と律の家の前まで来ると一人の男の子がいた

「澪たちと遊んできたんだ~」

男の子がこいつらを見ると笑顔にしてこいつらに向かってきました

「兄ちゃんーまた一緒にゲームやねー！俺強くなつたよー。」

意気揚々と言つた感じで俺に向つてきた

「また今度な。聰

聰といつ少年は律の弟でなぜか俺のことを兄ちゃんと呼んで慕われてゐる

「じゃあ、また明日な律

「澪もな。クウー夜が遅いからつて澪を襲うなよー。」

「つー律———」

澪が顔を真っ赤にして抗議していた

「近所迷惑だ。じゃあな律、聰も

澪の頭を軽く叩き律と聰に挨拶し歩き出した

「姉ちゃん、やつぱりあの一人仲好いね」

「そうだな、澪が男子でただ一人ありのままの自分で居れるのがクウだからな」

この姉弟がそんなことを言っていたなんて知る由も無かつた

「ありがとな空也」

「ん?」

「唯の家に来てくれて、今まこいつを送つてしまつてるし」

澪が不意にそんなことを口に出した

「別に礼を言われるようなことはしてねえよ。俺がそりやうたいからやつてるだけだ」

「それでもありがと」

「ああ……」

街灯に照らされ満面の笑みを浮かべる澪を直視できなかつた

田を置けそう口にしたが氣が氣じや無かつた

翌日の追試で唯は見事に満点をとり追試をクリアした後不本意ながら大地もギリギリでクリアした

「さて、勉強中もコードの練習に励んだと言つ話だから。軽く弾い

てからおつか

「どんとこだよクーくん。XでもYでも」

X? Y?俺と澪は顔を見合わせた

「じゅあ…」

と澪は「一ノ瀬の名前をいつこべが誰の手が止まつていた

「わすれちゃつた…」

「ここはいきなことを聞こ出しちゃつた

「また一からかよ」

「じゅあ空せ後ろよひじへ」

「待てー、お前も付きてらへ

澪の首元を掴み強制運行したのはいつまでも無い

第四話（後書き）

アニメ第三話です

結構話を膨らませてみました

第五話

夏休み直前のある日……

「ん? なんだこれ?」

「どうしたんだ? 空也……」

澪と二人音楽準備室にいた時に見つけた段ボール箱その中身は昔の軽音部の物だった、その中に一つの桜高祭と書かれたテープがあった

「空也、このテープ再生できるか?」

「ちょっと待つてる

そういうって俺は鞄の中から小さなラジカセを取り出し、テープを入れ再生ボタンを押した

～～～

「上手いな

「私たちも……」

この時澪の中に何かが湧き上がっているのを確認できた。まあ負けず嫌いだしな、対抗意識しかないだろ

その日の放課後……

「合宿をします……」

澪がビシッと指をさして決めポーズをとった

「合宿?」

唯が首を傾げた

「もうすぐ夏休みなんだし

「もしかして海?それとも山?」

律が的外れのことを口こした

「遊びに行くんじゃねえよ。朝から晩までみっちり練習…だろ?」

澪は頷いたがすでに一人は聞いてすらこなかった

「うわあーなに着ていい?」

「水着も持つていかなきゃな

「聞け——————!」

案の定澪は怒鳴ったとおりあえず全員を指定席に座らせ俺は長椅子に座る

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭ですよー。」

「学園祭……」

「せつ桜高祭の軽音部のライブは結構有難かったん…だぞ…」

澪の言葉が尻すぼみになつてこゝのに対し律と唯は皿をキリキリさせていった

「ほーはーーー！…私メイド喫茶がやりたーーー。」

「えへお化け屋敷がいいよ~」

律と唯はまた違う方向へ脱線して囁いた

「考えても見る唯、澪にメイド服を着せてみろ」

その言葉を聴いて俺の中で澪にメイド服を着せてみる……って俺まで脱線してじづすんだ

「ライブやるんだろっ。」

いらん想像をしてこいた律は澪の拳骨をへりへり怒鳴りあれてこたその時紬が遅れてやつてきた

「ムギはどう思つへこくらゆつへつやつてこいつとは言つたつて三ヶ月にもなるの。まだ全員で音あわせしてない」と

確かに内部して三ヶ月になるがまだ一度も全員で音合わせをしていない、澪や紬とは何回があるが…

「でも…楽しめますね。皿でお泊りする夢だったのー。」

なんとも小さい夢だな

「じゃあさー海がいい? 山がいい?」

律はまだ遊びに行く気満々だった

「遊びに行くんじゃないってのー」

「でもさ、こへり立するんだろ」

唯が核心をついた

「せつだぞ、スタジオ代も」「めぬといへり立すると思つてんだよ」

「そ……それは……」

その部分を突かれるとなすがに澪は黙つてしまつたがなんとか打開策を思いついたようだった

「ムギキ……別荘とか……」

「ありますよ」

「…………あんのかい! ……」「

紬の隠す事のない告知に紬と俺を除く二人がツツッこんだ

紬の鶴の一言で軽音部の会場はほとんど拍子で決まったそしてその

日の夜…

「親父」

「ん?」

「夏休みに入つたら軽音部の合宿に行くから」

「さうか、どこに行くんだ?」

「琴吹財閥の別荘」

「おーそうか! 琴吹さんとこか! ハツハツハ! 楽しんで来い」

親父は高笑いをして自室に消えていった。そして合宿当日

「ギターは一つとも持つていくか?」

右肩にエレキを左腕にアコギを右腕にキャリーバックを持ち集合場所に向かつた

集合場所に到着すると唯を除く全員が集まっていた

「おはよっ。空也、なんでギターケース二つなんだ?」

「エレキとアコギだ」

「二つも持つてたんだ」

「合宿なら使うかもしねえしな」

しばらく雑談し集合時間が過ぎたが唯の姿がなくケータイも通じない

かつた

「寝てるな」

俺はケータイを取り出して憂ちゃんに電話をかけた

「もしもし」

「憂ちゃんが起きちゃったよ。お姉ちゃん起きてくれるかな?」

「今日から合宿でしたよね。すぐお姉ちゃん起きりますー。」

憂ちゃんが慌てて階段を駆け上がり唯の部屋に入り唯を起こし、電話は繋がっていたので唯に代わってもらった

「もしもし……おまわり」

「オハヨウガイヤマス……」めんなさい…

「ギコギコ聞こねえ」

ケータイから唯の謝罪の言葉を聞き流して集合場所にやつてきた

「全く、空也が憂ちゃんの電話番号じりなかつたひどいつってたことか」

唯が安堵の表情で凌が呆れた表情をしていた

「でもクウ、よへ憂ちゃんの番号じつひだな」

「前に唯の家に言つた時に交換したんだよ」

通路を挟んで反対側に座っていた俺はそつ答えた。なぜか澪が複雑な表情をしていたが見なかつたことにしよう

しばらく電車に揺られ海が見えて律と唯がはしゃぎ別荘についた

「「めんなさい。一番小さい」とこりしか備りれなかつたの」

と紬は謝つていたが澪、律、唯には充分大きいといった感じだった

「ま、高校生にはこんなもんだろ」

「　」「えー」「　」

俺の言葉に二人は驚いていた

「もしかして空也の家つて……」

「超金持ち?」

澪と律が紬に聞いていた

「はいー!」

「　」「……」「　」

紬の即答に一人は黙つてしまつたそれから別荘の中を見て周り、冷蔵庫を開けると高級な牛肉が入つていたそこに「空也へ」と書かれたメッセージカードが入つていた

「なんだ？」

「俺からのプレゼントだ！…父」

「あのくそ親父…」

裏から手を回してやがつた…

「悪いな、紺。うちのくそ親父のおかげでいつも普通ではなやうだ」

「いえいえ。天城グループのお気遣い感謝します」

二人が礼儀正しくお辞儀した

「なんか世界がちがうなー」

律が遠い目をしていた

「ムギ、スタジオはどこなんだ？」

「上うちはです」

紺の案内に俺と澪はついていった。律と唯がついてこなかつたが、どうせ水着に着替えているのだろう田の前海だしな

「しばらへ使ってないけど」

前置きをして紺がスタジオのドアを開けた

「空也」

「ああ

ギターを取り出しアンプに繋ぐ

ジャーナン

「問題ないな……」

そのまま題名のない曲が作った曲を弾く

「空也君はやっぱり上手ですね」

「空也」が居てくれると誰を引っ張って貰えるから助かるな

その言葉を聽かつて通り弾き終わる

パチパチパチ

「わすがくつ「遊ぶぞーーー！」もつー。」

澪の言葉を遮り律と唯が水着で入ってきた

「いのなる」とは分かつてたけどな

「せうだぜークウー田の前に海があるんだから泳がないと損だぜー。」

「練習しに来たんだるーーー。」

俺、律、澪の順番で喋ると紺も遊びたそつな田をしていた

「ムギー！ 行くぞー！」

「待つてるから… まよつと待つて～」

律、唯、紺は行つてしまつたふと横を見ると海に田が行つてこむ澪
がいた

「澪も行つてこよ」

「だつてここには練習に来てるんだし…」

「その気持ちはわかるが、なかなかこんなプライベートビーチみた
いな所には来れねえから今のうちに存分に遊ばねえとな」

澪の背中を押し手助けする

「なら空せも来てくれ」

「ああ。 わかった」

笑顔で答え澪は着替えにいった

「さて…」

誰もいないこの時に新曲を軽く弾いておくか…

（ ）

フル「一ラスではないが悪くないな… まあ澪たちが待ってるから着替えるか…

「やつときたせーおーいクワーー…

水着に着替え浜辺に出ると海で律と唯が手を振っていた

「はーはー

軽く手を振りパラソルの下で腰を下ろす

「遅かったな。何してたんだ?」

澪が隣に腰を下ろした

「ん? 新曲のチェックしてたんだよ、まら唯が追試で来れない頃からやってたやつだよ

「あれって曲を作ったのか?!

「まあな。今やつてる一曲だけでは物足りないしな、後で譜面渡す

よ

「ああ、楽しみにしてる」

澪は嬉しそうに走っていった

「澪ちゃん嬉しそうでしたね」

「やうだな。あこつは何事にも眞面目すぎるへりこだからな

紬が反対側に座った

「それは空也君もでしょ？」

「」こと音楽に対してだけな。澪とは普段の部活から合わせてやつて
るから、澪の考へることは大体分かる

「クスッ 本当にそれだけ？」

紬が覗き込んできた

「うむ

田を合わせるのが嫌で田を逸らした

「私ね、空也君みたいな生活が送りたかったの」

「え？」

「私の家は空也君も知つてるとおりだからなかなか普通の生活がで
きなかつたの」

「だから眞でお泊りするのが夢だつて言つてたのか」

紬は頷いた

「小さい頃私と同じ様な家の子が普通の家に暮らしてゐて聞いて
羨ましかつた

「それって俺か？」

「うん、お父さんの話で聞いただけだつたけど本当に羨ましかつた。だから…今こいつやって皆で遊んで皆で『』飯を食べる。それだけですつごく楽しいの…」

それを言つ紬の顔はとてもすがすがしい顔をしていた

「なら…もつと楽しまなきやな」

俺は立ち上がり紬に手を差し出した

「うん…」

俺の手をとり立ち上がつた紬は元気よく遊びに行つた、軽音部の女子四人が一緒に遊んでいるのを確認すると俺は別荘に戻つた

手早く着替えを済ませ、時間を見ると夕食の準備をする時間だつた。親父のあまり嬉しくないプレゼントの肉の塊を取り出し一人分にカットしていく。カットが終わると米を洗い炊飯器にセットする。ご飯を炊いている間に付け合せのサラダやスープを作つていくベランダから海を見れば四人の姿が見えなかつたのでカットした肉を焼く準備に取り掛かる。

「こんなとこにいた！」

澪を先頭に四人がリビングに入ってきた

「もうちょっと待つてろ。後は肉焼くだけだから

「これ空也君が作ったの？」

「ああ、そうだけど？」

「これ凄くおいしい…」

紺がスープの味見をしていた

「あの肉の塊が綺麗にカットされてるぜ」

律が肉のチェックをしていた

「ちゃんど」飯も炊けてる！」

唯が炊飯器を開けていた

「澪ちゃんど」飯入れてくれ。肉を焼いてしまうから」

厚切りにしたステーキを五枚暖めてある鉄板に乗せ上からブラックペッパーとニンニクをかけ両面を軽く焼けたらカットし別で暖めてあつた一人用の鉄板に乗せる

「ほいできた！」

一気に五枚分焼き全員そろって食べる

「うまい！」

「美味しいね！りつちゃん」

律と唯は「飯をお代わりして夕飯を食べる

「スープも具にしつかり味が浸みてる…」

「お肉が絶妙な焼き加減で舌の上で溶ける…」

澪と唯一舌が肥えてそうな紬からも大絶賛だった

「ふう～食つた食つた

「おいしかったね～クーくんの『』飯

「口元合って何よつだ

キッチンで洗い物をしながら答えた

「空也、洗い物くらい任させてくれてもいいのに

「じゃあ洗つた食器拭いて片付けてくれるか?」

「わかった

テキパキと動く澪を横目に俺は食器を洗つていいく。紬が問題発言するまでは…

「まるで新婚さんみたいね

途端に澪の手から皿が落ちていく

「あぶねえ！」

とつをこ目にアツチをキヤッチする

「ななな何言つて…」

澪の動きがギクシャクしだして一気に危なつかしくなつていく
「澪」

「ななな何だく、空也…」

顔を真っ赤にさせた澪が振り向いた

「もうこいよ。ありがとな

澪の手から皿を預かる

「先にスタジオで練習してくれ。これが終わったらすぐここ向かう
から」

澪は、ギクシャクしながら領きスタジオに歩いていった

「ほひ、お前らも先に行つてろ」

「はーい…」

「ちえ…今日はもう疲れたよ

「先に行つてますね空也君」

二者二様の答えが返ってきてスタジオに歩いていったそれを確認すると俺は黙々と家事を終わらした

スタジオにつくと律と唯が床に寝そべっていた

「遊びすぎだな」

「[空せ]もムギもちゅうと耳を塞いでてくれ」

澪がベースアンプを一人の頭元に置くとボリュームを最大にした。俺はヘッドフォンを紺に着けさせ電源を入れ、俺は耳栓を着けた。途端に耳栓を着けても分かるぐらいの振動を感じ、二人が飛び起きた

「起きたか……ほれ」

起きたのを確認すると、全員に新曲の譜面を渡した。歌詞はまだフルコードができないので書いてないが

「紺みたいにパツとできたわけじゃないが、あの曲とこれの一曲や
うづひ」

マスター テープが無いので全員の目の前で演奏する

「どうだろうか？」

曲が終わると意見を求めた

「私は良いと思つ

「カツケーーー！」

「カツコーいねー」

「私も好きです」

高評価を受け俺は胸を撫で下ろした

「よーしゃりうづーー」

完全に目が覚めた律を中心にまだタイトルの無い曲の通し、新曲『Funny Bunny』の個人練習に励んだ

「疲れた…」

「少し休憩するか…」

律がステイックをドラムに置き床に伏した。時計を見ると結構長い間練習したので流石に俺も軽く疲れていた

「外に涼みに行こうぜー」

俺もギターを専用のスタンドにおいて軽くストレッチした

律と紬、そしてなぜかギターを持って出て行く唯

「ひとまず俺らも行くか」

「そうだな」

二人でスタジオを出た

「そういうやスイカがあつたけど食うか?」

「ああ、頼む」

それを聞くと俺はキッチンに入つて冷水で冷やしたスイカを水から取り出し五等分して皿に乗せて御盆にのせ塩を取つて外に持つていく

「ほれ

御盆に乗せたスイカをテーブルに置いて一つを澪に渡す

「ありがと」

澪が受け取つたのを確認すると俺も一つとつて澪の隣に座る

「何やつてんだ?」

「さあ?それやつたら練習に戻るからなー!」

「分かつてるつてームギーそっちいいか?」

「うん!」

「せーのー!」

律の合図と同時に紺が点火し唯の後ろから噴出花火が上がった

「最後の曲ーーいつくぜーー！」

ライブの真似事なのだがその光景は充分感動的なものを感じ取った

「空也、セイのワジカセ取つてくれないか」

澪は今聞かせるのが一番だと判断したよつだ

「ああ…」

「ワジカセを澪に渡す

「田指せ武道館ー！」

律が拳を突き上げたの同時に澪が再生を押した

「武道館田指すなら」れぐりこ出来る様にならなことな

「上手いもんだな

しばらく聞いていたとどめない声が聞こえた

『お前が来るのを待っていたあー…ギャー…』

ベビメタの音楽だった

「ん？」

俺の背中に澪が張り付いていた

「聞こえない聞こえない聞こえない…」

聞こえないと連呼していたそれを見た律は悪い顔をして澪に近づいていった

『膝の皿屋敷』

— 二十九 —

膝の皿の内側にフジツボがひっしり

「...」

遂には俺に抱き着いて泣いてしまった

一 律：惡ふぞけしそぞ

軽く律を睨む

「ごめんなさい…」

抱きつく澪の手を取り後ろを向く

「澪、大丈夫だ。お化けなんていねえよ。大丈夫だ」

手を握つたまま澪を慰める

「グスツ…ほんと？」

涙を両手にこぼしに溜めて上田遣いで見てくる

「「か、可愛いー！」」

「……」

律と唯が少し遠くでそれを言つたが目の前でやられている俺にはほとんどない破壊力である

「お…俺、先に戻つてるから…」

手を離し、慌ててスタジオに戻る

「今のは駄目だ…今のは卑怯だ…」

俺の顔が真っ赤になつてたのが手に取るように分かつたので元に戻るまでギターを弾いていた

「クーくふどうしたんだろ?」

「澪のあの顔を真正面から見たからな、あの破壊力はすさまじいぞ。お、スイカあるじゃん! 唯食おうぜー!」

律が冷静に分析していくことすら知る由も無かつた

しばらくすると澪たちが戻ってきたが澪はまだ拗ねていた

「澪、悪かったって」

「つーん…」

そんなに可愛く拗ねないでください、俺が持たん…

「ねえクーくん」

「ん？」

「わっしきのカセジトのギターってそんなに難しこの？..」

「もしかして弾けるのか？」

「うふー！みてー！」

俺の田の前でわっしきのリジカセの音と同じ音を鳴らす誰がいた

「じゆー..」

「ちよつと待て……紺

「はー？」

「ちよつと適当にキーボードを弾いてくれないか？で誰は聞いた音
をギターで鳴らせ

「「わかった」「

まず紺が適当にキーボードを弾き、終わった後で誰が俺が聞く限り
完璧な音で弾いていく

「どうだ？」

紺は頷くだけだった

「絶対音感か…」

馬鹿と天才は紙一重といつがまさかここまでとはな

「絶対音感?」

唯が首をかしげた

「いや、わかんねえならいい。練習しようつか…」

それからじぱらり練習しお開きになつた

「ふう…」

俺は今大浴場に浸かつている。女子たちは外付けの露天風呂に入つてゐる

「今日は長い一日だつた…」

本当に長かつた…おかげでいろいろな事を知つた充分収穫はあつた
律も唯も明日は練習してくれるだらうかして…いま何故か澪の上目遣いのあの顔が出てきた

バシャ！

「いらっしゃる前にさつわと出よつ」

むづぱりとした気持ちでキッチンに向かうと誰だかわからない少女

がいた

「誰？」

「あたしだよー。」

そういうつて前髪をあげる

「なんだ律か」

「なんだたあなんだークウはぜんぜん変わんねえな

「それが俺の売りだ」

コップに牛乳を注ぎ一気に飲み干す

「今日は疲れた……俺は寝るぞ」

「澪なら外で涼んでるぞ」

俺は右手だけ上げて応えたバルコニーに出ると律の声がいたり澪がいた

「寝ないのか?」

「あ、空せき……ちよつと涼んでるだけだ

「もうか……」

澪のとなりで手すりに背中を預ける

「空也は、合宿に来て良かったか?」

澪が景色を見ながら俺に聞いてきた

「なんだ? いきなり…」

「いや、思つただけだ」

俺は立ち上がり、澪と同じように景色を眺める

「一言で言つなら良かつた。まだ練習不足とかそういう要素は有るが、バンドをやるに欠かせないチームワークがより一層高まつたとは思つ」

「ああ…私も空也の知らなかつた所も知つたし唯やムギの事もな」

「他者の全部を知らなくてもいい。ただ一つでいいんだ」

「え?」

澪が俺の顔を見た

「ただ一つそいつの心の底にある想い、それを知ればいい。唯みたに天真爛漫な生き方が全員できるわけじゃない、どんな形であれそいつの心の底にある想いは表現しているそれを汲み取つてやる事だ」

「……」

澪は黙つて聞いていた視線を俺から離さず

「やつぱり空也は優しいな」

そうこつて澪は笑つた

「ガラじゅねえな。じゅあ俺は寝るから」

澪の頭を撫でバルコニーから戻ろうとする

「おやすみ、空也」

俺は右手を上げ応え、自分に当たられた部屋に戻つた

翌日.. 田中は海で遊び、夕方から練習とつ田程になつた三田の
午後の電車で帰るので三田の午前中も練習になつたみつちり練習
し家に帰る頃にはヘトヘトになつていた

数日後律が澪に見せてはいけない写真を見せて意識を落とされてい
たのは知つた事ではない

第五話（後書き）

アニメ第四話です

途中で出てきた曲は実際にある曲でいい曲なので興味がある方は検索してみてください

第六話

合宿も終わり、夏休みも中盤に差し掛かってきたある日

「[空セ]でかけるぞ。準備しろ」

親父が俺の部屋にノックも無しに入ってきた

「ノックぐりこじりよ

「お前なんぞに持ち合わせるマナーは無い

仮にもアンタの息子だぞ…まあいい

「で…ど」「行くんだ?」

「パーティだ！」

親父は勝手に俺のクローゼットからタキシードを取り出し俺に渡してきただ

「！」遠慮します

「それは受け付けん！五分で着替える。もつ下に使いの者を用意したからな」

それだけ言つて親父は部屋から出た

「俺の意見はまるで採用されねえな

渋々渡されたタキシードに着替え、待たせてある使いの者…もとい
大地の父だが…の所に向かつた

「久しぶりだな、空也君。大地が空也君が軽音部に入つてから話す
機会が無いつて寂しがつてたよ」

大地の父…不動英雄ふどうひでおさんが車のドアを開け待つていた

「なんこと俺の知つたこつちゃねえよ。で?今日ははどうのパーティー
に行くんだ?」

車に乗り込み、英雄さんが運転席に座る…といつよつ親父はビリヒ
行つたんだ?

「今日は我が天城グループと琴吹財閥のパーティだよ」

「琴吹財閥とうちは関わりないだろうが」

紬と俺の家はお互いが巨大財閥でお互いに名前を知つてゐるだけで
本格的な関わりはなかつた

「空吾から聞いたんだけど、この前、空也君と琴吹財閥の『令嬢が
軽音部の皆さんと一緒に合宿をやつたそうじやないか』

英雄さんの言葉に頷いた。ちなみに空吾といつのが俺の親父の名前
である

「空吾は元々琴吹財閥に興味があつてね、アプローチを掛ける絶好
のタイミングになつたそんなんだよ。いつもなら代理の者を立てる

んだけど。」の時は空也君が琴吹家に出向いてね

「や」「で意氣投合したわけか…」

「ははは、さすが空也君、理解力があつて助かるよ」

「親父の事だ、これを機に本格的に琴吹財閥と親交を深めるつもりなんだろ」

英雄さんは頷いた

「空也君はああ見えて会社の経営手腕はすごいからね」

「知ってるよ。親父がここまで大きくしたんだから」

「そして、それは空也君にも受け継がれてる。その理解力と洞察力は空也君を遥かに凌いでいる、天城グループはまだまだ大きくなるよ」

「気持ち悪いよ。英雄さん」

英雄さんは軽く笑うだけだった

「さあ、着いたよ。琴吹家だ」

英雄さんがドアを開け紺が出迎えてくれた

「空也君、お待ちしておりました」

パーティの衣装らしくドレスを着ていた

「紬、合宿以来だな。ドレスよく似合つてゐるな」

「あつがとうござります。空也君もタキシードよく似合つですわ」

紬と共にレッドカーペットを歩く、会場に入ると俺たちでお辞儀をされ会場の中心に招かれる

「だからこいつのは嫌いなんだ」

会場が俺たちを一個人と見ない、見てるのは俺や紬の父を見ている、それが嫌だった。音楽なら…バンドなら俺を俺として見てくれ…俺といつ存在を確認できる、俺はここにいるんだと…

「やっぱこいつのは嫌いだった?」

紬が心配そうに俺を見てくる

「いや、そろそろこれにも慣れなきゃいけない…俺個人として見られなくてもな」

「そうですよ、空也君には不安そうな顔は似合わないわ、もつと自分に自信持つてください」

「ああ、ありがとな」

紬に笑顔を見せ、シャンパンを手に取る。もつひん俺達にあわせノンアルコールである

「おお紬!」にいたか

奥から高級そうな和服を着た初老の男性がやつてきた

「お父さん、ひかり天城グループ会長の御曹司で」

「天城空也です。この度はお招きいただき感謝します」

シャンパンを置き深々とお辞儀する

「ははは、空也君。そんなに悪まる事はない。むつと氣楽に」

「あつがどひじれこまか」

俺は頭を上げた

「うむ、空也さん良く似ている。大きめにしてすべてを包み込む大空のような田だ…資質は空也さんを凌ぐものを持っている…どうだ~うちの紬を嫁にせんか」

「お、お父さん!」

爆弾発言に紬が慌てていた

「俺はそういう政略結婚みたいな事は好きじゃないです。お互いの為にもなりません、金儲けのためだけに結婚をしたくありません」

俺ははつきり紬の父にそう告げた

「ははは、やうこつと思つたよ、同じ事を空也さんから言われた。いや、試すような事をして悪かったね。私も政略結婚は好きじゃないそれでは子供たちに申し訳ないからね。空也君ははつきりしてい

ていいもつ一人前の男だね』

『いえ、そんなことは…』

『謙遜する事はない、それは君の父も言つていた事だ。『あいつは俺よりも人の上に立つ資質があるって』ね』

『親父が…』

『ああ、まあせつかくのパーティーだ楽しんでいきなさい』

琴吹父がそういって去つていった

『「1」めんなさい…父が』

紬が謝つてきた

『いや…いい親父さんだ。しつかり紬の事も考えてた、あの人なら俺の親父が興味を示す理由が分かる気がする』

『空也君…ありがとう』

紬が頭を上げ笑つた

『礼を言われるような事は言つてねえよ』

飲みかけのシャンパンを手に取り一口飲む

『やうだ。空也君せつかく会つたんだし音合わせしない?』

「構わないが、俺ギター持ってきてねえぞ？」

「向こうにあるから大丈夫よ」

紺に連れられスタジオに入つたそこにはキーボードやピアノ、ギターにヴァイオリンといった楽器が置いてあつた

「ヴァイオリンか…」

ヴァイオリンを手にしクラシックを弾いていく

「なら私も…」

紺がそれに対抗しピアノに座つて俺に合わせるその時少しスタジオの扉が開いたのを確認できなかつた

一通り弾き終わるとスタジオの扉が勢い良く開いた

「親父…」

「お父さん！」

お互いの父親が入つてきた

「さすがだな空也。ギターやめてやつぱりヴァイオリンにしないか？」

「空也さんこれやらない手は無いですよ」

琴吹父がすぐに係りの者を呼び俺たちはパーティ会場のステージに

上げられた

「ソルジャーでさつきのを弾いてくれるかい？」

「俺は別に構わないが、紬は？」

「私も大丈夫」

琴吹父に承諾の意思を示し、ステージの幕が上がる。そして親父がナレーションをする

「（）来場の皆様、予定を変更し我らが天城家と琴吹家の嫡子一人によるコンサートをお聞き下さい」

親父が田で俺達に合図し、俺は紬に田線を送ると紬が頷きクラシックを演奏した

～～～

演奏が終わると拍手が舞い上がった。俺たちは礼をしてさつきいたスタジオに戻った

「紬、こういうの慣れてたのか？」

「ええ、小さい頃良く弾いてたし、今日も弾く予定だったから。それに空也君が引っ張ってくれたから安心して弾けたわ」

「そりゃ良かつた」

俺はヴァイオリンを置きギターを手に取った

「空也君の『ア イオリン 漆く上手だつたしカッ』よかつた。私、空也君となら、結婚しても……」

紬がぶつぶつ言っていたのを聞こえていたが聞こえないフリした

「何か言つたか？」

「ううん、なんでもない！」

紬が顔を赤らめて首を振った

「やうか、じゃ音合わせしようぜ」

「うん！」

それからじぱらぐ紬と音あわせをしてパーティに戻つていった

「嬉しそうだね」

「そう見えるか？」

帰りの車の中で英雄さんが話しかけた

「ええ、あのコンサートから戻ってきた時清清しい顔をしてたから
なんとなくね」

「まあ……な」

窓の外に田を向けると澪と律を見つけた

「悪い、止めてくれるか？」

車を止めてもう一回先に帰つてくれと合図し澪たちも下に向かう

「二人とも何してんだ？」

「クウ、なんて格好してんだ？」

「ん？ ああ忘れてたな」

田を下げるときキシードのままだった

「カツ」「...」

澪が俺から田を離さなかつた

「まあ確かによく似合つてゐるけどな。その姿を見ると改めてクウの家が金持ちなんだって思つた」

律も素直な感想を告げた

「そんな事より何してたんだ？」

「ああベースの弦を買いに来たんだよ」

澪が袋を見せてくる

「それからお茶しようつゝ流れなんだけど。森也も来るか？」

「ああ、構わねえよ」

「クウのタキシード姿をもつと見たいもんな~澪」

律が澪をジト目で見る

「り！ 律！」

澪が顔を赤らめ律に抗議する

「ヤー！ ケウ助けて！」

律が俺の背中に隠れる

一
あ

澪と俺の目があつ、するとより澪の顔が赤くなつた。マズイ、このままなら俺も顔が赤くなりかねん

「わざと隠す」

澪の頭をポンと叩き俺は歩き出した

「ちょっと待てよークウ！」

律が俺の後について来るそれから一、三歩遅れて澪がついて来る。
そして喫茶店に入りコーヒーを啜る

「タキシード姿のクウは『ヒーロー』が似合つた〜」

「あ……ああ……」

澪がまだ顔を赤らめていた

「澪もいいかげん慣れろよ

それを皮切りに三人で雑談をし夕方になつたので俺たちは店を出た
律と別れ澪と一人帰り道を歩く

「夏休みももう後半分か……」

「そうだな……」

俺の眩きに澪が返した

「空也は夏休みの課題はもうやつたのか?」

「ああそれは終わった、最近はずつとギターを持ってるよ

「夏休みが終わるとすぐ桜高祭だもんな

「ああ、初めての俺たちのライブ……絶対成功させような

「ああー!」

俺たちは夕日に照り下され笑いあつた

その日の夜……

「さて……」

俺はギターを手にしてギドフォン特朗パンツな毛練習する

「空也入るわ」

「わいへりてんじやねえか」

親父が部屋に入つてから言つた

「氣にするな」

「氣にするわ！で？何の用だよ」

「特に用は無い！」

「じゃあ何で来たんだよ…

「あ、俺と母さん明日からアメリカに行くから

「何いー？」

結構重要なことだアンタ…

「で？いつ帰つて来んだよ

「分からん、仕事が片付くまで…一年ぐらいだな

「結構かかるじゃねえか…良いのかよせつかく紹んと」と繋がりが出来たのこ

「残念だがしかたない。英雄にしばらく任せる」

「英雄さんなら大丈夫だな」

息子の大地はどうしようもないがな…

「それにお前があの娘さんと一緒に部活をやる限り大丈夫だろ」

じやあなたといって親父が部屋から出て行つた

「けつこうな嵐を起こしていきやがつたな」

アメリカね…親父たちが行くのは珍しい事じゃねえが一年はなかなか長いな

「練習する気も無くなつたな…風呂入つて寝るか…」

翌日…

朝に親父たちを見送り、そのままの流れで商店街を散策する

「そういうギターの弦とピックが少なくなつてたな」

俺は『10GIA』に向かい弦とピックを購入した

「うーん…ゲーセンでも行くか…」

購入したものを鞄の中にしまいゲーセンに向かう

「あー兄ちゃん！」

そこには律の弟、聰がいた

「聰じやねーか。どうしたんだ?」

「家に居ても暇だし、遊びに来たんだけど…一人じゃ面白いね」

俺に期待の眼差しで見てくる

「しゃーねえな…今からお前んちに行つてやるよ。ゲーセンは中学生には出費がきついだろ」

「せつすが兄ちゃん!」

田を輝かせて俺の手を取り俺を引っ張る

「分かつたから手を離せ」

俺は苦笑いで律の家に向かった

「兄ちゃん早く早く!」

律の家に着くと聰が急かした

「姉ちゃんまだ起きてないよ」

律はまだ起きてないようだった

「兄ちゃんが来るの久しぶりだな~」

聰がウキウキしながらゲームの準備をしながら呟いていた

「あたまにはいいか…」

「俺強くなつたんだよー。」

聰がニヤリと笑つた

「俺に勝つてから言えよ」

俺は「ソントーラー」を持った

「…また負けた…」

聰が絶望の表情を見せた

「聰もまだまだだな」

時計を見ると一時すぎだった

「聰、ちょっと飯食おうぜ

「うん、何食べる?..」

次から次へとカツプラーメンを取り出した

「聰…ちよつとキッチン借りるだ?..」

呆れて俺はキッチンに向かつた

「ほれ

簡単にチャーハンを作り、聰の前に置く

「兄ちゃん料理できたんだ。しかもめっちゃ上手いー。」

聰がチャーハンをがつづくのを確認し俺も自分の分のチャーハンを食べた

チャーハンを食べ終わると洗い物をしながら聰と雑談していたそこに寝起きで明らかに無防備な律が下りてきた

「ク…クウー何でこんなとこ…」

律が顔を真っ赤にしていた

「お前、無防備だな〜」

俺の言葉に余計に顔を赤くし慌てていた。律も普段はがさつだけどやつぱり女の子だな、さすがに異性に寝起きは見られたくないだろ

「とりあえず、顔洗って着替えて来い。飯作っててやるから

律は無言で「ククク」と額きりビングから消えていった

「さて…オムレツとウインナー、聰！朝はいつもパンか？」

「やつだよ

「了解だ

パンをオープンに入れつまみを回す、卵をとき、粉チーズ、隠し味にマヨネーズを少量入れフライパンで形を整えつつ丸めつつ一緒にワインナーを焼く

「こんなもんか…」

オムレツとワインナーを一緒に皿に載せ、オムレツ、ワインナーにケチャップをかける。オープンからパンを取り出し、冷蔵庫にあつたバターと一緒に乗せ食卓に置く、付け合せの少量のサラダを沿えてオムレツも食卓に置くと律が下りてきた

「ナイスタイミングだ。できたぞ」

律を食卓に座らせ俺が反対側に座る

「クウの料理はいつでも美味しいな」

「そりゃ良かつた

「ありがとね」

「ん? 何が?」

律に似合わない言葉が聞こえた

「聴と遊んでてくれて」

「気にはすんなよ。俺にとつても弟みたいなもんだ

軽く言葉を交わし律が食べ終わったので冷えた麦茶を入れて律の前に置き食べ終わった食器を取り上げ洗っていく

「それにお前の意外な一面も見れたしな

「なーク、クウー！」

律は俺に顔を赤らめて俺に抗議する

「受け売りだけど…もつと自分に自信持てよ。女の子なんだからな」

洗い物を終え、律の頭をポンと叩き聰の下に向かいしばらくゲームをした後夕食の食材を買わなければいけないのでお暇をさせてもらひ

「またな律、聰も

「またねー兄ちゃんー！」

「また部活でな、クウ！」

俺は律の家を出て、スーパーに向かう

「んー何を食うかな…」

不本意ながら今日から仮の一人暮らし始まったので夕食の食材を吟味する

「あれ？空也さん？どうしたんですか？こんなところで

憂ちやんが話しかけてきた

「憂ちやんか、久しふりだね」

「お久しぶりです。でこんなとこでどうしたんですか?」

「夕食の食材を買いに来たんだ」

「空也さん自分で作るんですか?」

「ああ、自分ひとりだけなんどどうつかと悩んだといひだ」

憂ちやんが少し考えたよつた表情を見せ、俺に提案してきた

「じゃあ私の家と一緒に食べませんか?お姉ちゃんも喜ぶと思いま
すし」

「それはありがたいが、親御さんに迷惑だろ」

「大丈夫です。今日は家に帰つてきましたから」

いや、それはそれで問題があると思つのだが…

「あつーもむりん嫌ならいいですー!」

慌てたように、そして残念そつた顔を見せる憂ちやんを見て少し笑
ってしまった

「わかった。じゃあ」相伴にあずからつか

俺の言葉に憂ちゃんの顔がパッと明るくなつた。「一人で買い物をしあまり材料は買わなかつたが、一度俺の家に寄り、クーラーボックスを担いで唯の家に向かう

「[空也]さんが家に来るの久しぶりですね」

「久しぶりとこいつか、これでまだ一回田だナゾ?」

「それでもです」

帰り道で憂ちゃんは上機嫌だつた。憂ちゃんとはメールを何度もかしだだけで顔をちゃんと会わすのもまだ一回田だつた

「ああ、じうぞ」

憂ちゃんがスリッパを用意して平沢家に上がる

「おかえり～憂～。あれ? クーくん? どうしたの?」

「スーパーで会つてね、一人で食べるみたいだつたから招待したの

「わうなんだ～。クーくん憂の料理美味しいんだよ～」

「お姉ちゃん…」

唯の言葉に憂ちゃんが照れていた

「憂ちゃん、俺も手伝つよ」

「いえいえ、大丈夫ですー空せんせんはお姫さんですので待ってて下さい」

憂ちゃんは両手をブンブン振つて断る

「ただで駆走になるだけじゃ悪いよ。でもうてさすがに憂ちゃんにはこれはちょい厳しいだろ」

俺はクーラーボックスを開き、マグロの塊を見せた

「シンプルに刺身にしようと思つてな。これが天城家のやり方だ。」

「さっすぐーくん！」

唯がマグロに皿をキラキラさせていた

「やつこいつわけで憂ちゃん良いかな？」

「やつこいつ」とならびつべ

憂ちゃんの承諾を受け、持つてきたまな板にマグロを乗せる。そしてマイ包丁を取り出した

「よしー。」

マグロの塊を手際よくカットしていく、憂ちゃんは味噌汁やサラダを作つていぐ。ある程度までカットすると短冊のようにならせていくそれを皿の上に盛つていく

「よし、いんなもんだろ」

「 」 いつも出来ました

食卓に料理を並べてこれを全員で食べる

「 おこしーーー。」

「 セツヤ良かつた」

同じ皿葉を毎日いつの間にかたよつた氣がするが気にしないでおい

「 セツヤえはねせんの包丁、細くて綺麗でしたね」

「 よく見てるね憂ちゃん」

すっと俺の包丁をケースから取り出す。俺が小さい頃に親父に貰つてもらつたものであまり好感は持てない代物だ

「 いいなーそんな包丁が私も欲しいなー」

「 憂は本当に料理が好きだもんねー」

憂ちゃんが羨ましそうな顔をし、誰はひたすらマグロを食べていた

「 」 の包丁、憂ちゃんこあざるよ

包丁をケースに入れて憂ちゃんに差し出す

「 えつーそんな悪いですよー。」

「今日招待してくれたお礼だ。それに俺はあまり料理をしないから、毎日料理する憂ちゃんの手にあったほうがこの包丁も幸せだよ」

俺は笑いながら憂ちゃんの手に渡した

「ありがとうございますー大事にしますねー！」

憂ちゃんが包丁を抱きしめ満面の笑みでこたえた

「ここのなー憂ー」

「唯にはまた今度な

「約束だよクーくんー！」

「はーこなー

包丁をもじりつた憂ちゃんは終始嬉しそうな顔をしながら夕食を食べていた

夕食を食べ終わると憂ちゃんが洗い物をしてくれていた

「唯、ギターもってこい。見てやる」

唯が頷き素直にギターを持つてくれる

「クーくん！」がわからぬんだ～

唯が譜面を渡してくれる

「えいはな…」

唯のギターを借り実演しながら教える

「空也さん、お姉ちゃん。お茶どうぞ」

「サンキュー、憂ちゃん」

憂ちゃんからお茶を受け取り、ひとまず休憩する

「さすがクーくんだね。私がわからないうちすぐ分かっちゃうんだもん」

「分かる範囲で、だけどな」

「空也さんが分からぬ部分なんてあるんですか?」

「まあな」

お茶を飲みながら雑談を交わしていく

「でも唯は本当に飲み込みが早いな。教えがいがある」

「えつへん!」

「でもまだまだだけどな」

胸をはつた唯がどんどんしそんでいた。それからしそんへりへりのギターを見て。遅くなつてはいけないので早めにお腹をさせてもらひつ

「唯、また部活でな。憂、また今度な

「今日はあつがとうございました。おやすみなさい

「ああ、おやすみ

「お家を出てしまって

「ん~、漆か

「コンビニから漆が出てきた

「あ……空也……」

「よつ、なにしてんだ?」

「ああ、ちよっとアイスを貰ってな

「コンビニの袋を俺に見せ、並んで並んで

「あ、ちよつこののがあるだ

そういうてクーラーボックスの蓋を開く、まだ中は冷えていた

「じやあ遠慮なく

クーラーボックスに漆のアイスを入れて再び歩き出す

「空也はどうしてたんだ?」

「唯の家に」相伴を預かりにいつてた

「え？」

「親父と母さんが仕事でアメリカに行ってな、今日から一人暮らしなんだ。」

それから唯の家にいつた経緯を簡単に話した

「一年も一人暮らしで寂しくないのか？」

「なんとかなるさ。澪や軽音部の皆が居る。寂しくは無いさ」

澪の頭をポンポンと叩き笑顔をみせる

「そうだな」

澪が軽く笑った

「後、この事は他の人には言つなよ？お前に言つたのが初めてなんだからな」

「なんで私なんだ？」

「お前とは家が近いっていうのもあるが、なんとなくお前には言つときたかった」

「それって…」

「特に深い意味はねえよ。それよか早くしないとアイス溶けちまう

ぞ

「あ……そつだな」

澪が慌てて俺の横に並んで歩き出し、しづらへりへりと澪の家の前に着いた

「ほれ

クーラーボックスから澪のアイスを取り出す

「ああ、ありがとな。そつだ一個^{ひと}だけにあげる」

「サンキュー、じゅお休みな」

「ああ、おやすみ」

家に帰るとアイスを冷凍庫に入れ、軽くシャワーを浴びベットに横になつた

第六話（後書き）

完全オリジナルです。アニメで合宿が終わると新学期が始まってたので入れてみました

第七話

夏休みも終わり、二学期に突入した。分かっていた事だが親父たちはまだ帰つてこない。この前、英雄さんじやない使いの者が親父たちの冬服を取りに来たから年内に帰つてくる事は無いものと推測でいる

「【空也】、ちよつとこい？」

和に話しかけられ、周りを見るとH.Rが終わり各自部活に行く者や帰る者もいた

「【空也】？」

「ん？ああ、悪い。何の用だ？」

和が俺の顔を覗き込み不思議そつな顔をする

「空也がボーッとするなんて珍しいわね」

「失敬な。唯じやねえんだから」

「ヒドシよークーくん！」

和の後ろにしつかり唯が居た

「クーくん、一緒に部活にいこー。」

「悪い、和がちよつと俺に用事があるようなんでな、先に行つてて

くれ

「『めんね、唯。ちよつと空也借りるから』

人を物みたいに囁つなよ

「わかった。じゃクーくん後でね！」

パタパタと走つて唯は音楽室に向かつた

「じゃ、行こつか

俺は席を立つて歩き出す

「どこに行くつもり?..」

「生徒会室。軽音部に用があるんだろ?」

「空也は察しがよくて助かるわ」

俺と和は並んで生徒会室に向かつた。そこで知られたのは衝撃の事実だった

「軽音部が部活として認知されてないだよ?..」

「部活申請用紙が出されて無いみたいなの

俺の前に申請用紙がファイリングされたファイルを差し出す

「マジでねえな

「でしょ~空也が部長だと思つたからこいつて来てももひつたの」

「残念ながら俺は部長ではない。たぶん律あたりだろ。澪が部長なりこな事にはならないからな。俺でもこんな事はしねえよ」

そんな話をしてこると生徒会室の扉が勢いよく開いた

「たのもーーー！」

「あたしが部長だー！」

唯と律が乱入してきた

「和ちゃんーそれにクーくんーなんでもいいんだー！」

「だつて私生徒会だし、空也には生徒会からの用事で来てももひつたの」

「生徒会からの用事?まさか!クウを生徒会に引き抜いて魂胆かー!」

「違う。そして律、お前今自分であたしが部長だつて言つてたな?」

俺が席を立ち律に詰め寄る

「やつだーあたしが部長だー！」

「なら部長さんー何で部活申請用紙が出てないのかな?」

「ハリコと俺は律に近づく

「何だそれ？あたしは知らないぞ？」

「知ってるだろー。」

澪が入り口に立つて禍々しいオーラを放つて事の顛末を話すと律は田を泳がせた

「「やつぱりお前の仕業か！……」「

俺と澪が怒鳴る

「まあまあ、いつひやんも悪気があってやつたんじゃないんだし……」

「「紺（ムギ）は律を甘やかしそぎなんだ！……」「

紺をも一蹴し澪と一緒にで律を怒鳴る

「なんてこいつか……唯にまびたりの部活ね、軽音部って……」

「じょうがないわね、私なんかしてあげる

そういうて和は部活申請用紙を取り出した
「軽音部つと、部長は田井中さん、副部長は…

「クウー。」

「俺かよー! ってか和も素直に書くなよー」

「だつてピッタリじゃない。軽音部の舵取りお願いするわ」

和の悪びれた素振りの無い態度に何も言えなくなつた

「顧問は?」

「「「「顧問?」「」「」

俺以外の四人が首を傾げていた。てか澪もかよ

「あ…山中先生あたりがいいんじゃないか? 音楽担当だし、あの人の手をチラシとみたが相当ギターをやりこんでる手だつたぞ」

「そつかー! 者共ー突撃ー!」

律を先頭に四人が部活申請用紙をもつて山中先生の下に向かつた

「やれやれ…」

「空也も大変ね」

「まあな。でもあいつ等のおかげで毎日が飽きない」

俺は和に振り返つて笑つた

「今の空也、いい顔してるわ。唯のことお願いね」

「ああ」

俺は生徒会室を出て音楽準備室に向かったそしてドアを開けると机の上に卒アルが置いてあった

「これは…あのダンボールに入つてたやつか…」

パラパラとめくつていくとメイクをしているがそこには山中先生が写っていたということはあのテープの声は山中先生か…これは面白くなりそうだ

ニヤリと笑つてアルバムと小さいラジカセを持って物陰に隠れる。すると部室の扉が轟音を立てて開いた

「そこまでだ。山中先生」

「天城君！」

「先生なら来ると思ったよ。こんな過去は知られたくないもんな」

卒アルを開き写真を見せる

「なんかクウが名探偵みたいだ」

追いかけてきたであるう女子四人が入り口に立つていた

「そしてさりにこの声だ」

カチッとラジカセの再生ボタンを押す

『お前が来るのを待っていたあー…ギャ————!!』

これを聞いた山中先生は隅っこで小さくなつた。その隣で澪が小さく震えていたがあえて今は気にしないこれも顧問獲得のためだ

「先生のイメージからは遠くはなれた、ヘビメタをなぜ…？」

「あれは…八年も前のこと…」

「——突然回想を始めた…」「——

律、唯、紬が突っ込んだがあえてここも無視してギターを持つ。話を聞くと高校時代に好きな人がいたのだが告白したところ断られ、もつとワイルドな人が好きという人のためヘビメタをやりだし早い話が行き過ぎてしまつたようだ

「じゃあ先生ギターできるんだよね！」

「ちょっと弾いてみて！」「

律と唯が先生に無理やり唯のギターを持たせる、途端に先生の中で衝撃が走つたようだ…面白くなつてきたな…唯のギターをアンプに刺し、電源を入れ、俺は先生の横に立つ

「しゃーねえな…」

「——「田つき変わつた！—」「——

先生が眼鏡をとり立ち上がる

「空也…しつかり付いて来い！」

「任せぬ。」

俺と一人で早弾き、タッピング、歯ギター…は流石に俺はやらなかつたが先生はそこまでやっていた

「お前らあ…！」

「…は…は…！」

「音楽室を勝手に使いすぎやねん…！」

「…すみませんでした…！」

田つきが変わつたままで先生が怒鳴り、女子たちが土下座する

「だいたいなあ…つてあれ？」

先生が正気に戻つたようだ

「今の見た…？」

女子四人が「クククと頷いた

「せつかくここまでおじとやかな先生で来てたのこ

山中先生が膝から崩れ落ちた

「先生…顔上げて」

律が先生の肩に手を当てる

「つっちゃん……」

まわりから見ればいい光景なのだが…いかんせん俺には悪魔の笑顔にしか見えなかつた

「バラされたくなければ」

「軽音部の顧問をやつてください」

律と俺が息を合わせた

「つっちゃんとクーくんーたくましい子ー！」

この脅しをとるために山中先生は頸き部活申請用紙を和に提出了

「確かに受け取りました。桜高祭頑張つてね」

俺は頸き部室に戻る

「帰ってきたな、空也。今から先生に聞いてもらつんだ。用意してくれ」

「はーみー」

まだ名前すら決まってない曲と『Funny Bunch』を聞いてもひつ

「ていうオリジナルなんですか、どうですか？」

一曲が終わると澪が先生に聞いた

「出だしのタイミングとかいろいろあるけど…ボーカルは誰なの？」

「「「「あつ……」「」「」」

「もしかして、歌詞とタイトルもまだ…とか？」

女子四人が目を泳がせる

「一曲とも？」

「一曲だけは。タイトルも歌詞も有る」

俺は鞄の中から歌詞カードを鞄に配った

「一曲は俺の作曲だからな。その辺は抜かりなくやつていの」

「じゃあ一曲はこうして一曲は？」

また女子たちが目を背ける

「貴方たちボーカルも無しに…桜高祭に出ようとしたわけ！」

遂に先生が切れた

「貴方たちねえ！「先生！」「ああ！？」

「…ケーキいかがですか？」

紬がケーキを差し出した。今ケーキは必要か？

「……いただきます！」

「」「」「」「食つんかい！……」「」「」

ティータイムで話し合つた結果俺に何でも任せられるよつでは駄目だと
いう事で澪が歌詞を作る事になった

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「歌詞作りだよ」

「正直な所不安はある。私なんかで出来るのか…でも空也ができた
んだ。私にも出来るはずだ」

「その自信があればできるさ」

澪の頭をポンポンとたたく

「全く、空也は凄いな…私が言わずとも私の気持ちを分かつてくれ
て…」

「偶然だよ。確信なんてどこにも無い。ただの勘だ」

「それでもだよ…ありがとな」

「ああ

俺はニッと笑つた

数日後

「もう出来たのか?」

澪が頷き一枚のルーズリーフを取り出した。ある意味天才だな

「見せて見せて!」

「見せるー澪ー!」

「私も見たいです!」

女子三人が我先にと言つもんだから澪は余計に出でびらくなっていた

「やれやれ…よつと」

「あつーー」(空せ)ー

澪の手からルーズリーフを取り上げ歌詞を読んでいく

君を見てるといつもハートDOKI DOKI
揺れる思いはマシユマロみたいにふわふわ…

「かゆつー」

律と曰中先生が背中を搔き鳴っていた

「やつぱり駄目なんだつつか？ 私なりによく書けたとゆづるだけど

…

澪が臉に涙を溜めていた

「悪くは無いんだだけ…ただもうひとつ…なあ誰？」

律が助けを求めて唯を見るが

「すいへー…澪ちゃんー私はつらい好きだよーの歌詞ー。」

「なつー。」

唯はこの歌詞を好きになっていた

「ムギはー。」

紬は田をキャラキリさせてこた

「ムギもーの歌詞好きか？」

「はー。」

「本当に？」

「うえう。」

「マジで？」

「どうぞここです」

「律と絹のやつ取つを横田に澪が俺のところにひきつてきた

「ぐ、空せはぢひ思ひへーの歌詞…やつぱり駄目かな?」

澪が上田遣いで俺を見てくる

「良いんじゃねえの?よく出来てるよ。もつと自信を持てよ。そしてそんな田で俺を見るな、勝てん」

「あつがとう……でも何に勝つんだ?」

「深く聞くな、で?ボーカルは誰がするんだ?」

「そりゃ澪だふ」

「えー?」

澪の田線が俺から律に変わる

「私は無理だよ」

「何で?」

「だつて……んな恥ずかしい歌、歌えなによー。」

「「おい作者ー。」」

澪が小さくなり俺と律がつっこむチラシと唯を見ると皿をキャラキャラさせていた

「ムギ、やつてみるか?」

「私ー?私はキーボードで精一杯だし」

「だよなあ」

律がチラシと唯を見ると発声練習していた

「クウは?」

「俺ももう一曲のほうで手一杯だ。それに…まあ…あれだ」

俺は律に田線で唯を見るように図す。唯は今にも泣きだしき田をしていた

「唯、やってみるか?」

「え?私?」

律の言葉にバツと笑顔になつた

「でもおー私の、あんまり歌うまくないしい、ちやんと勤まるかどうか「じゃあいい」嘘!歌う!歌わせてください!」

いらん言い訳をすると律がバツサリ切り唯は手のひらを返して懇願していた

「じゃあ歌つてみようか！」

俺たちは唯の歌をテストした

「君を見ると「ストップ！」え？」

「ギターを使えギターを！」

「あ、忘れてたあ～」

「全く……」

次はちゃんとギターを弾いてるが……

「今度は歌を忘れてるな」

「うつうつうつ……ギターを弾きながら歌が歌えない……」

「じょうがないわね、私が特訓してあげるわ」

さわちやんが唯に提案する

「それじゃまず歯ギターのやり方から」

「いらん事教えんでいい

「ぶう～、仕方ないわね。しっかり着いていらっしゃい！」

「はーー。」

唯とやわちやんは走つて音楽室を出て行つた

「じゃあ次はクウ歌つてみようか」

「何で俺まで？」

「クウも唯みたいな事になつてたら嫌だからな

「まあいいけど……」

俺はギターを持って歌いだした

（　）

「こんなもんだ」

あつたり歌い上げ感想を待つ

「クウは人間なのか？何で何でも出来るんだよ！」

「す、ご、ご、うまかった」

「はい……とても上手でした」

三者二様の感想を貰い、唯はさわちやんのマンツーマンでの練習なので俺は自分の練習に専念できた。そして事件は数日後に起きた

不意にケータイが震えると優ちゃんからの着信だった

ブブブツブブブ

「憂ちやんじつたんだ?」

「お姉ちやんが、お姉ちやんが…」

電話先の憂ちやんが慌てて電話してきたよつて一度落ち着かせて用件を聞いた

「お姉ちやんが声枯れちゃつて…なんか凄い声になつてゐんですけど…」

「それマジで言つてる?」

「は…」

「」の時期に声が枯れるつて桜高祭まであと数日だぞ?

「とつあえず。わづかくから待つて」

電話を切り、自転車に乗つて唯の家に向かつ。じばりへりんとの隣に立った。インターホンを押し中に入れてもういつ

「グーブルジだの?」

誰だよぐーべるじ…

「見事にわざわざつたな

「わづみだ…」

「分かつたから何も喋るな

唯は素直に頷いた

「どうしましょ。…なぜかと。私、こんなこと初めてでどうしたらいいか…」

「落ち着け、憂ちゃん。一時的なものだから数日立てば治る。ナゼ、どうあえずのど飴と喉に優しい食事をお願いできるかな?」

「分かりました。でも、それで学園祭間に会つんですか?」

「正直な所、難しいな。治らなかつたら別のボーカルを立てるしかない。唯、明日は部室に来るのか?」

唯は頷いた

「じゃあそこで考えるしかないな…」

消去法で遼しかいなのがどうとかするしかないな

ある程度まで憂ちゃんと指示をした後俺は帰ることとする

「夜分遅くにすこませんでした」

「いこよ。また困った事があつたらいつでも呼んでくれたら良い。またな

翌日…

「じゃあ『ふわふわ時間』と『Fuccy Bucce』、ボーカルは一曲田は唯、一曲田は空也でいいのね。でも本当にいいの？唯がボーカルで」

「大丈夫だろ、INI一週間ずっとおわちやんの家で練習してたから」

「おお唯ちゃん！見せてあげて！」

唯が脇から現れ、ギターを披露する。確かにギターの腕は上がっているが、問題の声は…

「わおをみでるどこかわせーじじわじわ」

ボニーとこう表現がよく似合ひしゃがれ声だった…やっぱ駄目だったか…

「練習させやつやつた」

「ノリがれじやつだ」

同じポーズをとつて謝る

「やかましー！」

「どうあるの？ボーカル変えるなり今田中よ~」

ボーカルまで細かく聞くんだな」この生徒会は…

「そりなのか…? ジャあ…」

自然と澪に視線が集まる

「え? わたし?」

「しかいねえんじやね? 歌詞覚えてるだりつし…」

「私がボーカル… プシュー」

澪が顔を真っ赤にして倒れてしまった

「和、『ふわふわ時間』のボーカルは澪でよろしく」

「ええ… わかつた」

桜高祭まであと三日…

第七話（後書き）

アニメ第五話です

呼んでいる方に質問しますサブタイトル着けたほうがよろしいでしょうか？

ご返答お待ちしています

第八話

ボーカルが唯から澪に代わり、早二日が過ぎた本日、桜高祭が開催された

「いらっしゃい、いらっしゃいー焼きそばおーしいよー。空也も声出せよー！」

「てか、お前久しぶりだな大地」

大地と二人クラスの呼び込みをする

「休学でもしてたのか？」

「毎日来てたわーお前と話す機会がなかつただけだーお前が軽音部に入つてからといつもの俺は「はいはい」久しぶりの出番を被せるな！」

「テニース部に入ったんじゃなかつたのかよ？」

「辞めた」

「あつそ」

「興味無いんだつたら聞くなよー」

大地がやいやい言つてるのを横田に適当に呼び込みをしていると澪がやってきた

「空也、練習じよつ」

「俺はかまわねえよ」

「あ、澪ちゃん！」

「不動君、久しづりだな」

「澪ちやんまで… てか空也ーお前~~当番~~抜け出す気かよー。」

「浮き沈みが激しいな、新芸か？」

「抜け出すんじゃない、この場をお前に任せると~~まか~~ったんだよ」

「任せるー。」

「お前の能力があれば俺は違う場所に行つて呼び込みが出来る。俺の期待を裏切るのか？」

俺の言葉に大地が目を燃やした

「やつこつ」とならこの俺、不動大地に任せろー。」

「お任せたー！」

大地が大声を張り上げ呼び込みに行つてしまつた

「いつちょあがりー。」

「不動君、相変わらずだな」

「まあな、んじゃ行くぞ」

それから唯の当番の場所に行つた

「唯、練習しようよ」

「澪ちゃん、行きたいんだ」「朝一の当番だから……」

「てか天城くんも当番でしょ」

クラスの女子からジト目で言われた

「俺の分も大地が力バーしてくれるから問題ない」

「不動君……なんで疑問を持たないんだろ……」

俺に呆れるより大地に呆れていた

「じゃ頑張れよ唯」

「律、練習しようよー！」

その後俺たちは律と紬の場所に向かつた

律はお化け屋敷の受付をしていた

「行きたいんだけど……あたしが言いだしつべだからな～せめて自分の当番はやらないとな」

「そつか、ムギは？」

「の中とお化け屋敷の中を指した

「仕方ないな…行くぞ、澪」

「えつー。」

「練習するための試練と思え」

「わ、分かった」

俺の適切な理由に頷く、相當切羽詰つてゐるな…

中に入ると上々の出来栄えで時折聞こえる女子生徒の悲鳴に澪が反応していた

「ひ、一人で行くなよ…」

よっぽど怖いらしく俺の右腕にしがみついてくる

「さて、紺はどうだ？」

「いりよ、空也君」

通路の角で紺の声が聞こえてそつちに歩を進めるすると特殊メイクに顔が覆われた紺が出てきた

「キヤ————！」

俺の右耳を襲う高音、発生源はもひろん澪だ

「澪ちやんだいじょづぶ？」

「今お前が来るのは逆効果だ。それより律と同じ時間で交代か？」

「うん」

「了解だ、俺たちは先に行つて練習してくるな」

紬と別れ、右腕に澪をぶら下げたまま出口に向かう

出口付近で澪に話しかける

「もう出口だ。もう大丈夫だからな？」

「あ、ああ…助かった」

ふらふらとした足取りで出口から廊下に出て、一人で音楽室に向かう。後方で律がニヤニヤしていたが俺はそれに気づけなかった

「結局俺たちだけか…」

ギターを取り出しチューニングする

「空也のギターが有るだけでもまだマシだよ。空也が来てくれなかつたらアカペラで歌うといつもだつたからな」

「じゃあ『ふわふわ』をメインでやるぞ？まだ不安なんだろう？」

「ああ、頼む」

メトロノームを取り出し、そのリズムに合わせてギターとベースの一重奏を奏でる

／＼＼

何度も通して澪はベースとボーカルの練習をする

「どうだ？ 少しは落ち着いたか？」

「ああ、少しね」

「そりゃ良かった

「空也はいつも私のそばにいて助けてくれるな」

「何だ？ いきなり？」

俺は壁に背中を預け澪の話を聞く

「私、怖がりで、恥ずかしがりで、痛い話もダメで……でも、空也がいるから、空也と一緒になら……そのどれもが克服できる……だから……ありがとな」

澪の心から出でるであらう笑顔に俺の鼓動が高まつた

「ガラじやない」と言つなよ……練習するぞ」

「のまま行くと俺の顔が赤くなるから、慌てて話題を変える……ん？」

「何見てやがる」

部屋のドアを開けると律、唯、紺がいた

「何か入りづらっこだったから…」

「はあ……おひねと練習するわ」

「「お…おー..」

唯と紺がギクシャクした動きで右手を上げる

「やれやれ…」

それからじゅじゅく練習をして少し休憩を取つてみると

「監視のわねー..」

さわせんさんが入ってきた

「不本意だけど軽音部の顧問になつたわけだし、何か手伝おつと
つて、衣装作つてきましたー..」

「わせん俺たちに着せたいだけだな

「タイミングが…その…」

律が田線で漆を描す

「あ、あ、あ、あんな服着て…わ、わ、わ、私がボーカル…」

澪がカタカタしていた

「うーん…お気に召さなかつたかあ…じゃあ私の昔の衣装はどうに持つていたのか知らないがベビメタとも言ひがたい衣装を持ち出した

「さつきの衣装のほうがいいです!」

「さわちやん、こんなあたしたちが来ても恥ずかしいぜ」

「だよな!」

さすがに律が澪に味方する

「でもあの子達を見て」

さわちやんの目の先には衣装を着てはしゃぐ唯と紗がいた

「[空也]君にはこれを用意したし」

さわちやんが俺に執事の服を持ってきた

「じゃ頑張ってねえ」

衣装を置くだけ置いて出て行ってしまった

「まつたく…あの人は…」

「何も無かつた… 何も無かつたんだ…」

律はそう自分に言い聞かせ

「は…は…は…は…」

澪は遠くを見て笑っていた

それからしばらく練習した後機材を運ぶ時間になつたので皆で手分けして運ぶ

「へ」

鼻歌を歌いながら機材を運ぶ紺と

「ほい」「そら」「よつと

テキパキ運ぶ俺のほとんど二人係で運んだ

「ふう…」

「はー、空也君」

俺の指定席の長椅子に座ると紺が紅茶を渡してきた

「サンキュー」

素直に受け取り、紅茶に舌鼓をつつ

「機材運び終わった？」

気分転換に行つていた澪が戻ってきた

「ずいぶん落ち着いたじゃねえか？」

「私も大人にならなきゃいけないからな。こんなことで緊張してられないからな」

そういうて澪は紅茶を持つ

力チャ力チャ力チャ

尋常じゃないほどティーカップが震えていた

「ぜんぜん駄目じゃねえか！」

律がツツ「口//澪はティーカップを置いて

「…………やだ」

「え？」

「律ーたのむボーカル変わつてくれー！」

「じゃあドラムはまだつくるんだよ？」

「ドラムは私がやるからー！」

「じゃあベースどうすんだよ？」

「ベースも私がやるから！」

「じゃあやつてもらおうか！逆に見てみたいわ！」

澪と律の漫才を聞きながら紅茶を飲む

「「」めんね、澪ちゃん。私がこんな声になつたばかりに…」

唯の声は有る程度は戻つたがまだ声は枯れていた

「「」めん、そんなつもりで言つたんじゃないんだ…」

一気にしんみりとした空気になつたこれじゃ成功するものも成功しないな

「あー…MJC考へなきやな！」

その空氣を打破したのは律だった

「メンバー紹介します！まず最初に休みの田は「ロロロロ、大好きなものはお菓子！ギター平沢唯！」

唯が弾き真似をしながら飛び跳ねる

「お次もギター！プロ並みのギターの腕と甘いマスクで観客を魅了！さらに作詞作曲もでき、ボーカルも勤める軽音部ただ一人の男子！天城空也！」

「続いてキーボード！お菓子の田利きは私に任せろーおつとりぽわ

ぼわ琴吹紬！」

紬も弾き真似をして応える

「つづいてベース＆ボーカル！怖がりで恥ずかしがり屋！軽音部の
デンジャラスクイーン秋山澪！」

ガン！

「誰がデンジャラスだ誰が！」

「そのあたりが…」

律が澪に拳骨を貰つていた

「最後にドラマのこの私！容姿端麗、頭脳明晰！さわやか笑顔で皆
のアイドル田井中律！」

ゴン！

「自分を持ち上げすぎだ」

再び澪から拳骨を貰つていた

それを見ていた唯と紬から笑い声が上がり、澪もつられて笑った。
それを見た律は満足げに笑つた

「律…」

律にしかわからない声で呟いた

「ん？」

「ナイス！」

律の頭をポンと叩く

「あ……あたしは部長だから」

律が若干顔を赤くなりながら胸を張った

「そっだな。さあ、そろそろ時間だ行こうぜ」

俺は立ち上がり俺を先頭に講堂に向かった

「来たわね軽音部。向こうに更衣室があるわ。着替えてきて」

講堂に入ると和がスタンバイしていた

「了解だ」

各自衣装を持つて更衣室に入る。着替えた後、控え室にもどる

「へえ……空也執事なんだ」

「お呼びでしょうか？お嬢様？」

執事のよつて胸に手を当てる

「なにやつてんの、大人しくしてて頂戴」

「承りました。お嬢様」

「全く……」

同じ生徒会であろう女子が俺から田を離さず、ずっとじっと見ていた

「あの……何か?」

「いえいえ!お気になさりや!」

それでも俺をずっと見てくるが、気にするなど言われたので気にしないようにする

「クウ似合つてんじやん!」

着替えが済んだ女子陣が出てきた

「クーくんかっこいい~」

「[空せ]君は何着ても絵になりますね」

「お褒めのお言葉、痛み入ります。お嬢様」

胸に手を当て深々とお辞儀する

「クーくんなりきつてるね~」

「まじで憑も何か言つてやれよ~」

漆は黒をメインとしたドレスっぽい衣装を着ていた

「あ～…まあ…似合つてゐる」

「あ…ありがとうございます」

言葉少なげにお互いを見合ひ。そして生徒会の女子はよう一颶田をキラキラさせていた

「わあ、わんそりよ、準備して頂戴」

和の言葉で全員の空気がが引き締まる

「く…空也…」

「どうした?」

「て…手を…」

俺が手を漆の前に差し出すと両手で包み込み漆の胸の前で祈るかのよつな形になつた

「…………よし…」

パツと手を離し田を開ける

「落ち着いたか?」

「ああ、大丈夫だ」

若干俺の気が気じゃないのは間わないでおいつ

「ああ、行くぞー！俺たちの初ライブー！」

「…………」「…………」

「おー……」

俺の言葉に澪を除く全員が声を上げた、澪も小さしながら声をあげた
各自持ち場に着く。客席から見て前列に右から俺、澪。後列に紺、
律、唯とスタンバイする。スタンバイが完了すると和に合図を送り
幕が上がる。チラッと澪を見るとすでに汗を流していた。頭が真っ
白になつてやがる。それを察して律が曲を始めない

「澪ちゃんこんだけはーー！脇音部でーすー！」

俺がマイクを通して喋りだした。やけくそだ、なるよしこなれ。律
に手で澪を落ち着かせようと合図を送る

「澪、クウが時間を作ってくれてる。落ち着け」

「暨、澪ちゃんが頑張って練習してるの知ってるか？」

「澪ちゃん。自信もって」

「座せ……座……」

とにかく早くしてくれ……俺が真っ白になる……

「クウもつこことよ」

律の言葉が聞こえたので適当なところで話を切る

「じゃあ最初の曲聴いてくださいー。『ふわふわ時間』！」

「ワン・ツー・スリー・フォー」

律のドラムと俺のリードギターから始まり、唯のサイドギター、紺のキーボード、澪のベースが入ってきて五重奏になり澪が歌を歌いだす

「君を見てるといつもハートビビビ…」

澪が歌い上げると拍手が舞い上がった

「みんなーーありがとーー！」

感極まつた澪が声を上げた

「いいじらでメンバー紹介しますー皆さんから見て左手奥をじ覽ぐだぞーー！」

観客が唯を見る

「いつも一生懸命で天真爛漫！才能溢れるギター初心者ーギター＆ボーカル、平沢唯！」

ギュイーンとギターを弾いてからお辞儀する

「続きまして右手奥をご覧ください。」

「普段はおつとつ、そして上品な物腰のお嬢様！キーボード、琴吹
絀！」

キーボードを弾いて同じみづてお辞儀する

「続きまして、左手前！普段は恥ずかしがり屋で怖がり、でもここの
ぞという場面でしっかりと力を魅してくれ、先ほども見事なボーカ
ルを務めてくれました！ベース＆ボーカル、秋山澪！」「

ベースを弾いて少し照れたような表情の澪がお辞儀する

「そして、舞台中央！我らが軽音部の部長！明るく活発でいつも元
気一杯！…ドラム、田井中律」「

ドラムを叩き立ち上がつてお辞儀する

「そして最後にこの俺！」

「いつも私たちを助けてくれて、私たちを引っ張つて行つてくれる。
私たちバンドの中心人物」

「ギターの腕も上手くて」

「作詞作曲も出来て」

「いつも私たちを包み込んでくれる大空のような人」

「　「　「ギター＆ボーカル、天城空也」」「　」

俺の言葉を遮つて、澪、唯、律、紬と言葉を繋いでいき、最後に全員で声を合わせて俺の名前を呼ぶ

「やれやれ…」

俺は笑い、ギターを早弾きをしてお辞儀する

「次で最後です！聞いてくださいー！」FunCnU BnCnUー・

～～～

俺と唯のギターと律のドラムから始まり澪のベースと紬のキーボードが入り、俺が歌を歌う、歌い終わると再び拍手が巻き起つた

「皆さんありがとうございました！」

全員で深々とお辞儀し、舞台から引いていく。その時嫌な予感がよぎり振り向くと澪がコードに引っかかつて倒れそうになっていた。

「チツー！」

体が勝手に反応しギターを投げ捨て、倒れる瞬間俺の体を滑り込みます

『おおーー』

観客から歓声が巻き起こり俺の上に人がいる感触があつた

「空也、どうして？」

「何か知らんが体が勝手にな……」

「でも空セギターが……」

「気にすんなよ。立てるか?」

俺が立ち上がり手を差し伸べる

「ああ」

俺の手を取り澪が立ち上がる。すると途端に観客から歓声が沸きあ
がる

「田立ちすぎたな。和、ボーッとすんな幕を下ろせ」

「ああ、うん!」

幕が下がりやつと一息つく

「カツコよかつたぜークウ

などと茶化されたが対応できる許容範囲がすでに無かつた。それか
らふわふわとした気分で片付けして帰った

数日後…

「ライブは大成功だつたな!唯は初ライブにしては上々だつたぞ」

「いやーそれほどでも」

「澪とクウにはファンクラブが出来たらしいしな。あの事件が拍車をかけたみたいだ」

一枚のチラシを律が差し出す

「当の本人たちは、舞台上で抱き合つてしまつたままでに真っ白だけどな」

律が俺たちに目を向けると俺は長椅子で、澪は指定席でうつ伏せになっていた

第八話（後書き）

アニメとは違う結果にして見ました。賛否両論だと思いますが、ご了承を

第九話

「…………」

俺は壊してしまったギターを見つめる。ネックが曲がり、ボディも割っていた

「『めんな、俺が投げ捨てたばかりに…』

愛着があつたギターだけに悲しみが大きかつた

「『めん、空也…私のせいだ…』

「澪のせいじゃねえ。これは俺の責任だ」

後ろで澪が謝っていた。俺は振り向かずに応える

「また買えばいいじゃん！」

律の無神経な言葉に、俺はいつもの余裕が無かつた

「お前、自分のドラムが壊れた時にそれを言われて嬉しいのかよ」

俺の刺々しい言い方に律は俯いてしまった

「悪い、お前に当たるつもりは無かつたんだが…すまない、今日は帰るな」

俺は壊れたギターをケースにしまい、音楽室から出て行った

初めて見た…

空也のあんなに悲しそうな顔を…

いつも優しく微笑んでくれる顔はどこにも伺えなかつた…

なんだか…この胸の奥がズキズキと痛い…

空也にはいつも笑つて欲しい…笑つて私の頭を撫でて欲しい…

空也はいつも私を助けてくれた、踏み出す一歩をくれた。今度は私が助ける番…

でも、どうすればいいのか分からぬ…

空也が帰つてから少し練習したが、指揮官を失つたみたいに引っ張つてくれるギターが居ないから練習にならなかつた

それから数日後…

空也はあれから姿を見せなくなつた。唯と遊びに来ていた和から話を聞くと学校にも来ていらない様子だつた。空也の居ない部室…なにか大きなピースを失つたみたいで無機質なものになつていた。律が元気を出して盛り上げようとしてくれるが空回りしていた

「はあ……」

いつもなら空也と帰る」の道も今は一人で歩く…どこか寂しく、ため息しか出ない。すると空也の家の方向から不動君がやってきた

「あれ？ 露ちゃん？」

「不動君、どうしたんだ？」

「空也の所に行ってたんだ。あいつ最近学校に来ねーから」

空也と付き合いが長い不動君なら、何か分かるかもしね。私は事の経緯を不動君に話した

「せうか、あんなドラマチックな場面の裏でそんな事が起きてたのか…なら空也を元気付けられるのは露ちゃんしかいないな」

不動君は真剣な顔をしていた

「でも、私…どうすればいいのか分からんんだ」

「なあ露ちゃん、心つてビンコあると思ひっへ」

不動君が真剣な顔のまま聞いてきた

「胸…？ 頭…？」

私は明確な答えが出なかつた

「そう、心は心臓にも無い、脳にも心と呼べる所は存在しない。心

つてのは形無きものなんだ、形無きものだから空也は物に使い手の心が宿ると信じてる。ましてやギターだ、音楽をやる以上使い手の相棒になる存在、だから空也はギターに心を込めて弾いていたんだと思ひ。空也は自分の心を投げ捨てた事と思つてるんじゃないかな？でもその心を投げ捨ててまで助けたかったのは他ならぬ澪ちゃんなんだ、空也の中には澪ちゃんの存在が大きいんだと思ひ

そう言つて不動君は鍵を差し出した

「空也の家の鍵だ。親父から預かってきたんだけど澪ちゃんが使つたほうが良さそうだ。鍵は空也に渡してくれればいい

私が鍵を受け取ると、不動君は行つてしまつた。なんとなく空也が不動君を信頼する意味が分かつたような気がした

私は空也の家の前に立つ覚悟を決めてインター ホンを押すが反応がない、私は不動君から預かつた鍵を使って中に入る

「お、お邪魔します…」

昔の記憶を辿りに空也の部屋に向かいノックする

「く…空也…私だ。澪だ」

少しだすると部屋のドアが開き、空也が姿を見せた

「澪…何でお前…」

「不動君から鍵を預かってきたんだ」

私は鍵を空也に差し出す。空也は鍵を受け取り私を部屋に招き、
私はベッドに座り、空也は椅子に座る

「えつと……その……」

空也の顔を見て安心したのか私の頭の中は真っ白になつて苦し紛れ
に部屋を見渡した

「あれ……ギターが……」

合宿の時に見たアコギしか置いてなかつた

「前のは処分したんだ。もう直せないし、終わつてしまつた事をい
つまでも引きずつてられないしな」

空也の顔を見るとすこしぶつ切れた顔をしていた

「じゃあ、私が来た意味が無いじゃないか……」

「なんだ、心配してきてくれたのか？」

私は小さく頷いた

「ありがとな、心配してくれて」

空也は立ち上がりつて私の頭をポンポンと叩く、「これだ……これがいい
んだ……少し恥ずかしいが心地いい、空也の優しさを感じれる……」

「せつかく来たんだ、飯ぐら一食つてけよ」

空也が部屋の外で手を叩くと、若い男性が現れた

「お呼びでしょうか。空也様」

空也様！？

「一人分の食事を頼む、整つたら迎えに来てくれ」

「畏まりました」

品のいいお辞儀をして男性は去つていく

「ぐ、空也今の人は……？」

「ん？ああ執事だ」

執事！？

「仕事中は来て貰つてるんだ」

空也が指を指すと机の上に書類が積まれていた

「なんか忙しい時に来ちゃって悪いな」

「気にすんなよ。たいした量じゃない」

しばらく談笑していると、執事さんが迎えに来てリビングで食事を取り、空也は部屋に戻り、私は邪魔をしては悪いのでお暇する。執事さんが見送りに来てくれた

「本日はありがとうございました」

突然執事さんが私にお辞儀した

「な…何がですか？」

「空也様の」と「やれこ」。空也様は私共や、大地様が話しかけても、一言もお声を発せられませんでした。ですが本日、貴方が来られた事により、いつも空也様に戻られたように思います。本日は本当にありがとうございました」

執事さんがまた深くお辞儀する

「これらん事言つてんじゃねえよ。それよりコーヒーを頼む」

空也が一階から降りてきて執事さんを一喝する

「澪、今日は来てくれてありがとうございます、これは礼だ。これからはいつも來い」

小さい箱を貰い開けると鍵が入っていた

「空也様もなかなかやりますね」

「うぬせー和田ーいいからわざとコーヒー入れて來い」

畏まりましたと執事さんがお辞儀してキッキンに消えていく

「俺もなるべく早く仕事片付けて、学校にいくから。そん時にな」

「ああ、分かった。じゃあ空也、おやすみ」

空也が頷くのを確認すると私は空也の家から出た。よかったです…空也が元気になつて…

私は貰つた鍵を見ながらそつと思つた

『空也 Side』

仕事を溜めていた訳じゃない

ただ今は違う事をして忘れたかった

後悔はしていない、澪を助けるためだつたんだ

頭では分かっているが、この心にポツカリ空いた気持ちを受け止め

きれないだけだ…

全ては俺の心の弱さだ…そんな時に澪が来てくれた。俺の体裁だけの言葉を信じてくれた、ホッと胸を撫で下ろす澪を見てると俺も気が楽になれた

「空也様、コーヒーをお持ちしました」

「サンキュー」

「コーヒーを受け取り一口すする

「いい子でしたね。あれが空也様の奥様になるわけですか…」

「ブッ！」

俺はコーヒーを噴出してしまった

「違うのですか？」

和田は軽く笑っていた

「ほんと、いい性格してるな」

「よく言われます」

悪びれも無く言つやがつた

「でも本当に良かった。空也様が元気になられて……」

「ありがとよ」

「それは先ほど空也様からお電話がありまして、二日ほど前に未発売の新型のギターをお送りになられたそうです」

いろんなところにパイプを持つてるな……

「独白のルートなので明日の午後にはこちらに着くものと思われます。それから空也様から伝言を預かりました『本格的に音楽をやるなら必要なものだから受け取れ』との事です」

「了解だ。それまでに仕事を済ませておく」

「はい、よろしくお願ひします」

お辞儀をして和田が部屋から出て行く、新しいギターのためにも、やつやと仕事を終わらせるか……

翌日…

「別人のようなペースですね」

朝食を持つてきた和田がそう呟いた

「昼前には終わる、その時にまた来てくれ」

朝食を食べながらペンを走らせる

「ふう、じんなもんか…」

時計を見ると十一時過ぎだつた

「空也様、ギターが届きました」

「いいタイミングだ。いつも終わつたぞ」

とつあえずギターを受け取り、ケースを開けると青を基へ配色し、所々シルバーが光るギターだつた

「これはなかなかお値段が高い代物ですね…」

「ああ」

アンプに繋ぎ、軽くストロークする

ジャーン

前のギターより音がクリアで低音が良く響く

「悪くないな…あ、忘れる前に渡しておく」

書類の束を和田に渡す

「そのまま英雄さんの所に戻ればいい」

「わかりました」

そう言って和田は部屋から出て行った

「さて、俺は学校に行くか。今まで迷惑かけたしな」

制服に着替え、ギター・ケースが肩に担げるタイプじゃないので左手に持ち家を出ると

「せうだらうと思つてました。近くまでお送りします。どうぞ」

和田が車のドアを開けて待つていた

「ほんとに気が利く執事だな」

「お褒めに預かり光栄です」

素直に車に乗り込み近くまで送つてもうひとつ

「では、私はこれで失礼します」

「ああ、英雄さんに宜しくな」

和田は領き車を走らせ行つてしまつた

「どうせ音楽室は開いてないしな。このまま教室に行くか…」

教室は日本史の授業中だつたが、躊躇無く入り、自分の席に座る

「あのな、天城…」

「天保の改革…」

黒板の内容から推測し答える

「いや、そうなんだが…」

「水野忠邦！」

「いや、それもそうなんだが…まあいい授業を続ける」

「勝つたな…」

教師は授業を再開し、俺は勝ち誇つていた、そして休み時間、俺の席に唯と和、それに大地がやってきた

「クーくん遅いよ…」

「学校にも来ないで、心配したじゃない」

「空也…会いたかつぐふつ…」

大地のボディにパンチを浴びせ唯と和に向き直る

「悪かつたな。心配かけて」

「そうだよクーくん！クーくんが居なかつたから私ギターの練習できなかつたんだから」

「さわちゃんがいるだろ」

「さわちゃんお茶飲んでばかりで教えてくれないんだもん」

「もしかして俺が居ない間お茶ばかり飲んでたのか？」

「この問い合わせたのは和だつた

「やつよ、私まで付き合わされたんだから」

「そりや迷惑かけたな」

「構わないわ。唯とも久しふりにお茶飲めたし」

「やう言つて貰えるとありがたい」

「やつぱり軽音部には空せが居ないと駄目ね。これからもしつかり舵取りお願ひするわ」

「責任重大だな。おい、そろそろ授業始まるぞ、席に着け」

唯と和は自分の席に着いた。俺の横で氣絶している大地をほつといて

「ん? 不動、何してるんだ?」

入ってきた教師が大地に聞くが反応は無い

「先生、こいつの事はほつといてもらって結構です」

代わりに俺が答える

「そうか、では授業に入る」

通じちゃったよ。大地、「愁傷様

そんなこんなで放課後…

「クーくん! 部活にいこ!」

「ああ

俺はギターケースを持って席を立ち、音楽室に向かつ

「よう、皆の衆! 元気か!」

音楽室の扉を勢い良く開ける

「空也君!」

「空也君!」

「クウ!」

改めて聞くと誰一人呼び方が一緒に奴が居ないな隣のやつに至つてはクーくんなどと言つてくるしな

「ヒーリング室也、そのケースはなんだ？それが新しいギターか？」

「ああ」

ギターをケースから出し、ふわふわ時間を弾く

「さあがに上手いな。クウは」

「ああ、前のギターより音もクリアになつてゐる」

「クーくん、カツ」「いへ

弾き終わると、紬は俺に紅茶を渡してきた

「空也姉、どうぞ」

「サンキュー」

ギターを俺のスタンドにおいて長椅子に座り紅茶を受け取る

「やつぱつ空也がそこに座つてるのがしつづく来るな

「やつだな

澪と律が俺の前でそんなことを言つていた…そして俺は音楽室の扉から視線を感じた

「何見てんだ？」

音楽室から顔を出すと数人の女子が目をキラキラさせて俺を見ていた

「えっと…なにがあったの？」

「あのー空也君ー握手して貰いたーーー。」

手を差し出すれ思わず握手すると私もーと、全員が手を出してくる

「律…なにこれ？」

俺が律に聞くとともにない事が帰ってきた

「なにしてファンクラブだら？」

「はー！私たち空也君ファンクラブです！」

そういうえばそんなことを言っていたような気がするが…本当に有ったのか…

「ありがたいけど、ここに居ると部活の邪魔だから、節度は守つてな

作り笑いだが女子たちは喜んで、去つていった

「やれやれ…出るんじゃなかつた…」

少し冷めてしまった紅茶に一口つける。女子たちが笑いながら俺に寄つてくる。ここから再出発だ…

第九話（後書き）

オリジナルその式です

空也のギターはESP社のANTELLOPE^{アンテロープ}です。価格は七十五万ほどでオーダーメイドのカラーリングですので参考にどうぞ

以前まで使つていたギターはESP社、安価ブランドG^{グラス}ASSR^{ルツ}oots^{フォレスト}のFORESTです価格は7万程です

皆様明けましておめでとうござります

新年一発目です

第十話

「クリスマスパーティーをします！」

十一月も半ばに入り、いつものティータイム時に律が高らかに宣言した

「日時、十一月二十四日。場所ムギの家。経費千円…」

澪が律が作ってきたチラシの内容を読み上げる

「さて…」

俺は持つてきたアコギに手を伸ばした。新歓ライブに向けて、作曲中だ。前回はエレキだったので今回はアコギを使って作曲する。前回の反省も踏まえて今回は先に歌詞を作つてから作曲する

「こらークウー人の話を聞けーー！」

「ん？クリスマスパーティーだろ？聞いてる聞いてる」

律に顔を向けて適当にあしらつ

「聞いてる聞いてるって一回書ひ奴に限つて聞いてないんだよな

結構痛いとこを突いてきやがる

「わかったよ、話聞きやいいんだろ」

俺はさわちやんが普段使つていろの椅子に腰を下ろした

「よし、話を戻すぞ。ムギの家はやっぱ駄目なんだよな」

「はい、ごめんなさい…」

律の言葉に紬が頭を下げる

「別に紬が謝る必要ねえよ。あいつが勝手に決めてたんだから」

俺が紬を慰める

「それを言わるとツライ…とかクウの家はどうなんだよー。」

「家も無理だ。クリスマスは毎年、執事たちがやけくそで家でパーティ開いてるから」

「それ家でもありますー」

俺と紬の意見が思わずどこりで合ひてしまつた

「「「」」の一人の家つて一体…どんだけ大きいんだ…」」

澪と律は口を揃えて呟いた

「唯の家はどうだ?」

「私の家は大丈夫だよ」

即答だった

「いいの！？」

「うん、クリスマスはお父さんもお母さんも旅行でドイツに行つて居ないし」

なんともまあラブラブな夫婦だ』つて…

「何か持つていきましょつか？」

「大丈夫だよ。料理なら任せて」

紬の言葉に唯が胸を張つて立ち上がつた

「憂ちゃんが作つてくれるもんな」

その後で言おうとしてるのが分かつたので先に言つてしまつ

「出来た妹で良かつたな…」

澪がそう呟き、クリスマスパーティーの場所が決定した

「じゃあさ、プレゼント交換しようぜー！」

「あー私やりたいですー！」

律の言葉に紬が即座に応えた。まあ全員分のプレゼントを買つよつ遙かに楽ではあるから否定はしない

プレゼント交換をする事も決まり、やつと曲作りに戻れる。

「空也は何してるんだ？」

澪が覗いてきた

「曲作りだよ。今のうちからやらねえと、俺のペースでは間に合わないからな」

「歌詞はどうするんだ?」

「それはもう出来てるが…今見せてもしょうがねえから曲が出来た時にみせるよ」

澪は頷きティータイムに戻つていった。俺はしばらく作曲をしてお開きになつた。笛でそろつて下校すると和が居た

「和さんも一緒にクリスマスパーティーしない?」

「私軽音部じゃないけどいいの?」

「いいのいいの! 友達じゃん!」

律の言葉を決め手に和は頷いた。この日の夜、憂ちゃんからメールが来た

『もしよかつたらクリスマスパーティーの料理一緒に作りませんか?』

憂ちゃん含めて七人分だもんな、一人ではきついだろう。憂ちゃんに承諾のメールを送り、一人で何を作るか電話をして夜も遅くなつたので電話を切り、ベッドに入る。プレゼント買いに行かなきゃな…

週末になると、俺の身の回りの世話に来ていた和田に留守を頼み商店街に足を進める。行きつけの店に入りプレゼントを買ひと紺に出会つた

「よつ、紺もプレゼント買いに来たのか？」

「はい。この後商店街の福引に行くの

紺は福引の引換券をもってウキウキしていた

「俺もちよつと行こうだつた。一緒に行くか」

紺と二人、商店街を歩く、終始紺は楽しそうだった

「紺からやれよ」

福引会場に着くと俺は、紺の背中をおした

「うん！」

引換券を一枚係りの人に渡し、福引でよく見る回るアレを回す。出てきたのは金色の玉だった

うん、強運だね…

「一等が出ましたー！」

カラソカラソと鳴らし高らかに係りの人告げる

一等はハワイ旅行らしへ、日録を紺に渡そうとするが、紺が拒否した

「「ムギー」」

隣でよく聞いた声が聞こえると思つてはいたが…濶と律、それに唯と和も居た

「クーくんも居るー」

紺が交換してもらつた。四等の某双六ゲームを持つて向こうに歩いていく

「もういいですか?」

金色の玉を中にもどし、ひたすら混ぜていた係りの人には声をかける

「あ、はいーどうぞ

引換券を渡し回す。出てきたのは金色だった

「…………あはは…………」

ひたすら混ぜていた係りの人は絶望の顔色をしていて、俺は苦笑いした

「「「」」につけの強運は一体……」

「くれー！」

律と濶が驚いていた。素直に日録を受け取り、齒のといひに向かう

律が手を差し出しつづいた

「何でだよ…」

律の手を払つた

「空也もプレゼント買つて来たのか?..」

「ああ」

「クーくんは何買つたの?」

「言つてしまつたら意味無いだろ」

「ふう~」

唯が文句を言つてゐるが。あえて無視する

「じゃ、俺は行くな」

「[空也]、お茶がらこでのんでいかない?」

和が俺を引き止めた

「魅力的な提案だが、これから用事があるんでな。また誘つてくれ

俺は右手だけ上げて家に帰つた

「お帰りなさいませ。空也様」

家に帰ると和田が待っていた

「和田、すまないが食材の手配を頼む」

「畏まりました。何の食材で『じぞう』ですか?」

「ターキーを作るんだ。その食材の手配を」

「畏まりました。二十四日の早朝にこちらに着くよい手配します」

和田は部屋の奥へ消えていった。ほんと気が利く執事だな、英雄さんが期待する理由が良く分かる

そして俺は秘密の特訓に入り、数日後、日付は二十四日

「空也様。食材が着きました」

少し早めの朝食を取つていると和田が姿を現し、クーラーボックスを俺の前に置いた。中には七面鳥や玉葱、ホワイトブレッドなどが入っていた

「早かったな」

「今日は『じぞう』の飾りつけもしなければいけませんので」

そういうて色とりどりの装飾品を取り出した

「まあ、頑張ってくれ。これは俺からのクリスマスプレゼントだ。皆で行つてくれ」

俺はこの前既にハワイ旅行の日録を渡した

「ありがとうございます。これがわかるから」との執事は辞められませんね

はつせり言こやがる

「ほんとこいい性格してゐるな。じゃあ、ありがとうございます。行つてへる」

「行つてらつしゃこませ」

和田のお辞儀を確認すると唯の家に向かつた

ピンポン

食材が痛むと駄目なので英雄さんに送つてもうこインターホンを押す

「空せきんーこらつしゃこーどひーー。」

憂ちゃんがスリッパを用意してくれる

「あつがとう。憂ちゃん」

憂ちゃんがキッチンに案内してくれる。キッチンには俺のためにプレゼントした包丁とまな板が用意されていた

「使つてくれてたんだ」「

包丁を手に取るとひやんと使われていた事が良く分かった

「はい！」

憂ちゃんが笑顔で頷く、いい持ち主に出会つたな…

俺はまな板の前に立ちクーラーボックスを開け七面鳥を取り出した
「打ち合わせどおり、俺はターキーを作るから。ケーキとかをお願
いするな」

憂ちゃんは領き料理に取り掛かる。俺も七面鳥からレバーとネック
と呼ばれる部位を取り出した後七面鳥の中を洗い充分に水気をふき
取る。その間にオーブンで焼いていた食パンを取り出しカットして
いきオーブンをそのまま暖めておく、セロリと玉葱をカットしフラン
イパンで色が変わるまで炒め、隣で茹でていたネックを手で解すの
だが…

「どうしたの？ 憂ちゃん？」

憂ちゃんが俺の手元を凝視していた

「あー、いえー何でもないですー。」

慌てて皿を逸らすがちらちらといちらを見ていた

「憂ちゃんも一緒に作るか？」

手を切られても困るので、憂ちゃんにも手伝つてもいい、溶き卵と
予め作つて持つてきたチキンブロス、ネックと炒めた野菜、トース
トを混ぜ温めておいたオーブンに入れる

「よし、これで三十分焼いて、その間に七面鳥にバターを塗るわ」

「はー」

二人で七面鳥にバターをくまなく塗り、塗った後に上から塩コショウをかける

「いじつたほうが番ばじくなるから覚えてた方がいいよ」

憂ちゃんはメモをしながらこいくへる。少し時間が余ったので、サンドイッチやケーキに手を出す三十分钟った

「いみなもんだな」

焼いた食材を取り出し、オーブンをもう少し高い温度で温めておく。焼いた食材を七面鳥の中には詰め込み穴を縫つて塞ぎ再びオーブンの中に入れる

「次は一時間だな、サンドイッチとケーキに取り掛かん」

「はー」

俺はサンドイッチを担当し憂ちゃんがケーキを担当するコンビングで皿をやると誰がまつたりしていた

「誰は飾り付けするんだろう？皆が来る前にせめてしまえよ」

「分かつてゆよークーくん」

やつ言ひて誰はなせみと折り紙を取り出した

「ナ！」からかよ…」

「あはせ…」

俺の呆れ顔に憂ちゃんは軽く笑っていた

「サンディッシュあがり…さて…ターキーは…」

オープソーンを見るといい感じに焼けていた

「「」うちもケー キが焼きあがりました」

ターキーをひっくり返し、少し温度を弱くしてまた一時間焼く

「後は飾り付けだな。憂ちゃん、任せた。俺はおにぎりを作る

憂ちゃんがエプロン姿のまま玄関に向かい澪たちを家に上げる

「私行つりますね

憂ちゃんがエプロン姿のまま玄関に向かい澪たちを家に上げる

「よつー。」

俺はおにぎりを作りながら澪たちに挨拶をした

「空也も料理してゐるんだ」

「まあな、お前らは誰を手伝つてやつてくれ」

「まさかーーーその代わり上手い料理を作ってくれよなー。」

律に軽く答えると、皿は飾り付けを頑張っていた

おひきとサンドイッチを食卓に置きオーブンを開き竹串を刺す、中から透明な汁が出てきていた

「よし、完成だ」

「うひも出来ました！」

ケーキと同時に出来上がり、憂ちゃんを先頭に食卓に向かった

「おおー憂ちゃん凄いなー」

律がケーキを見て憂ちゃんを褒める

「そしてこれがメインティッシュだ」

食卓の真ん中にターキーを置く

「これ、空也が作ったのか？」

「ああ、憂ちゃんに手伝つてもうつたけどな

「とても勉強になりました」

憂ちゃんは俺にむかって笑顔でそつと言った

「さて、後は和だけだな」

「和は遅れるから先に乾杯しちゃおー。」

唯がそこにつと皆が頷きシャンパンの入ったグラスを持った

「…………」「かんぱーい！」

ちよつとまで…一人多くないか？

見渡すとさわぢゃんがいつのまにか座っていた

「ど」から不法侵入しやがった

「失礼ね、空也君。なんでクリスマスパーティーに私を呼ばないわけ
！？」

「先生は彼氏さんと過ごすと思つて～

唯が爆弾を投下しまわりの空気が固まった

「私も過ごすつもりだったわよーでも向こうがいきなり会えないって…」

ドタキャンされたんだな

「罰として唯ちゃんはこれに着替えてきなさいー。」

さわぢゃんはサンタのコスプレ服をとりました

「どうに持つてたんだ… そんなもん…」

俺はターキーを食べながらそう咳くが無視された

「ハーブ・アーチー」

着替えてきた唯がボースを取った

駄目ね、唯ひせんほやつぱり恥じらいが無いわ、こいつは...やはりせん

さわちやんが俺の隣に座っている澪を見た

- 2 -

途端に俺の後ろに隠れる、
てか俺を盾にするな

観念しなさい！」

躊躇無く漆に襲い掛かるやねん

レーベル

「ちよー！ 韶！ 俺を雇に！」

遷に引、張られ玄関に逃げる。何で俺まで……

「元にちねー」

玄関の外から和の声が聞こえた

「追い詰めたわよー」

「空也！助けてー！」

相変わらず俺を盾にする澪、それを見る和。なんだこの構図は…

「間違えました」

「ちよっと待て！和ー！」

ドアを閉めようとすると和を止め、なんとかさわちゃんをなだめビングに戻る

「和ちゃんも来たことだし、プレゼント交換しようつよー。」

唯が言い出すと澪が頷いた

「ここにどうわちゃんが

律がさわちゃんをみる

「私也有るわよ」

「彼氏さんにはプレゼントするんじゃ無いんですか

またも唯が爆弾発言する、天然つて恐ろしいな…

「ああ、皆出しなさい！私が歌つから歌い終わった時手元にあるも

のがプレゼントよー。」

さわちやんがやけくなつて場を盛り上げる。内心は辛いんだろうな……

「あー、こま持つてるのがプレゼントよー。」

「これあたしのだ」

律がそつぱづる

「じゃあ交換しましょ」

さわちやんと律がプレゼントを交換する

「なにかしら~」

さわちやんが包装を破り捨て箱を開ける

バシン!

びっくり箱が勢い良く開きさわちやんの顔にぶつかる。女子たちが俺を盾にカタカタ震える

「あははははー、これ最高ー。」

壊れたな……さわちやん……

「あたしはなんだろ……」

律があけると、瓶詰めの海苔が出てきた

「それ私ね」

和がそう告げる。なんかお歳暮みたいだな…

「私は…」

紬があけるとマラカスが入っていた

「それ私だ」

澪が告げる、紬と澪は笑い合っていた

「私は…」

和があけると大きなぬいぐるみだった

「それ私よ」

紬が告げる

「ありがとう、琴吹さん」

「私は…」

澪が開けると可愛い装飾のはいったネックレスだった

「俺のだな」

「姫也……あ、あつがとつ……凄く嬉しこ……」

澪が満面の笑みでソーフィアを睨った

「セリオまで喜んでくれると光榮だな」

「クウはあけねーのかよー」

「俺のせわちゃんのだから形から察するこ^ノベメタのロッテ所
だろ」

「忠^{トシ}べ分かるわね。空^{スカイ}也」

そわちやんが感心していた

「ただ、酷い事を言つたが、彼氏さんが貰つても嬉しくないん
じやないか?」

そわちやんに鋭く刺さつたソーフィアに頑垂れた

「後は誰と慶^{ハヤシ}さんだな」

「うんー、慶^{ハヤシ}一緒に開けよ」

唯と慶^{ハヤシ}さんが同時に開けると唯が手袋、慶^{ハヤシ}さんがマフラーだった

「慶^{ハヤシ}がマフラーが無いって言つたから

「お姉ちやんが手袋が無いって言つてたから」

同時にそう言っていた。お互がお互いの欲しいものを買っていたのだった。仲の良い、いい姉妹だ

「よつしゃあーじゃあ既に一発芸でも披露するか！」

なんちゅう無茶ブリだそれは…良い雰囲気だったんだがな

「誰からやる？」「…

律はそんなこと気にせず回りを見渡す

「私やりますー！」

憂ちゃんが手を上げ志願し、腹話術を披露し、各々一発芸を披露する

「後はクウだけだぞー！」

「良く見てろよ」

腕を伸ばしテーブルの真ん中で手を開くと一本の花が出た

「すげーー！」

律に花をプレゼントし、両手からトランプを出す

「以上だ」

軽いマジックだけだったが充分だった

「さて、そろそろお開きにするか

某双六ゲームを畠で楽しんで、時計を見るともう遅い時間だった

「わうね、ミキちゃんは私が送つていへわ」

さわせやんは車で来たらしく、一番遠い袖を送つていった

「じゃあ俺たちも行くか…じゃあな一人とも」

唯たちに挨拶し、ここからなら比較的に近い律から送り、最終的に

いつもの帰り道を澪と歩く

「ありがとな、これ」

澪がネックレスを取り出しう俺に見せる

「ああ」

澪がネックレスを自分の首につける

「どうだ?似合つてるか?」

「良く似合つてるよ」

俺は街灯に照らされた澪を見ながら笑っていた

それから田畠まではほとんど寝て過ごしていった

「めんどくさい」

正月になり、天城グループの新年挨拶をする

「はつはつは。空也君はいひこいつの苦手だからね」

「それもこれも親父のせいだ」

親父から正月も帰れないとの報せに、新年挨拶が誰がやるかという話になり俺になつた。そして今俺は、英雄さんの運転で家の近くにある神社に向かつている。軽音部の皆で初詣に行くからだ

「近くで下ろしてもうえましいからな」

「わかつてゐるよ」

英雄さんに神社の近くで下ろしてもらうと待ち合わせ場所に向かつ

「あークーくん遅いよー。」

唯が俺に向かつて手を振る

「悪かつたな」

「空也君、袴姿よく似合つてます」

紬が俺を褒める

「用事の後だからな。着替える暇が無かつた。で?なんで澪は隠れてるんだ?」

澪は待ち合わせ場所の看板の裏に隠れていた

「澪も晴れ着で来てんだよ。まじー。」

律に後ろから押され反動で俺に轟くぶつかる

「あ…」

必然的に俺と澪の皿が合つ

「澪…上…呑く合つてんな…」

慌てて離れて俺はやつぱつ

「あ、あつがと…【H】も…」

そんなやつ取りを律は「ヤーヤ」しながら見ていた
「とにかくだ、せつと御参つするわ」

「これ以上居るとめんどくさい事になつたので、参拝客の列
に並ぶ

「待てよークウ」

律を先頭に俺に追いつく、そして順番が来た

「皆、何お願いした?」

「室内安全」

「美味しこものこっぱぱこ食べれまますよ！」

「体重が下がりますよ！」

「商売繁盛」

「唯、軽音部のことを願ってよ！」

「唯、軽音部のことを願ってよ！」

「どうわけで仕切りなおし

「曲を作るペースが早くなりますよ！」

「ベースをもつと弾けますよ！」

「唯で楽しめますよ！」

「ムギちゃんの持てくれるお菓子をこなぱー…」

ガン！

唯が律に拳銃を食いつた

「ギターが早く上手になりますよ！」

唯は泣きながら言へ換えた

「よー！」

俺たちは順番を次に譲り、皆でお茶をして解散になつた

第十話（後書き）

アニメ第七話です

クリスマスパーティー。引っ越しすぎました

第十一話

冬休みも終わり、時期は一月も終盤に差し掛かつた

「うーん…」

最近妙に視線を感じる。桜高祭のライブ以降から周りの生徒からの視線は感じられてはいたが、今感じている視線は全く別物だと思われる。なんとなく視線のレベルが違う、もうね凝視されてる感じがする

「めんどくさい事になつたな…」

「どしたの？クーくん？」

一緒に部室に向かっていた唯が俺を覗き込んでいた

「いや、なんでもねえよ。たぶん気のせいだろ…」

「どうせても気のせいでは無いだろ？がな、現に今だつて感じてる…

「早く行こうよクーくん！ムギちゃんのお菓子が待ってるよー。」

「気楽でいいな。お前は…

「はいはー…」

気のしても仕方が無いと判断し、部室に入る

「あ、やつときたな。空也、ちょっとこいか?」

澪が小声で俺に聞く、眞面目な顔をしてるので素直に頷く

「少し、席をはずそう、唯、俺の分のお菓子は食べても構わないが
澪の分は残しといてやれよな」

唯の返事を聞かずして俺たちは部屋の外に出た

「で? いつたこどうしたんだ?」

「うん…笑わずに聞いてくれよな…」

澪はそう前置きして話し始めた

「最近、誰かに見られてるような気がするんだ」

俺の中で疑問が確信になった。誰かが俺たちの後を着けてきてる。
所謂ストーカーだな

「こつからだ?」

「初詣に行つたときから…最初はあまり気にしなかったんだけど最近はより酷くなつて…この事律たちにも言つたんだけど、ちゃんと聞いてもらえなくて…」

俺が視線を感じはじめた時とほぼ同時期だな…ということは同一犯の可能性が高い…この学校の生徒の犯行で二人に共通するもの…ファンクラブか…いきすぎた生徒の犯行ってことだろ?…つーかちゃんと聞いてやれよ。部長だろ、律…

「奇遇だな、俺もその時期から視線を感じるようになつたよ。ま、
ここで悩んでも仕方ない、生徒会にでも相談に行くか…」

俺は生徒会室に向かつて歩き出した

「和居るか～？」

生徒会室のドアを開けて和を探す

「あら、空也、それに秋山さんもどうかしたの？」

書類の整理をしていた和がこっちを見る

「そこそこ困つた事になつてな…」

和に経緯を説明した

「二人とも誰かに見られてる…しかも同時期に、ストーカーの類い
かしら…」

「だらうな…なんとかならねえか？このままじゃ俺はよくても澪が
な…」

「そうね…」

俺と和が一人で打開案を模索していると不意に生徒会室の扉が開いた

「真鍋さん、引継ぎの資料持つてきたわ」

「ありがとうございます。曾我部先輩」

曾我部先輩と呼ばれた女生徒は和に資料を渡した

「誰なんだ？ 和？」

「紹介するわね、生徒会長の曾我部先輩」

「元だけどね。よろしくね、天城君と秋山さん」

俺の問い合わせに和と曾我部先輩が答える……なんで俺たちの名前を知っているんだ？

「やっぱり知らないかあ、軽音部の人は……」

軽音部だつて事も知つていて。ま、桜高祭のライブの時に紹介したから知つてもおかしくは無いが……

「二人とも、どうぞ。お茶会のお茶より高級なものじゃないけど」

俺たちに緑茶を渡してくる、何故軽音部がお茶会を開いている事を知つているんだ？ 思い切つて搔さぶりをかけるか……

「何個か曾我部先輩に質問が有るんだが？」

「何かしら？ 天城君？」

曾我部先輩は俺に顔を向けた

「何故、俺たちが軽音部だつて事を知つていた？」

「桜高祭でライブをやつてたでしょ？そこで知ったの」

「だろうな。これは軽いジャブだ、もう一発ジャブを…」

「俺たちの名前もそこまで知った？」

「ええ…」

よし、ここでストレートだ

「何故俺たちが音楽室でお茶会をしているのを知っている？」

「そ、それは…前に真鍋さんが話してくれて…」

「私、そんな」と言つてないんですけど？」

和が追い討ちをかける

「そ、そうだつたかしら？」「めんなさい。用事があるから、失礼するわね…」

曾我部先輩が踵を返すと一枚のカードが落ちた。それは澪のファンクラブの会員証だった

「そ、それはわざと廊下で拾つたの…」

カードを見ると曾我部先輩の名前がしつかり書いていた

「貴方がストーカーの犯人だな」

「いじめんなさい…悪気は無かつたの…でも私あと一ヶ月ちょっとで卒業でしょ？だから寂しくなって…」

ついに曾我部先輩が自供した

「じゃあもしかして空也君も…」

「やつよ…私がやつたの…」

澪が聞くと曾我部先輩が頷いた、やつぱり同一犯だったか…

「会員番号一一番…」

「私が澪ちゃんのファンクラブの会長なの…もうひと空也君もね」曾我部先輩がもう一枚カードを取り出すと俺がプリントされたカードだった

「マジかよ…」

曾我部先輩が俺と澪のファンクラブの会長…だったのか…

「桜高祭のライブの時二人ともすげく輝いてた。最後に空也君が澪ちゃんをかばつて抱き合った所も…」

曾我部先輩が説明してくれるのはありがたいが、それは言わなくてもいいんじゃないかな？聞いてて凄く恥ずかしい…

「最初、空也君が曲が始まるまで喋ってたでしょ？あれは澪ちゃん

のためだつてすぐに分かつた、だつて澪ちゃん凄く緊張してたから
… そんな仲間思いの空也君や、皆の励ましがあつて歌う事ができた
澪ちゃんがとても眩しく見えたの」

なんだかんだ言つてよく見てるな、この人…

「私もそんな風になりたかった、でもなれなかつた。だからファン
クラブを作つて応援しようつて決めたの」

「もういいよ。先輩…」

俺が曾我部先輩の肩に手を掛ける

「俺たちは先輩を責めるつもつは無いから…」

「空也君… こんな私を許してくれるので…？」

俺は頷き笑つた

「あつがとつ… 空也君… ー」

曾我部先輩は俺に抱きつき泣いてしまつた、年上だけど、やつぱり
女の子だな…。少し恥ずかしいが今回仕方ない…

「『めんなさい… みつともない』とこいつを見せてしまつて…」

しづめりへると曾我部先輩が泣き止み俺から離れた

「どういたしました…」

「やつぱり軽音部の皆や和が信頼する意味が良く分かぬわ。やせし
く包んでくれる…生徒会に引き抜きたいくらいね」

そんな事を言わないでくれ、恥ずかしい…

「遠慮します」

「やつこいつと思つたわ…本塙リーメンなぞ、澪ちやんも空也も

曾我部先輩がもう一度深く頭を下げた

「もうここですよ、曾我部先輩。私も話が聞けて嬉しかったですし、
空也の言ひとおり責めるつもりは無いです」

澪がそつこつて俺たちは生徒会室を出た

「なあ、空也。私たちから曾我部先輩になにか出来ないだろ?」

部室に戻る最中に澪が聞いてきた

「そうだな、なにかしてあげたいな。あんなに俺たちの事を想つて
くれてたんだ。そう思つても当然だな」

俺たちが出来るのは、音楽しかないだろ?と澪と顔をあつた…部室
に帰つたら既に提案してみよつ…曾我部先輩のためだけにライブを
する事を…

俺たちが部室に戻ると、まだ既に残つていた。つかひつい、今の
うちに話しておこう

「長かつたな——一人とも！何してたんだ？」

律が俺たちの姿を確認し声を上げる

「三人ともよく聞いてくれ。卒業式の日にある人のためだけにライブを開きたい。嫌なら嫌と言つてくれて構わない。俺たちはたとえ二人だけでもその人のためだけにライブをする」

俺の横に居た澪が頷いた

「私たち一人だけでもあの人のために、感謝の気持ちを込めて演奏したい」

俺たちの真剣な目に反応したのは律だつた

「あたしはいいよ。あたしたちは軽音部じゃん。水臭い事いうなよ
な！」

「アーティスト・空也君」

「やあ、うん、クーくんー。遼ちゃんー。」

律を皮切りに皆が頷いた。普段はやる気が感じられないがいい仲間だと本当に思った

「ほんとうにがとうな」

澪が皆にお礼を言つ。それを見た三人は笑顔だつた

「で、なにやるんだ？」

律が譜面を出す

「今日は、ボーカルが俺と澪、曲は『ふわふわ』と新曲『キミノトモダチ』でやらせてくれ」

ライブの曲目を俺主体の「元決めて、その一曲を練習する」とになった
「和に卒業式が終わつた後で講堂が借りれるか聞いてくる。皆は練習してくれ」

俺は再び生徒会室に向かつた

「和、何回も来て悪いな」

曾我部先輩は帰つたようでは好都合だった

「空也、今度はどうしたの？」

「卒業式が終わつた後、講堂を貸してもらいたい」

单刀直入に用件を言い説明する

「そういうことなら構わないわ。私も何か手伝えるかしら？」

承諾を貰い、和が聞いてくる

「じゃあ。当日に曾我部先輩を講堂に連れてきてくれるか？」

「分かったわ」

和は頷いた

「悪いな、世話かけて」

「大丈夫よ。私も曾我部先輩にはお世話をなつたから。ライブ楽し
みにしてるわ」

「ああ」

和に右手を上げて応え生徒会室を後にする

「本当にあの行動力は生徒会に欲しいわね」

和がそんな事を呴いていたなんて知る由も無かつた

「生徒会の許可を取つてきた。これで心置きなく練習が出来るぞ」

俺の言葉に皆は笑顔を見せ、練習に気合が入った

そして円田が過ぎ、卒業式の田…

「どうしたの？真鍋さん？講堂なんかに連れてきたりして？」

和が曾我部先輩の手を引いて講堂に連れてくる

「私たちから先輩へのプレゼントです」

和の声を聞き、俺は幕を上げるスイッチを押して定位置に立つ

「曾我部先輩、『卒業、おめでとう』がいいですね」

「これは俺たちからの感謝の印です。聞いてください。『ふわふわ時間』そして新曲『キミノトモダチ』」

澪の言葉に俺が続ける

「ワン・ツー・スリー・フォー」

律がリズムを取り、初ライブの時のように澪が『ふわふわ時間』を歌い上げ、続けて俺が『キミノトモダチ』を歌い上げる。この曲はこのシチュエーションにピッタリの曲で歌っていると曾我部先輩から涙が落ちていた

「曾我部先輩…」

和が背中をさすり曾我部先輩をなぐさめていた

「ありがとう…ありがとう空也君、澪ちゃん、軽音部の皆さん…」

曾我部先輩の涙は止まらずしばらく泣き続けた。それを見て俺と澪は微笑んでいた

「曾我部先輩…泣かないで下さー」

俺が舞台を下りて曾我部先輩に歩き寄る

「空也君…」

「これは俺たちの感謝の気持ちですから…」

俺は笑ひしゃう指さる

「おやじ郎…」

またも俺に抱きつかれ、曾我部先輩が泣きじゅぐる

「やね～クハ」

「おやじ郎…曾我部先輩…」

「おお～…」

律は一いやいやしながら、紺は顔を少し赤らめ、唯が皿をキリキリさせとれぞれ呟く

「ここなあ…」

なぜか澪は羨ましそうに見てくる

「最後に、おやじ郎と澪ちゃんにお願いがあります」

泣き止んだ曾我部先輩が俺から離れ、改めて向き直る

「サイントヤー…」

何を言こ出すかと思えば…つてサインかよ…

「やれなりお安い御用だ」

俺は普段仕事で使つてゐるサインを色紙に書いた

「わ、私もですか！？」

「当然よ」

澪はギクシャクした手つきでサインを書いた

「今日は本当にありがとうございました。今日の事は一生忘れないわ」

曾我部先輩は最後に笑顔を見せて去つていった

「やつてよかつたな……」

「そうだな……」

俺の弦きこ、澪が答える。俺たちは笑顔で見送つた

ちなみに和が曾我部先輩の跡を継いでファンクラブの会長になつたことを知るのは二年になってからの話である

第十一話（後書き）

この話は空也たちが一年の時の話らしいですけど。梓が全く絡まないで一年の時にしました。和が生徒会長になるのは三年からなのでこの小説の中では曾我部先輩との引継ぎの場面はカットします

次の話は少し時間を戻し、バレンタインの話を書きたいと思います

第十一話

曾我部先輩卒業ライブの練習が真っ只中の1月初め

「バレンタインか…」

練習帰りの澪がそう呟いた

「もうそんな季節か…すっかり忘れてたな…」

普段の軽音部とは思えない練習の日々…ではないが、少なくともこれまでよりか練習する頻度は多くなって忘れていた

「く…空也…誰かから貰うのか?」

澪が言ごさりやうに聞いてきた。

「そんな約束をした覚えは無いな」

「や、そうか

澪は少しホッとしたような表情だった

「どうしたんだ?」

「いや…なんでもない…」

手と首をブンブン振つて否定する

「やうか……いないのか……」

何かブツブツ言つてゐるが、この際気にしないでおけり……

澪と別れ、自宅に入る

「おかえりなやこませ、空也様」

和田が出迎えてくる

「お前、普通に歸るようになつたな」

クリスマスからここまで和田は普通に家に居た。なんでも親父からの命じし。まあ楽だからいいんだけど……

「空也様にお荷物が届いております」

和田は何個も小さい箱を持ってきた。あて先を見ると色々な会社の社長令嬢のものばかりだった

「世間はバレンタインですからね。これを機に天城グループとの関わりをとこう者ばかりでしょうね」

和田が冷静に分析する

「中身はほとんどチョコか……俺を高血圧＆糖尿病にさせる気なのか？」

「いともありますよ」

和田が一つの箱を開けるとスカイリーの形をチョコにしたでかい

やつがあった

「どうやって食つてんだよ……」

「気合入つてますね」

そうこうしてじゅねえよ……

「まあいい。これ全部執事たちで食つてくれ」

「私たちが……ですか？」

和田は見るからに嫌そうな顔をした

「お前は太つた俺を見たいのか？」

「それはそれで面白そりですけど……」

おい……

「冗談です。畏まりました。中には独り身の執事も居ますしね、これでぬか喜びをせいやつましょっ」

和田は悪しきな笑いを浮かべる……最悪だなコイツ……

「とりあえず俺は着替えてくるな

「畏まりました。私はこれを片付けてお食事の準備を致します」

「頼むな」

俺は自室に上がり私服に着替え、リビングに下りると食事の用意が済んでいた

「良いタイミングですね空也様」

「お前も一緒に食えよ」

食卓を見ると俺一人分だったので和田にそう提案する

「宜しいのですか?」

「一人で食つよう」一人で食つたほうがいいだろ

「では、お皿葉に甘えて…」

和田は自分の分の食事を用意し一人で夕食を食べる

「空也様、さつきの件ですけど。あの中からお決めになる気は無いのですか?」

「ん? 何の話だ?」

「結婚相手でござります」

何をいきなり爆弾発言してるんだ?

「まだ高校生だらうが」

「高校、大学なんてすぐ終わりますよ。空也様もあまりお氣になさ

れてませんけれど、私共、執事にとつては『死になると』ハレドアゼー
ますから」「

だらうな。執事は俺達に仕えてるんだ。執事なりに考えてくれてる
のだらう

「ま、あんまり『死』にするなよ。楽に行こ」ハリギ

俺は食事を食べ終わり、ギターのメンテナンスをするため自室に戻
つた

「ハシモトか…」

メンテナンスが終わりヘッドフォンアンプに繋ぎギターを弾き、風
呂に入つて就寝した

そして数日が過ぎ、本日一月十四日…

「空せ】一・今日は何の日か知つてるか?」

いつもは自転車通学の大地が俺と一緒に登校する

「ハコ ハの誕生日」

「やうなのか?」

「ああ」

会話が終わり無言で登校する

「やつこり」とじゃない！今日はな！バレンタインだ！」

なんでコイツは」なんにテンションが高いんだ？

「はいはい…」

適当に相槌をうつて歩く

「なんだ？空也、自分が貰えないからって拗ねてんのかよ。俺は既に一個貰ったのだ！」

意気揚々と箱を俺に見せ付ける、これって俺の家に届いてたやつじやねえか…一度中身を見たが…たしか『空也様大好き』って書かれてなかつたか？

「なんと朝ポストを見たら俺宛に入っていたのだ！」

和田の仕業だな、面白い事するな。アイツも…

「お前、中身確認したのか？」

笑いそうになるのをじらえて、大地に聞く

「いや、まだだけど？なんだ？羨ましいのか？」

「ここは乗つていった方が面白いそだな…

「ああ、羨ましいね。俺にも中身を見せてくれよ」

「仕方ない、空也の頼みだ。いくぞ！セーの…」

勢い良く大地が箱を開くと案の定『空也様大好き』の文字があつた

「残念だつたな…」

笑いながら大地の背中を叩く、大地は静かに泣いてチョコを齧つていた

学校に着くと元気を取り戻した大地が元気良く下駄箱の扉を開いたが一個も入つていなかつた

「ちくしょー！空也はどうなんだよ！」

大地が勝手に俺の下駄箱の扉を開けると落ちるほどにチョコが入つていた

「なんだよー！ちくしょー！」

大地は泣きながら走つていった

「こんなになるまで入れんなよな…」

俺は冷静に入つていたチョコを鞄の中に入れ、教室に入った

「おはよう、空也。不動君が教室に来てからずっと泣いてるけど、どうかしたの？」

自分の席に着くと和が話しかけてきた

「世の中の理不尽さに泣いているんだよ

「ふうん… そうだ空也、はいチョコ。いつもお世話になつてゐるから

和がナチュラルに渡してきた

「サンキュー、和」

「クーくん、私も作つてきたよー！ 憂の分も預かつてきた！」

唯が二つ俺に渡してくる。姉妹で一個で良いだろと思つたが素直に受け取る

「やつぱり天城君はモテてるね～」

俺の席の隣の女子が話しかけてきた

「朝から騒々しいだけだよ」

「謙遜しないの。はいチョコ、私も作つてきたんだ」

またチョコを受け取る。もう数えんのもめんどくさくなつてきました

「やれやれ…」

とりあえず落ち着こうと鞄から教材を出して机に入れようとするが何かに当たり教材が入らなかつた

「中にもかよ…」

中には数個のチョコが入つていた

「す、」いわね、空也。もう何個目なの？」

「もう数えんのもめんどくせー……」

「さすがクーくんだよー。」

「何がさすがなのかは良く分からないが、あまり突っ込まないでおこつ

「桜高祭のライブが効いてるわね……」

「だらうつな……」

それから休み時間の度に別のクラスの娘からチョコを貰い続けた結果……

「これ……何年分のチョコなの？」

鞄に入りきらなくなり、机の上に溢れていたチョコを見ながら和が咳いた

「きつと俺を高血圧と糖尿で殺す気だな」

全部が全部本命では確實に無いだらうから、おもしろ半分のやつが大半だらう……

「大地ー！紙袋貸せ！持ってきてんだろ？」

「チクショー！空也のバカ……！」

俺に紙袋を投げつけ泣きながら出て行ってしまった…

紙袋に机の上にあるチョコを入れて部活に向かう

「あークウーこれみるよーってクウもすげー！」

音楽室のドアを開けると澪の指定席の前に大量にチョコが積まれていた

「あ…空也…どうしちゃうこれ…」

澪が俺に助けを求めてくるが、俺も同じ状況だったので助けようがない

「今日のお菓子はチョコケーキよ～」

紬がティーセットを持ってやってくる。またチョコだ…

「唯一俺の分も食え！」

「あいあこやー！」

唯の皿の上に二つチョコケーキを乗せる

「律…私の分も食べていいぞ…」

「マジー・ラッキー！」

唯と律が嬉しそうにチョコケーキを食べる

「『1』あんなセ...やんなに貰つたんとは思つてなかつたから...」

紬が謝る

「謝らなよ。俺たちだつて予想外だつたんだ。気持ちだけ受け取つとくよ...」

少しだけ消費しようとしたチヨウを齧る。つい甘い...

「紬、すまないがブリックを頼む」

「せこ、じりー」

紬からブリックを貰い甘いのと苦いのを往復せらる

「【空】あ...お願い私のも消費して...」

澪が半泣きで自分のむりったチヨウを指差す

「そればっかりは勘弁してくれ...」

「だよね...」

「「はあ...」

俺と澪のため息が揃つ

「さすがに我が軽音部の一枚看板は違いますな

「だよね~さすがクーくんと澪ちゃんだよ~」

「 「嬉しくないよ……」 」

律と唯の言葉をまちしても揃つて言つ

「 霧...練習するか...」

「 そりだな...」

俺と霧は開き直つて練習を始め、チヨコに手を付けなかつた

「 またかよ...」

部活帰りに下駄箱の扉を開けるとまたチヨコが入つていた

「 「はあ...」 」

霧の方にも入つていたらしくまたため息が揃つっていた。その日の帰
り道:

「 ぐ、空也...」

いつもの帰り道を一人で歩いていると霧が口を開いた

「 もう、いっぱい貰つて嬉しくないかもしねないが……貰つてくれるか?」

霧が鞄の中からチヨコを取り出して俺に差し出していた

「 もう...こりないか...」

「チョコを差し出していた手が下がったが俺はその手を掴んでチョコを受け取った

「あ…」

俺は中に入っていたチョコケーキに食べる

「美味しいよ、ありがとな。澪…」

俺は笑つて澪の頭をポンっと叩く

「うわわわわわわ。受け取ってくれてありがとうございます…」

澪の顔は笑顔だった。俺は慌てて前を向く

「まあ…なんだ…ホワイトティー、楽しみにしてる…」

俺の顔はいま絶対に赤くなってるだろう

「クスッ…ああー楽しみにしてる…」

俺たちは再び並んで歩き出し、俺たちは自分の家に帰った

鞄と紙袋の中身を確認して和田が突っ込む

「しかたねえだろ…いらないと追い返すわけにもいかねえし…」

「貰いすぎです。空也様」

「ですが…どうするんです?」こんな量…」

「とつあえず冷やしてくれ。」それで当分チヨコヒマは困らん

「困ったものですね。空也様にも」

和田は困った表情をしていたがどこか嬉しそうに笑っていた

《澪 Side》

私はお風呂に入りながら空也のことを考えていた…

もつ受け取つてもらえないと思つていた。

音楽室で空也を見たときから…空也は鞄と紙袋にいっぴんチヨコを貰つていたから…

私ですらこんなに貰つたんだ、空也がそれ以上貰つてこるのは想像するには簡単だつた。

でもせつかく空也のために作つたんだ。自分で食べるんじやなく、空也に食べてもらひたかつた…だから勇氣を出して空也に差し出した…少し待つたが空也から手は伸びなかつた

やつぱり受け取つてもらえなかつた…そう思つた矢先に空也がチヨコを受け取つてくれた。その場で食べてくれた。「美味しい」って言つてくれた、それがとても嬉しかつた…

やつぱり私は…空也が…空也の事が好きだ…

中学の時からずっと私を支えてくれた空也、ギターが壊れて塞ぎこんでしまった空也、すこし照れくさそうに私の隣に居る空也、笑つて私の頭を撫でてくれる空也、そのどれもが空也だ…私は空也の全

てが好きなんだ…改めて確認できただけでも。充分だつたと思つ…

空やは私の事をどう思つてゐるんだろう?

誰にでも優しく、仲間想いで、皆を平等に接する空や…それをしない空やは空やじやないと言える位だ空やが私だけを見てくれるとは思わない、律やムギ、唯が困つていたら躊躇することなく手を差し伸べるのが空やだ…

どんなに考へても答えが出なかつた

第十―話（後書き）

バレンタインで澪の空せへの気持ちを表してみました
次にホワイトデーの話をして一年生に入ります

第十二話

曾我部先輩へのライブが終わり、日付は三月十四日…世間はホワイ
ト♪テー

「おはよー、空也」

「よつ、和。これバレンタインのお返しだ」

俺は和に小さい箱を手渡した

「なんだろ、開けて良いの?」

俺が頷くのを確認すると、和は箱を開けた

「あら、万年筆ね」

「あまり使わねえ物より実用的な物を渡したほうがいいだろ?」

「そうね。じゃあありがたく使わせてもらひわ」

和はうれしそうに自分の席に帰つていった

「ほら、お前にも」

俺は自分の席の隣の女子にも小さい箱を机の上に置いた

「天城君、私なんかにもいいの?」

「かまわねえよ。机の中や、下駄箱に入つてたやつは調べよつがねえから手渡しにくれたうちのクラスの女子や知り合いにはちやんとお返しをしねえとな。これが天城家のやり方だ」

女子は笑顔で素直に受け取つた

「唯には憂ちやんとお揃このペンドントだ

星の形をしたアクセサリーが付いたペンドントを渡す

「ありがとークーくん！ 憂も喜ぶよー！」

それからじしまらくホワイトナーのお返しを配り、放課後：

「疲れた……」

俺は長椅子に横になつていた

「クウもマメだなーあたしなんてバレンタインのチョコも作つてねえのに」

「やうだな……だからお前にほやりん…紬ー！」

体を起こして、紬にまたも小さい箱を軽く投げて渡す。中にはブレスレットが入っていた

「あつがとつ」
「あつがとつ」

紬はうれしそうに笑つた。紬は同年代の誰からプレゼントを貰つのが少ないみたいで、じつにうことにほんと人一倍喜んでくれるな

「つ、ちや、こうつちやんー私も貰つたんだよー。」

唯が白襦袢にペンドントを律に見せ付ける

「い、いのせーーそんなの見ても羨ましくねーー。」

唯と律の漫才を見ていると、澪がチラチラといひつけを見てきた

「あ、当然の反応だよな…」

俺は小声で囁くと、アコギを手立てBGM交わりに練習した

『澪 S.ue』

唯もムギも羨ましいな…『ホワイトナー、楽しみにしてた』空也の言葉が蘇る。空也は嘘をつかないって信じたい、そう思つて空也を盗み見る、空也はいつもと変わらない笑顔を見せている

「はあ…」

ため息をついても仕方ないがやっぱり寂しいな…すると突然アコギの音が小さく鳴つた、振り向くと空也がアコギを弾いていた。律たちの邪魔をしないようにボリュームを抑えて。なんとなく背中からでも空也の気持ちがわかるような気がする。私は紅茶を持って空也の隣に座る

「……」

空也は何も言わなかつたが、少し私を見て笑つた

「俺はお前に對して絶対に嘘はいわねえよ…絶対にな……」

しばりく弾いていると空也が私にしか聞こえない声でやう言つてへれた。まるで私の考えていた事を分かつっていたかのように……」

「うん……」

私は頷いた

そんなやり取りを見ていた他三人…

「ねえいつひやん…澪ちゃんつひやつぱんじクーくんの事…」

唯が小さこ声で律に話しかける

「今はそつとこしてやろう……」

「でもお似合いね…」

「そうだな…」

律が落ち着いた様子でそう呟いていた

ほほつむおつじた練習をあまつしない部活がお開きになり、澪といつもの帰り道…

「澪。手を出して」

俺は澪の手に綺麗にラッピングされた箱をポケットから取り出す

「前で渡しても良かったんだが…ちょっと濡れちゃう…」

頭を搔きながら澪に差し出す

「空(から)せても緊張したりするんだな…」

「俺は機械じゃ無いんでね…」

そんな事を言つ間も俺は澪の顔を見れなかつた

「開けてもいいか?」

俺から受け取つた澪がそう聞いてくるので、頷いた

「イヤリング…」

小さい箱を開けるとシルバーのイヤリングが入つていた

「ネックレスはクリスマスに渡したから、ペンダントはジャンルが被るしな。澪に似合つと思つ」

「これは俺の勝手な意見だけどな…」

「あ……あつがとひ……」

澪は少し照れながらも俺にさしつけられた

「ああ

照れ隠して澪の頭をポンと叩き、俺は歩き出した

《澪 Side》

意外だった、空也が緊張するなんて… 桜高祭のライブも、曾我部先輩の時もあんなに堂々としてたのに、空也はなんでも出来るってイメージだった。でも落胆したとかそういう感情は一切無い、むしろ私に弱い部分をみてくれる事が嬉しかった

「なあ、空也」

イヤリングをポケットにしまい、空也に話しかける

「一年生になつたら同じクラスになれるとな」

「わうだな…」

私たちは笑い合つて自分の家に帰つていった

《空也 Side》

翌日… 憂ちゃんの桜高受験の合格発表…

「LJの場面に俺は必要か？」

私服で俺は桜高に来ていた

「やうこつなよ、空也」

そういうて澪は自分の鞄からカメラを取り出し前に扉の扉と優ちゃんを撮った

唯が優ちゃんの手を握っている所から察するに合格したんだ。LJ。というより姉で合格できたんだ、妹が落ちる事は天地がひっくり返らない限り無いだろ

そんな事を考へていると唯たちが皿立ち始めた

「落ち着け、唯。優ちゃんおめでとう」

いまだほしゃいでいた唯を落ち着かせ、優ちゃんに向き直る

「あつがとうござります。空也さん…あと、ペンドントあつがとうございました」

やつぱり礼儀正しいなこの子…

「気にはんなよ。んなことよつ早く家帰つて着替えて來い、合格祝いだ」

「分かりました。行LJへ。お姉ちゃん」

優ちゃんは唯を連れて一回家に帰つていった

「ん？」

誰かに見られているような気がして辺りを見ると周りの女子が俺を見ていた

「中学生にも人気だな～クウ！…………嘘だと思つたら笑つてみろよ」

律の最後の言葉を聞いて、作り笑いをしてみる

『キヤ————!!』

周りにいた女子数人……といつても結構な人数が一斉に声をあげ、あの人去年こここの文化祭で見た事ある！だの、この学校に受かってよかつた！だの、何で私落ちたんだる…と本気で泣き出す奴も居た

「何だコレ…」

「これが今のクウの人気だな」

「さすがね、空也君！」

俺の言葉に律と紬が反応し、澪を見る少し複雑な表情をしていた

「人気があるのは結構だが…ストーカー騒ぎになんのが嫌なんだよ」

『絶対しません！嫌われたくないから…』

しつかり聞いてやがる…

「やれやれ……」

俺は苦笑いをするしかなかつた

「心配すんな。俺はどこにでも行かねえから…」

ずっと複雑な顔をしていた澪に、澪にしか聞こえないようにしそう歯く

「うん… ありがと…」

澪も俺にしか聞こえない声でそう呟く、それを聞くと作り笑いじゃない笑顔を見せ澪の頭をポンとたたいた

『ナガハシ』

「やめなさい。それと男子にも掲示板を見せてやつてやれ」

校門の方に目を向けるとまだ数は少ないが男子が待っていた

「悪かつたな、独占して」

比較的俺の近くにいた男子に声をかける

「自分は気にしてないです。お気遣いありがとうございました！」

男子が敬語を使って、俺に頭を下げる

「受かってないといな。お前」「

肩をポンと叩き俺は学校を後にした

「空也、ちょっと待つてくれよー」

澪たちが俺についてくる

「少なくとも俺が居ないほうが良いだろ」

「まあ軽いパニッシュだつたしな〜」

俺と律が納得しあう

「空也君は中学生の時からこんなに人気があったの？」

「ここまではなかつたけど、人気があつたのは確かだよ。なあ澪
？」

「そうだな…特に女子からの人気が凄かつた」

紬の疑問に律が答え、澪がその答えを肯定する

「マジか？あの頃は今と違つてギターを弾いてるといひも見せてなかつたし、家の事も知られてなかつただろ」

「だつてクウ、イケメンじやん？」

またそれか…

「普通だろ」

「クウの顔で普通だつたら大地はビリなるんだよ…」

「あいつは人間じやない、魚類だ。魚人だ魚人」

「不動君…ひどい言われようだ」

居ない奴の事を気にして仕方ないぞ、澪…

「けつこつ時間食つちまつたな。唯と豪りちゃんと合流しよ!せ」

俺は商店街で待っていた二人と合流し、ハンバーガーを食べたり、
ウインドウショッピングをした

さあもうすぐ高校一年生だ。部員集めなきゃな…

第十二話（後書き）

ホワイトデーの話と憂の高校合格の話です

すいません短い文章で…

次の話から一年生になります

第十四話

桜舞つ四月…俺たちは一年生になつた

「私一組だ！」

「あたしも一組だぜ！」

「ほんとー私も一組よー」

唯、律、紬が一緒になつたらしく喜んでいた

「澪ちりやんとクーくんは?...」

「一組…」

唯の言葉に澪は唯の期待する言葉を出せなかつた

「澪ちりやん…クーくんは?...」

俺は男子のクラス発表の用紙を見て澪たちの所に戻つてきつた。
別にする必要はあるのか?

「唯達には悪いが、俺も一組だ」

澪の頭に手を置いて答える

「空也…本当にのか…?」

「んな」「じで嘘直つてばつすんだよ。だからそんな寂しそうな顔すんなよ」

俺は澪に一いつと笑った

「歸れん、おはよう。」

一年のクラス表を見てきた憂ちゃんがお辞儀する

「あ、憂ちゃん。制服似合つてんじやん」

律が褒める

「あつがとう」「れこます。あ、お姉ちゃん、クリーニングのタグ付きつけなしだよ。それにこいつも寝癖直つてない」

「起きる時間が遅くなっちゃって」

「わづかよつと早く起きようね~」

憂ちゃんが櫛を取り出し歯の寝癖を直していく

「お前ら姉妹、姉と妹逆のほうが多いんじゃないかな?」

「反面教師つて言葉があるがまたかここまでとはな」

そんな一人を見て律と俺がそつ言つ

「二人ともひどこよ~」

唯が俺たちに抗議してくると予鈴が鳴った

「予鈴だな。教室に行くか…憂ちゃんもまたな」

「はい」

憂ちゃんに挨拶をして教室に向かつ

「一組は一階なんだ～」

「一組だけ一階なんだよ。じゃあな

唯の咳きを上し、俺は歩く

「うつと待つよ空せ～」

澪がそれに慌ててついてくる

「これで一人の仲が進展すると良いんだけどな～」

律がそう咳き

「澪ちゃん頑張つて～」

紺がそう言つていた事を俺は知る由もない

「空せ～待つてたぜ～ぐはあ～」

一組の扉を開けると大地が飛びついてきたので腹にパンチをぶつけ鎮める。一年の時同じクラスだった奴は見向きもしない、他のクラスだった奴は何事かと見てくる。まあすぐに慣れるだろ

「不動君…変わらないな…」

澪も中学の時から見慣れてるので別段、気にした様子も無い

「澪！それに空也も！よかつた／＼知り合いがいて」

和が俺達に近寄る。大地、無視されたな…

「和も一緒にいたか…またよろしく頼むな」

「ひづらにそよじしく頼むわ、澪もよろしくね」

和が澪を見る

「良かった、知り合いがいて！よろしくな、和！」

澪が和の両手を握っていた。俺が居るって言つても、性別が違うからな。和の存在は大きいだろう

「嬉しいのはわからんでもないが、そろそろ座れ、担任が来るぞ」

大地が入り口で氣絶しているのを無視して一人も自分の席に座る

「ん？不動、何で倒れてるんだ？」

「無視してもらつて結構です。先生」

「せうか、では出席をとる。秋山、天城……」

また通じちやつたよ。なかなかやるなこの学校の教師も…

「不動…はそこで倒れてるつと…」

起こす事もしないんだな。哀れ、大地

そして昼休み…新入生の部活勧誘の時間…

「さすがに三年が居る部活は手際が違つな」

一年の教室がある廊下はすでに一杯だった

「澪、ビルを見せて」

律は澪からビルを貰つて確認する。そこには『バンドやりませんか
? 軽音部』といつ文字とギター や ドラムの絵が書かれていた

「良くも悪くも普通のビルだな」

「インパクトが足りない! もっとインパクトがあるもの…」

俺の言葉を律が否定した。そんなにインパクトをビルに求めるのは
違うんじゃないかな?

「お菓子とお茶、お代わりし放題とか?」

「軽音部じゃねえだろそれ」

「音楽室使いたい放題とか？」

「一年になんのメリットが有るんだよ」

「紬と唯の意見をことじげ」とく却下していく

「じゃあクウサギつしたいんだよ?...」

「俺は別にこのままでも良いと思ってる。インパクトを作れば良いのよー。
もしかたねえだろ」

すると俺の肩に手が触れた、見るとさわちゃんが居た

「そりゃ、ピラリ見ついた目にインパクトを作れば良いのよー。」

結果…

「軽音部、よろしくお願ひします!」

「どうしてこうなったんだ?」

俺たちは着ぐるみを着て勧誘していた

「なぜ着ぐるみ?そして何故俺はパンダなんだ?」

澪は馬の、律は犬、紬は猫、唯は鶏の着ぐるみを着ていた

「逆効果だろ。まるで人寄つてこねえじやねえか」

俺はパンダを脱ぎ捨てた

「ダメだよ、クーくん。せつかぐわわちやんが用意してくれたのに」

「わねちゃんの感覚がおかしいんだよ。あ、憂ちゃんだ」

俺が指差すと憂ちゃんが友達と歩いてきていた

「うーいー！」

唯が鶏のまま走り出した。さすがに憂ちゃんも唯とはわからず逃げてしまった

「何アレ…」

俺の近くでツインテールの女子が呟いていた。リボンの色を見るに一年だ

「ほれ、軽音部。興味あるなら放課後、音楽準備室に来てくれ」

ツインテールの女子にビラを渡す

「はあ…」

ツインテールが俺の顔を覗き込んでいる

「どうした？」

「いえ、なんでもないです」

ツインテールを揺らし、足早に去っていった。結局その子にしがビラを渡せず、音楽室に帰ってきた

「ただ熱いだけだったな」

「明日のライブで取り返すしかないな」

机に着ぐるみの頭を置いて話しかつ

「こんなのも作ってみたんだけど……」

さわちやんがメイド服を取り出していた。あんたのせいだ逆効果だつたんだが……

「ああ、午後の授業始まるぞ！」

律が無視していた。さすがにイラッときたんだな

放課後：

「結局着てんじゃねえかよ……」

俺は律に話しかける

「ムギと誰に押し切られた……クウだって……執事じやん……」

「俺はさわちやんに押し切られたよ……」

「「はあ……」「

「一人のため息が揃つ

「いいじゃん、一人とも似合つてないよー。」

「やうねー。」

唯と紬はノリノリだった

「嬉しくねえよ…」

俺は定位置の長椅子に座つてギターのチューニングをしてると扉がノックされ、憂ちゃんがやってきた

「こいつしゃいませー」

唯がメイド服で出迎える

「お姉ちやんー!？」

「お、憂ちゃんー！」

「こいつしゃーーーー！」

「律ちゃんー? 紬ちやんまでー?」

憂ちゃんは全てに対応してくれた

さわぢゃんが澪とメイド服を持って一気に駆け抜けていった

「助けてー————ー。」

「あーあ…」

踊り場から下を見ると毎休みにビラを渡したツインテールが居たが
すぐに歩いていった

「空也さんも、すいじ格好してますね」

「あまり言つてくれるな。とまあえず一人とも中に入れよ」

憂ちゃんともう一人の団子みたいな髪型をした女子を中心に招き入れる
「い」めんね～クリスマスからわちやん、皆でコスプレするのが好きになつたみたい」

憂ちゃんと団子へアーを椅子に座らせ、唯が談笑する

「これ持つてつていいのか?」

「空也君、お願ひ

「はいよ」

紅茶がカップに注がれ俺は御盆におこし憂ちゃんたちのヒロヒロ持
つていく

「執事つまくやれよな～」

「御待たせ致しました。お嬢様…」

上品に一人の前に紅茶とケーキを置く

「これでいいか？」

律の無茶振りを難なくやりきる

「純ちゃん、紹介するね。私の姉の唯

「平沢唯です。よろしくね～！」

憂ちゃんの紹介で俺たちは自己紹介していく

「律さん」

「じゅも～一郎長の田井中律です！」

律の自己紹介をしているとふいに扉が開いた

「ちよつと一律！また講堂の使用許可書出してなかつたでしょ！明日ライブできなくなるよ～」

和の言葉に俺が反応した

「つ～つ～わ～ん…俺、散々言ったよな～

俺と和の二人で律を睨む

「（めんなさい…）めんなさい…（めんなさい…）

律は泣きながら俺達に謝っていた

「 「…………」 」

一年二人は呆然としていた

「次が琴吹紬さん」

「はじめましてー」「めんね～騒がしくて……」

紬の自己紹介の間も和の怒りが収まつてなかつた

「だいたい、空也もだけどその服は何なのよー」

「あたし達に言つなー！」

怒りの矛先が俺に変わる前に抜け出すと澪が帰つてきていた

「次がいま覗き込んでる、秋山澪さん、とても恥ずかしがり屋さんの」

「どうした？覗き込んでないで入れよー？」

「ヤダ、笑うもん…」

澪が顔を赤らめていた

「笑いませんよ、似合つてますし」

憂ちゃんがそつと。澪は少し顔を赤らめながらも入ってきた

「 「かわいいー。」

優ちゃんと団子ヘアーは口を揃えて感想を述べた

「うーん…」

いつの間に入ってきたのかさわちやんが一年一人をじっくり見ていた

「！」の人は？

「山中さわ子先生、軽音部の顧問なんだ…」

「貴方たち…着てみない？」

「」からかメイド服を取り出し提案していた

「 「結構です……」」

「さわちやん、ちょっと黙つてくれ」

さわちやんを黙らせると俺は団子ヘアーに顔をむけた

「最後に天城空也だ。一応副部長をやってる、よろしくな。せっかくきたんだ、演奏を聴いてつてくれ」

俺は皆に田配せして楽器を持たせる

「優ちゃん、ストラップが引っかかる～

「もうだな…」

「裾が邪魔だな…」

各々メイド服に苦戦していた

「やれやれ…着替えて来いよ。待つててやるから」

姫田フシブシ不満を漏らしながら出て行った

「先輩も大変ですね」

団子へアーが口を開いた

「まあな。すまないが、名前を聞かせてもらいたいのか？」

「すいません、鈴木純つていいます」

団子へアーは頭を下げて謝った

「謝る」とほねえよ。鈴木か純、どちらで呼ばれたほうが嬉しい?..

「あ、じゃあ純でお願いします」

「了解だ、純。パートは?」

「ベースです」

「ベースなら漆をよく見とけ。入部するかしないかは自由だが、ベースはこの学校で一番上手いと思つぞ」

「わかりました。でもなんで私が経験者ってわかつたんですか？」

純が首を傾げる

「手をみりやわかる。紅茶を置いた時に手にギターやベースを持つてるとできるタコがあつたんでな」

「す、す、す、あんなちよつとで…」

「俺には充分な時間だ。さて、皆が帰ってきたみたいだな」

すると扉が開いて四人がジャージで帰ってきた

「おひまたせー！あれ？どうしたの？」

唯が元気良く帰ってきて純と憂ちゃんが固まっていたので首を傾げる

「じうじねーよ。わざわざねー」

それぞれが所定の位置について『ふわふわ時間』を演奏するが、ぐだぐだだった

「悪かったな、たいした演奏も出来なくて」

「いえ…」

「明日の新歓ライブで五曲演奏するから見に来てくれよなー」

律の言葉に純が苦笑いで応え憂ちゃんと共に帰つていった。憂ちゃんはともかく純の方は望み薄だな

「や、 もう今口しかないんだ、 練習するやん」

俺の声を聞いて皆が練習を始める

《憂 S.hide》

「純ちゃんだった？」

私は隣で歩く純ちゃんに話しかける

「なんか… 憎かった。憂のお姉ちゃんもそうだけど、皆の個性が強くて、空也先輩がそれをうまく纏めてた」

「空也さん、 憎かったね、純ちゃんの手を見ただけで経験者だって分かるし、お姉ちゃん達が帰ってくるときも一番最初に気付いてた

「それでいてカッコいいんだもん。なんか卑怯だよ」

卑怯って… 空也さんも大変だなあ…

「あたし、トイレ行ってくるから先行つけて」

「これは望み薄かなあ…

翌日…

《空也 S.hide》

「曲田確認するべー、『ふわふわ時間』『Funny Bunny』
『私の恋はホツチキス』『ふでペン~ボールペン~』『キミノトモ
ダチ』の順番でやる

「ねえクーくん、ボーカルは私とクーくんだけで良いの?」

唯が俺に聞いてきた

「良いんじゃねえか。今回凌にはコーラスをやつてもらつか

俺は凌を見る

「コーラスなら……なんとか……」

「ところどりだ

「了解です!クーくん隊員!」

唯が敬礼する

「俺からは以上だ。じゃあ部長、号令を

「わかった。絶対成功させるべー!」

「「「「オー!」「「

息を合わせ意気込む。まあ一回田のライブだ…幕が上がりきると律
がリズムをとつて、そのリズムに合わせて『ふわふわ時間』と『F
unny Bunny』を連続で演奏する

『えー嘘かよ!』入学おめでと!『やれこます! 軽音部です!』

俺が水を一口飲んでMCを開始する

『楽器が出来ないとか、歌が上手くないとかそんな小さいことは気にしないで誰でも気軽に音楽準備室の方に遊びに来てください!僕の隣に居る娘はギターを始めてまだ一年です。しかも最初は軽音部つて軽い音楽つてかくので口笛とかカスタネットを叩くもんなんだと思つてたそ�です』

『クーくんそれ言わなくて良いじゃん!..』

『まあ聞け、てかこいつつ場でクーくんつて言つなよ』

唯に突っ込む

『クーくんはクーくんだもん』

『はいはい、話を戻しますけどギターを今から始めても最低限ここまではできます。だから楽器が出来ないって理由だけで入部を諦めずに、気軽に遊びに来てください!では次の曲行きます!聞いてください』『私の恋はホツチキス』…』

正直な所、この曲が成功するか否かでこのライブが決まるだらつ、それほど唯のパートが難しいが唯は難なくやつてのけたが…

「歌忘れてやがる…」

それに今氣付いたらしく、テンポが乱れたが、それを救つたのは澪

だつた

「澪…唯、早く歌え」

澪が歌い、ピンチを救つた。テンポを整えた唯が歌に参加し事なきを得た

それから『ふでベン～ボールベン～』と『キリノトモダチ』を連続で演奏してライブは終わった

「何してんだ？お前ら？」

機材を部室に運び終えて一息していると澪、唯、律が扉を少し開けて外を覗いていた

「何で来ないかな？ライブも良い感じだつたのに…」

律がブツブツ行っている

「お茶入ったんだけど…？」

「サンキュー」

お茶を受け取り、三人の下に向かう

「いい加減にしろ、お茶でも飲んで待つてろよ」

三人を軽く叩いて指定席に戻らせる

「仕方ない、憂ちゃん。捕まえて入部させるか」

お茶を飲みながら律が呟く

「虫じやねえんだから。憂ちゃんにも事情があるだろ」

「コンコン…」

そんなことを話していると不意に扉がノックされ、あの時のツインテールが入ってきた

「入部希望なんですけど…」

「今なんと?」

皆が固まっていた

「入部希望だよ。よつこや、軽音部へ」

俺は立ち上がり、ツインテールを中に招き入れた

「新入部員確保～！」

「キヤー――！」

律がツインテールに飛びつき、抱きついていた

第十四話（後書き）

アニメ第八話です

二年生に入り、梓が入部しました。

がんばります

第十五話

我が軽音部に待望の新入部員がやつてきた！

「名前は…」

「あ…中野です…」

「パートは?」

「好きな食べ物は?」

律の質問に答えただけで、紹、唯の質問にまじめに答えてはなってきていた

「お前ら、落ち着け」

中野と部員の間に割りてはいる

「なんだよーークワードつか質問してんだよーー！」

「その質問攻めで喋れなくなつてんだよ、落ち着けって」

俺は三人を落ち着かせる

「悪いな、いきなりこんなことになつて」

「いえ…あつがどうぞこまよ…」

中野は俺に頭を下げる

「次騒いだら澪の鉄拳制裁が待ってると思え」

俺と澪がサイドに付いて中野を真ん中に立たせる

「「恐怖政治だ…」」

律と唯が抗議する

「騒ぐなと言つたはずだが?」

「「すいませんでした…」」

澪が腕まくりをしているのを見てしまった二人は黙ったのを確認すると中野を見て頷いた

「えつと…一年二組の中野梓といいます。パートはギターを少しやつてます」

「ギターなら俺とここで正座してるのは唯だな」

俺は唯を指差した

「よろしくお願いします。空也先輩、唯先輩!」

梓が深くお辞儀をする

「唯先輩……先輩……」

先輩といつ響きが良いのか唯の顔はにやけていた

「あこいつはまつとせ、んじゅちょっと弾いてもらひつか」

俺は俺のギターを手渡した

「ここのギターって… FORESTですか？」

「詳しいな、ここのギターはANTELOPEって書いてな、FORESTの新型でまだ日本じゃまだ発売されてない」

「そんな高級なギター私なんかが触つてしまつて良いんですか？」

「空也のギターってそんなに高いのか？」

澪が聞いてくる

「俺の前のギターを覚えているか？」

澪が頷く

「あれと同じ会社のものなんだが比較的安価のGraass Rootsで、価格は七万程でな。今のギターが会社オリジナルモデルで、尚且つオーダーメイドの配色と作りなんだ。限りなく俺にピッタリ作られたな…価格で言つと…七十五万程になると想つ」

「「七十五万…?」「

澪と梓が驚く、律と唯が固まつた

「まあ……」

紬だけが普通に聞いていた

「そんなことはどうでも良いんだが…とりあえず弾いてみるよ」

半ば強制的にギターを渡す

「わ…わかりました…では…」

梓はぎこちない動きだけれど、充分上手かった。少なくとも唯よりは確実に…

「え、えりでした?」「

梓がじけりを見る

「　　「　　」　　」　　」

女子四人は固まっていた

「上手いな

俺はそつぬき、唯のギターを手に取る

「梓、合せせぬ」

俺と梓は向かい合ってギターを弾いた

ちやんといひながらあわせてくる…初心者でも何でもねえな…

「空也先輩凄く上手いです！今後とも『J指導』よろしくお願ひします
！後、ギターもお返しします！」

梓は田をキラキラさせて俺に詰め寄つてくる

「ああ、教えがいが有りそうだな」

ギターを受け取り、俺は笑つた

「さて……唯先輩、ビリ弾いつ？」

まだ固まつていた唯に話しかける

「あ……まだまだねー！」

見栄を張りやがった…

「じゃ、弾いてもらおつか？唯先輩？」

俺が借りていた唯のギターを唯に差し出す

「いたたたたー！新歓ライブの時、ぎっくり腰になってしまつて…」

苦しい言い訳だ…

「むづこづこ…」

唯を適当に捨てて俺は梓に向き直る

「どうあえず、入部してくれることでいいな？」

「はー！新歓ライブの演奏を聴いて感動しました！これから」指導
よろしくお願ひします！」

梓が深くお辞儀する

「うう…ま、まぶしくて直視できない…」

唯… どうあえず黙つてくれるかな…

「あ、そつだ… 空也先輩、入部届です」

梓がポケットから入部届けを俺に渡す

「確かに受け取ったからな。明日からよろしく頼むぞ」

「はいー。」

梓はもう一度深くお辞儀して音楽室を出て行つた

「私…どうすればいいのかな…」

「「練習じる…」」

唯が突然慌てだして澪と律が突つ込んだ

「クーーーン、ギター教えてください～

唯が泣きついてきた

「見栄を張るからそういうことになるとなるんだ、自業自得だな」

「今日の空せは手厳しいな……」

「今まで甘やかしすぎただけだ」

「俺は唯にギターを渡した

「少なくとも今日は練習してもうつからな」

「は、はーーー」

唯はギターを持って立ち上がり、お開きになるまで練習した

「唯、フラフラだったな」

「ああ

「いつもの帰り道を澪と一人で歩く

「澪は今の軽音部をビリ弾ひへ。」

「ビリ弾ひ?」

「たった一人とはいえ、後輩ができたんだ。いつまでもこんなだらけといった部活をやっても駄目だと想つんだ。せめて、今のティータイムの時間と練習の時間をひっくり返すくらいはしねえって思うんだ」

「空也もひやんと軽音部の」と考へてるんだな

「まあな…ま、少し頭の片隅にでも入れといってくれ」

一人で悩んでも仕方ないので、解散する

翌日…

「いんにしきー！」

梓が意氣揚々と入ってきた

「おー元気一杯だなー！」

「はい！放課後になるのが待ち遠しかったですー！」

「じゃあ早速…」

「練習ですか？！」

「お茶にじよつ…」

だろうな…

梓は戸惑いながらも席に座つて紅茶を貰つていた

「はい、空也君」

「ああ…」

とつあえず受け取り一口飲んでテーブルに置いてギターを手にかかる

「空也先輩！練習されるんですか？」

「ん？ああ、一緒にやるか？」

「はーー。」

梓はウキウキしながら俺に近づいてくる

「まー」

俺は梓にこれまでの譜面を渡す

「ありがとうございますー空也先輩！何からやりますか？」

「好きな奴選べよ……」

「はーー。」

ワクワクしてるのが田に見えて分かるので紅茶を啜りながら笑っていた。その時さわちやんがやってきた

「あら、貴方が新入部員の梓ちゃんね、顧問の山中さわ子です。よろしくね」

「よ、よろしくお願ひします……」

さわちやんは袖ヒルクティーを頼んで、梓を凝視していた

「あの……なにか？」

「猫耳とか…似合いそうね…」

さわぢやんが良からぬことを呴いていた

「あれほんりとせ...」

「あれって何よ！空也君！」

さわちやんを無視して俺は練習を再開し、練習に熱が入ってきた。
けつこうな音量になつたとき

גָּדוֹלָה

さわちやんが怒鳴つた

「ヒツ！」

梓が反射的に俺の後ろに隠れ、目にいっぱいの涙が溜まっていた

「さわちゃん…あんた教師失格だ…人の上に立つ資格はねえ…」
俺はいつもより低い声でさわちゃんを見る

「…空也想…」

いつもとは違つ雰囲気の俺に頭が息を呑んだ

「俺と梓が何か悪い事でもしたのか?」こじは軽音部の部室だ、お茶

を飲む場所じゃねーんだよ。俺と梓の練習が本来軽音部のあるべき姿じゃねえのか？なあ律、目標は武道館じゃなかつたのか？」

律は言い淀んだ

「毎日、お茶飲んで、雑談して、ちょっと練習して、そんなちょっとの練習で武道館にいけると思つたのかよ、音楽はそんな甘くはねえよ！別にティータイムを否定するつもりはねえが、限度つてもんがあるだろうが！そんなんだらけた部活を続けるつもりならこいつから辞めてやるよ、ジャズ研でも外バンにでも入つてやるよ！」

俺はギターを持って音楽室から出て行く

「空也先輩！待ってください！」

梓が俺を追つて着いてきた

「空也先輩！本当に辞める気ですか？」

校門付近で梓が話しかけてきた

「辞めねえけど？」

俺はいつもの調子で振り向いた

「え？」

振り向いてこないと思っていたのか梓が驚いていた

「お前が俺に着いてきたことが嬉しい誤算だったよ

立ち話を長く続けると見つかる可能性があるので歩きながら話す

「あいつら、今頃緊急会議を開いてるだろ? 俺と梓が辞めるんじゃないから、たぶん澪あたりが中心で仕切るはずだ。俺はその答えを聞くまで部には戻らん」

「練習はどうするんですか?」

「音合わせは出来なくなつたが、個人練習は続ける。いいでな」

俺が立ち止まり、目を向ける

「貸しスタジオですか?」

「いいなら、音を出しても問題ないからな。お前も付き合へ」

「でも私お金ないです」

「気にするな」

俺は躊躇無く入つていった

「あ、空也先輩、待つてくださいよ」

梓も慌てて中に入る

「皆、久しぶりだな」

俺は受付の男性に話しかける

「空也様！？お久しぶりで、『そこまで…大きくなられましたね…』

「あの部屋はまだ残つてゐるか？」

「はい、あの頃のまま残つております」

「じゃ、使わせてもらひな。しづらいくらいに来る事になると思つかりよろしく頼む」

ふと後ろを見ると梓が固まつていた

「どうした？ わたしとくべか？」

「あ、はい！」

ハツと梓は気付き俺に付いてくる

「あのー空也先輩つて…ここの人達とどうじつづき関係ですか？」

スタジオに入つてから梓が聞いてきた

「簡単言うと経営者と従業員だな。ほら、これを使えよ」

俺は質問に答へつつ梓の前にアンプを置いた

「あ、ありがとうございます…まあって経営者…？高校生で…？」

いい反応だな…

「あなた。やあ、やつやの続きを始めた?」

「あ、いいですー。」

梓は気にしないことよつこしながら譜面を見せる

「よし、じゃあ続きをからだな」

それからじいじばーへー一人で練習し梓は鞄を学校に忘れてきているので早めに解散する

「俺はしづらへーでありますからお答えを待つつもりだ。お前はまだつするへ戻るなら俺は止めはしない」

「私もここに居ます。先輩方の答えが悪いものでも、空也先輩は音楽を続けるんですね?」

俺は頷いた

「じゅあ私には戻る理由は無ないです。」指導みたいへお願いします

梓が深くお辞儀する

「了解だ。じゅあここに入れるよつこじく。今日は帰りな

「はい、お疲れ様でした」

梓は出て行つた

「空也様、お疲れ様です。ビツビツ

係りの者…もとい矢野が俺に飲み物を渡してくれる

「サンキュー」

「いい娘ですね。音楽にもの凄く一生懸命で…」

「そうだな…あいつ、しばらへこに顔を出すから、俺が居なくて
もここに通してやつてくれ」

「わかりました」

矢野が頷くのを見ると俺もギターと鞄を持った

「空也様、何があったかは聞きましたが、ひとつだけ言わせてください」

「ん?」

「大丈夫です。自分を信じてください」

矢野は真剣な表情で言っていた

「ありがとよ」

素直にお礼を言つて家に帰る

少し時を遡り…

私の中で昨日の空せの言葉が蘇る

『澪は今の軽音部をやめて帰る。』

「Jの言葉の意味が今、やっと分かった。空せが居ない軽音部は去年嫌といつぱり知つてこる、あの時とは違つ、落ち込んでる感じやない…怒つてこるんだ…

「嘘、緊急会議だ！」

私が声を上げる

「Jのまほじや空せも、梓も辞めてしまつ。それは軽音部ことっても良くない事だと思つんだ」

「空せはともかく、なんで梓まで辞めてしまつんだよ。」

律が首を傾げる

「梓は空せを追つて行つたんだ、梓は練習がしたいんだよ。梓が練習してゐる時の顔を誰か見たか？」

全員が首を振る

「梓は凄い楽しそうな顔をしてたんだ。空せから譜面を貰つた時も、空せから弾き方を教わつてる時もだ」

「私たちもやらなこと…」

私は真剣だったが…

「よつしやー梓の歓迎会でもあるか！」

律が的外れな事を言つてしまい、それに賛同する誰とムギ

「あづにやんには私からメールするよ～」

あづにやんつて…二つの間につけたんだそんなあだ名…

「澪はクウをよひしきなー！」

「何で私が！」

律の言葉に私は驚いた

「澪ちゃんなら大丈夫よー！」

ムギ……なんの確証があるんだ？

「どうなつても知らないからな」

結局押し切られて頷いてしまい…私は空也の家の前にいる

「空也、帰ってるかな…」

勇気を出し、インターホンを鳴らす

「はー」

家から出でたのは前に見た執事さんだつた

「秋山様で御座いましたか、空也様はまだお帰りになられませんが…とりえずどうぞ」

執事さんに中に案内してもらひ、空也の部屋に入る

「ハービーと紅茶、ハーブティーも御座いますが如何なされますか？」

「あ、お構いなく」

「やうはいきません、お客様に、特に空也様のい友人にお茶の一つも出さなければ私共が空也様に怒られますから」

「じゃあ、ハーブティーお願ひします」

私も押しに弱いな…とつべづべ思つた

「戻りました」

上品にお辞儀をして部屋から出て行く

「空也の部屋か…」

空也の匂いや空也のベッド…前は空也を元気付けたい一心だつたら改めてみると…すいへんに居るのが恥ずかしい…

「御待たせ致しました。ハーブティーで御座います」

執事さんが机にハープティーとケーキを置く

「空也様…また出しつぱなしごして…困ったものですね」

机の上に散乱していたギターの弦や作曲中であるひつノートを所定の位置に片付ける

「またつて良く有るんですか?」

「はい。今、空也様は音楽に夢中になられていて。学校から帰つてからもずっとギターをお触りで御座います。なんでも今は新しく入った後輩のために作曲中で御座います」

「梓のために…」

「お前は毎回いらっしゃる事を吹き込むなあ、和田…」

突然空也の声が響いた

「おや、空也様」

「おや、じゃねえんだよ。とつあえず「コーヒー頼む」

「異まりました」

執事さんはお辞儀をして出て行った

「遅くなつたが、いらっしゃい」

「お、お邪魔します……」

いつもの空也の笑顔にドキッとしてしまった

「どうしたんだ?」こんな時間に?「

ケースからギターを出してスタンドに立てかけ、アコギを手に取る
空也……

「律が……梓の歓迎会をするから、空也も来てくれって……」

「それは別に構わない」

空也はあっせりOKした

「空也は怒つてないのか?」

「ま、澪になら言つが……怒つてる事は怒つてる、部活中も言つたが
ティータイム自体を否定はしない。人間なんだから休まるときは必
要だ。でも梓が入部してからというもの、ティータイムばかりで練
習しようとしてない。それを見た梓はどうすれば良いんだ?新歓ライ
ブで感動してくれて入部を決めてくれたのにあのままなら退部する
のは明白だろ。たぶんだが梓の中にはまだ葛藤が残つてゐるはずだ。
このまま軽音部でいいのかつてな。その葛藤を取り除けるのは俺達
だ。だが俺が言つたんでは意味がないんだ。皆が気づかなければな」

空也は梓が入部してからずつと考えていたのか……空也はいつも先を見据えてる。執事さんから聞いた梓のために曲を作ってる事も、今 日怒った事も全部先を見据えてのことだったんだ

「俺から言えるのはここまでだ。後は澪や軽音部の皆で答えを出せ、その間は俺が梓を引きとめておくから。後このこととは他言無用だ」

それから私は夕食を「」馳走になり家に帰った

数日後

『空也 Suda』

「歓迎会って、ピクニックかよ…」

レジャーシートを広げて軽音部の女子が座る。俺は木にもたれかか
り持ってきたアコギを持つ

「空也先輩、アコギも持つてたんですね」

「まーな。」うちのほうがやりやすい時もあるしな

梓が俺に近寄ってくる。この数日でかなり懐かれてしまつたようだ

「ほら、律達のところに行けよ。美味しいお菓子が待ってるぞ」

唯が梓の事をあざにやんつて呼んで手招きしてくる。あざにやんて
まあ猫みたいな奴だけど…

「やれやれ…」

俺は座つてアコギを弾き始める

「はー、空也君」

紺がいつもと変わらず紅茶を差し出してくる。俺は無言で受け取った

「どうだ調子は？」

澪が雑誌を片手に俺の隣に座る

「まあまあだ。てか歓迎会っぽくてシクだったんだな…」

「たまには空也ものんびりしないよ」

「そうだな…」

俺はアゲギを置いて紅茶を飲む

「良い天気だ…」

「そうだな…」

ぽかぽかとした陽気とさわやかな風に身を委ねる

「空也先輩、澪先輩。お一人は何でそんなに上手いのに外バンを組まないんですか？」

梓がフリスビーをしだした律たちには参加せず。いつしかやってきた

「まあ、外バンも面白うだけだけどな…」

「でも…」

俺の言葉を澪が補足する前に梓は「」の場にはいなかつた。なぜならさわちやんが来たから

「身の危険を感じたな

「みたいだな

また二人でのんびりしていると一人とも寝てしまつていた

「…ん？」

少し肌寒くなり口を開けると歯がしつつを見ていた

「仲が宜しいですね お一人さん

律がニヤニヤしながらこちらを見てそう言つた

「なん…だ…よ…」

その意味がいまはつきりと分かつた。澪が俺の肩で寝ていて、おそらく俺も澪にもたれかかつて寝ていたのだろう

「証拠写真もバツチリー！」

デジカメのメモリを俺に見せてくる。俺の推測どおりだった

「ん? ビリしたんだ?」

俺たちが騒いでいたので澪が起きる

「何でもねえ……」

俺は律の首を掴んで後ろを向かせる

「澪にはバラすなよ……バラしたら明日は無いこと思え……」

「ク、クウ……目がマジだ……」

律が「コク」コク頷くのを確認すると手を離した

「さて、帰るぞ」

俺はギターを片付けて歩き出した

「空也先輩、待ってくださいよ

それに梓もついてくる

「どうしたんだ? 空也? ？」

「澪ちゃんこれ見て

紬がデジカメの写真を見せ、澪が顔を真っ赤にしていたことを俺は知らない

『梓 Side』

ピクニックから数日が過ぎ、私は空也先輩との練習に向かう。空也先輩はとても分かりやすく教えてくれて勉強になる、けどピクニック

クからの「ここ数日、違和感を感じていた。新歓ライブのときやこの前のピクニックは軽音部の先輩方とともに仲が良いように見えた、これが本来の空也先輩なのではと思うほどに。でも音楽室には行かず、ずっとスタジオに籠っている。空也先輩は必要以上に学校で接しようとはしない…何でなんだろう…もしかして私のせい?私が居るから?ピクニックでムギ先輩が言っていた。私が入ってくるまでそんな事は無かつたつ…私が軽音部に入部したのは新歓ライブで感動したから。今の軽音部を見ると何で感動したのか分からなくなってきたのも事実…

そう思ふと私は足が止まっていた。私は軽音部じゃなくて、外バンを組んだほうが良いのかもしれない…そう思つた私は足を逆方向に向けた

『空也 Side』

スタジオに行く途中で梓を見つけた。声をかけようと思ったが、深刻な顔をしていて、スタジオとは逆方向に歩き出した

「いよいよヤバくなってきたな…この先にあるのはライブハウスか

…」

外バンを組もうとしているのだろうと思つて後をつけた。梓はやっぱリライブハウスに入つていった

「やつぱりか…」

俺も中に入つていく。端から見たらただのストーカーだな…俺…

自己嫌悪しつつ梓を見つけると浮かない顔をしていた。今演奏しているバンドも、さつき演奏していたバンドも俺たちよりレベルは高かつたが、梓の心に届かなかつたようだ

「なりふり構つてられる状況じゃ無くなつてきたのかもな…」

俺は梓に今日は用事が入つたから練習は無しとメールで送り、家に帰つた

翌日…俺はいつものスタジオに居ると、梓がやつてきた

「空也先輩…私…「分からなくなつたか?」「え?」

「何で俺たちのバンドに感動したのか分からなくなつた…違つか?」

梓は静かに頷いた

「じゃあ行こうか、俺たちの部室、音楽室に…」

俺はギターを持つて立ち上がつて。梓と一緒に学校に向かつた

「皆、居るか?」

俺は音楽室の扉を開いて入り、後ろから梓に入る

「あ、梓…自分の思いの丈を言つてみな

俺は梓の背中を押す

「私…分からなくなつたんです…何で新歓ライブで先輩方の演奏で

感動したのか…一緒に居れば分かるかもって思つてましたけど、居れば居るほど分からなくなつて…」

「だらうな…俺は半分バンドから離脱してたし、律たちは練習しないからな…

「よつと」

梓をお姫様抱っこして俺の指定席の長椅子に座らせる

「分からなくなつたんなら、思に任せせてやるよ。演奏でな…」

俺は皆を見ると全員が頷き演奏を始めた

「梓、ピクニックの時俺達に外バンは組まないのかつて聞いたときあつただろ?」

田で演奏を続けてくれと皆で囁合図し、途中で演奏をやめて、梓に話しかける

「外バンを組まない理由は」一縦に居るのが楽しいからなんだ

「そうだな、空やや律たちと一緒に演奏するのが好きなんだ…梓もやつやないのか?」

澪も加わり、一人で梓に手を差し出す

「一緒に演奏しよう。」

すると梓は俺に抱き着いて泣いてしまった

「存分に泣け。今日は特別だ、受け止めてやるよ」

頭を撫でながら俺はそう咳き、演奏が終わると、梓が俺から離れる

「泣き止んだな。もう一曲あるんだ。聞いてくれるか?」

梓が頷くと俺はアコギを持った

「梓のために作った曲だソロで悪いが聴いてくれ』『永遠の明日』『

バラードの曲調で歌い上げ、終わると梓からパチパチと拍手をされた

「ずるいですよ……ギターも出来て歌も上手いなんて……」

その顔には涙は無く、笑顔だった

「ふつ切れたよつだな」

「はいー」迷惑お掛けしました

「全くだぜ、クウも嘘臭い芝居までしたのに

「なんだ、ばれてたのか…」

衝撃の事実だった

「あたしを誰だと思つてんだよー」

さすが俺たちの部長だな、しっかり見てやがる

「わい、お茶こするかー！」

「待て、セヒの部分は嘘じやねえ……」

台無しだな…

「良いだろーークウ！ケチケチすんなよー。」

「してねえだらうがー！」

そんな漫才をしていると梓が笑っていた。それを見た俺も自然に笑つていた

「わいですよーー唯先輩もこれからビンビンこきますからねー。」

「クーくーん…あずこちゃんが怖いー」

「しつかり教えてもらえよ」

「クーくーんまでー」

そんな唯を見て皆が笑い合つた

第十五話（後書き）

アニメ第九話です

半分くらいオリジナルなのは、ご了承ください

第十六話

「うーん…」

俺は譜面を広げて唸つていた

「『ヒミココロ』『ヒミコロ』『キミノモダチ』『永遠の明日』

…

「空也先輩、ビーツしたんですか？」

ブツブツ言つていると梓が近づいてきた

「梓も入つたことだしな、新しい曲を作りつかと思つてな」

時期は七月半ば、あの一件以来、随分と梓に懐かれてしまい、俺によく話しかけてくるようになった

「澪ちやん、複雑でちゅね~」

「なー、そなことないもん…」

律が澪をからかっていたが澪がいつも調子じやなかつた。チラチラとこいつの様子を伺つてくる

「どうこう曲作るんですか？」

梓は気付いてないよつだつた

「バラードを作る、過去俺が作った三曲の内一曲がバラードだからな。俺にはバラードの方が作りやすい」

「ホツチキスも空也が作ってくれたしな。バラードの方が空也には似合ってるよ」

澪が会話に参加してきた

「アップテンポの曲は、もう少し俺も手伝うが、紬のほうが良い曲を作るから、任せて大丈夫だしな」

やつ言いながら俺はギターを持つ

「さて、適当になんか弾くか…」

「曲作りは良いんですか?」

「何かしながらの方が曲は作りやすいんだ。俺にはな…」

そういうてギターを弾き始めるが何も浮かばなかつた

いつもの澪との帰り道でも俺は唸つていた

「うーん…」

「何か、悪かったな。邪魔しちゃって…」

「邪魔だなんて思つてねーよ。気にすんなよ」

俺は澪の頭をポンとく

「せめて歌詞が出来りゃあな…」

頭を搔きながら少しことに作詞した事を口に出した

あれって確か…あの別荘にあつたよな…

「澪、明日暇か?」

「あ、ああ…」

いきなりの事で澪は驚いていた

「なり思ひがつと付を合へ」

「あ、ああ…」

澪は俯きがちに頷いたのを確認すると。時間と場所を決めて解散した

『澪 S.U.D』

空せから誘われるなんて…これって…もしかして…デート?

そんな事を考へてしまつた私は一気に顔が赤くなつた

「澪、なにしてるの?早く着替えていらっしゃい」

ママが私に言つてハツと気付く

「う、うん、分かった」

私は慌てて自分の部屋に入った

「私、明日何着ていけば良いんだ？」

嬉しその他にも不安があった、空也に嫌われない服装にしなきゃ…

私はその日の夜はほとんど眠れなかつた…

翌日…

《空也 Side》

昨日、澪と約束した待ち合わせ場所に向かう

「あ、空也…」

待ち合わせ場所に行くと、いつもはパンツルックなのだが、ワンピースを着た澪がそこに居た

うん、よく似合つてゐる

「ど、どうだ？」

あまり自信が無いのか赤らめながら俺に聞いてくる

「よく似合つてゐるよ。可愛い…」

言つてから俺は自分の言つた事の恥ずかしさに気付いた

「あ、ありがとう…」

澪は顔を真っ赤にしていた。たぶん俺の顔も真っ赤なのだろう

「ち…ちあ、行こうか…」

俺はギクシャクしながら駅に向かう

落ち着け、俺…自分から誘つたんだろうが

「ど」「こ」「く」

澪も落ち着かない様子で俺に聞いてくる

「海だ、ほれ」

澪に切符を渡して電車に乗る

「なんで海なんだ？」

「いや、地元から離れた方が動きやすいってのもあるし、それに二人で遊ぶのも初めてだしな」

後半は少し恥ずかしかったので俺は外を見ながら言った

「そ、そういうえば去年ムギの別荘に行つたときは逆方向じゃなかつた？」

澪が顔を赤らめながら慌てて話題を変えた

「ん？ああ、こっちに俺の別荘があるんだ。とりあえず畳食せんじで作つて食べよつぜ」

澪が頷き、雑談をしながら、じょじょに電車に揺られてくると、海が見えてきた

「いや、もう夏だな……」

「今年は合宿するのかな……」

「すみだりうざい、律あたりがウキウキしながらひだり

「やうだな……」

少しすると駅が見えてきたので俺たちは電車から降りる

「懐かしいな……」

俺は駅から出て周りを見渡す

「昔はよく来てたのか？」

「ああ、たしかこっちだ

俺を先頭に歩き出してしばりへ歩くとそれなりに大きな建物があった

「この所有する別荘の中では最小だけどな」

「これで？」

俺は領き中に入つていく

「ちゃんと掃除もあるし、食材もある。澪、何が食いたい？」

俺は別荘の玄関を開け、澪に振り向いた

「あんまり豪華じゃなくて良いよ。というより私も手伝わせてくれ」

玄関を入り、広いリビングに出る

「そこから裏に出ると、プライベートビーチだ」

リビングの奥の壁は大きなガラス張りの壁になつていてそこから見えるのは大きなバルコニーとビーチが見えた

「さて、ちょっと早いけど、昼食を作るか…」

「そうだな…」

二人で並んでキッチンに立つ

「空也は手際がいいな」

一人で包丁を持って、食材を切つていると澪が俺の手元を見てそう呴く

「さうでもねえよ、てか、俺の手元見ると手え切るぞ」

「いたつー。」

遅かったようだな……

「言わといひつけや無い……見せてみな

澪の手をとつて傷口を確認する

「び、びつだ…空せ…」

自分の血も見るのが嫌らしく、田を睨つている

「これくらこなら大丈夫だな…」

俺は無意識に澪の指を口につか、傷口を舐める。ついで血の味がする…

「く…くへへへ空せー…」

口から指を離し、澪の顔を見ると湯気が出でてなるほど顔が赤かつた

「わりーつい癖でーお、俺ー絆創膏取つてくるー。」

俺はやつた事の重大さに気付いて、謝り、慌てて絆創膏を取りに出て行く

『澪 Side』

まだドキドキしてる…空せが絆創膏を取りに行つてくれてる間ずっと

とドキドキしていた。まさか空也に指を舐められるなんて思わなかつたから… 最初は恥ずかしくて顔から火が出そうになるくらい顔が熱くて、でも今はこのドキドキが心地良い、嫌じやなかつた… 寧ろ嬉しかつた… あんなに慌てた空也を見れた… 私はそこまで空也の事が好きなんだな… もう抑えれそうに無い…

『空也 Side』

俺は気持ちを落ち着かせ、絆創膏を持ってリビングに戻る

「あ…」

澪と田が合つ、澪の顔はまだ赤らめていて恥ずかしくて直視できなかつた

「手え出せ。絆創膏貼るから」

絆創膏に田線を落とすと澪が抱きつってきた

「なーーみ… 澪… ー」

俺の心臓の音がこれでもかつて言つぽぢ高くなつ、一気に俺の顔が真つ赤になる。

「ごめん… 空也…。でも、もう抑えれそうにないんだ… 梓が入部してからずっと…」

澪が俺の耳元で囁いている…

「田を重ねる」と、空也と梓の仲が良くなっているのが分かつて、

空也の心が梓の所に行ってしまった。そな気がして、辛かった……

「澪……」

「今日、誘ってくれた事本当に嬉しかった。空也に嫌われたくないから、いっぱいおめかしした。普段着ない服も着た！」

澪は少し俺から離れ、真剣な顔で俺を見てくる

「わ、私は……空也の事が好きです……世界中の誰よりも空也の事が大好きです！」

澪の言葉が俺の心中に深く突き刺さる。「IKEじゃない」「OVEなんだって事が澪の真剣で云わつてくれる。俺の答えは……そんな事、考えるまでも無いな……

「空也……」

今度は俺から澪に抱きついていた

「俺も……澪が好きだよ……世界中の誰よりも……」

ギターを壊したあの時から分かつてた事だ。俺がギターを壊しても助けたかったのは澪なんだ。澪を守る、澪の全てを受けとめたい……それが俺の答えだ……

「俺はもう前を放さない、ずっと俺の傍で居てくれ……」

俺たちはしばらく抱き合っていた

「お皿洗ではいいだ……」

俺はスタジオのドアを開ける

「スタジオあるんだな」

やつと落ち着いてくれた澪がそう言つ
「ああ、俺は『』で小さい頃、ギターを習つてたんだ。えっと…たし
か…」

俺はスタジオの引き出しを探る

「お、あつた…」

俺は一枚の紙を取り出す。そこには『タイムカプセル』と書かれて
いた

「それがどうしたんだ?」

澪が首を傾げる

「俺のギターの師匠が教えてくれたんだよ。作詞のやり方をな、そ
の時に作った作詞だよ」

一人で古い紙に書かれた、歌詞を読む

「なんていうか…子供っぽいけど…悪くないな」

「だな、この歌詞を修正して曲を作る…出来そうだな…」

一人で曲の構成をし、夕方になつた

「や、遅くならない内に帰るか…」

俺は荷物を持つて立ち上がつたが…

「やだ…」

澪は座つたままでなん事を言つて出したが

「え？」

「今日せひ泊まりたい」

駄々つ子か？」の子…

「なんで？」

「空也ともひとつ一緒に居た。空也は私と居たくないのか？」

「いや、居たけど…お互い着替えも持つてきて無事だら

お互いの気持ちを知つてしまつたんだ。どうなるか分かつたもんじ
やない…

「そんなの買つてくればいいだろ」

「どうあっても泊まる気だな…

「わかつたよ… 家の人たちちゃんと連絡しろよ?」

「わかってる」

そういうて澪は家の人へ電話をかけていた

「…されさせ…」

俺も和田に電話をかける

「どうなされました？空也様？」

「その件でしたら、本日、朝の時点で想定内でした。空也様のお部屋にお着替えを」用意しております

「わかつてやがつたな？」

「嫌ですねえ、分かるわけ無いじゃ無いですか」

こいつ…さつき自分で想定内つて言つてなかつたか?だから冷蔵庫にあんなに食材が入つてたのか…

「もういい、じゃあな

「頑張つてください。空也様」

「アーティスト」

乱暴に電話を切った

「やーこべやー【空也】」

澪は俺の手を握つて歩き出した

「わかったわかった……」

澪と一人で澪の買い物を済まし、戻つてくれる

「澪は【空也】の部屋を使つてくれ」

澪を客室に通す

「【空也】で寝るんだ?..」

「俺か?俺は自分の部屋がある

「【空也】なんだ?..」

なんとなく嫌な予感がするが、とりあえず案内する

「【空也】だ

俺の部屋には着替えとキングサイズのベッドが置いてあった。くわ、あの執事何考へてんだよ……

「【空也】かあ……」

澪はとも当然のように荷物を俺の部屋に置いた

「だらうと思つたよ、今日は好きこころよ

「ああ、わざわざしてもいいわ

気付くする気も無いんだな

「やれやれ…」

俺は苦笑いするしかなかつた

「さー、気を取り直して、晩飯作るか…」

俺は冷蔵庫を開ける

「確か出刃包丁あつたし、魚でも捌くか…」

俺は一匹のキスを冷蔵庫から出してまな板に置き包丁を持つ

「どうした?」

澪がすうとこっちを見てくる、なんとなく言いたいことは分かるが、まあやうづらうつたらいいな

「私にも手伝える事ないか?」

だらうな、言つと思つた…

「じゃあ味噌汁をお願いするよ。晩飯は和食だ」

「うん、わかった」

一人で作業を分担し晩飯を作る。一人分だけなので思いのほか早く終わる

「じゃあ食うか」

俺と澪が向かい合って雑談をしながら食事をし、洗い物を終わらせ、個室にあるお風呂を沸かす

「澪、風呂沸いたから、先に入れよ」

「あ、ああ…」

澪はすこしうえながら風呂場に向かう

「せ、絶対那儿にも行くなよ…」

「はじよ…」

俺はリビングのソファに寝転がる

「疲れた…」

本当は作詞のヒントを求めるに来ただけなのに、まさかこんな事になるとは…

「澪のほつかり告白されてしまつたな…」

もともと俺から告白するつもりではいたが、なかなか踏ん切りがつ

かず。今まで来てしまっていた

「すべては俺の心の弱さか…」

そんな事を思いつつ、俺は寝てしまっていた

「……也、……あひ…」

何か声が聞こえた気がして目を開ける

「空也、やつと起きた…」

田の前に澪の顔がアップになっていた

「寝てたのか…俺…」

「なかなか起きなくて大変だつたんだぞ

やつと澪の顔が俺から離れて、起き上がる

「悪いな、澪も風呂から上がつたことだし。俺も入るか…」

俺は自室から着替えを取り出し風呂場に向かい、風呂に入る

「だめだな…眠たさが拭えん…風呂場で寝る前にひそつと上がるか

…

体と頭を洗い、俺は風呂から上がり、リビングに向かうと、ソファに座つていた澪の隣に腰掛ける

「私は今、幸せだ。」んなふうに空也と一緒に居れる事が…

俺の肩に頭を乗せ澪が呟いた

「まだ俺たちは始まつたばかりじゃねえか」

「それでも、私は幸せだ。ありがと、私を好きになつてくれて」

俺に満面の笑みを見せる

「ああ

俺は澪の頭を撫でる

「空也にさしつけて頭を撫でられるのが好きだ。不思議と安心できる」

「そりゃ光栄だな…」

頭を撫でていた手を澪の肩に置く

「やつぱぱ、空也は大人だな…」

「大人じゃねえよ、まだ子供だ。必死に背伸びしてんだよ」

澪が俺の顔を見る

「今もこいつって落ち着いているようにしてるが、相当恥ずかしいんだ。触つてみろよ」

澪が俺の胸に触れる

「本当に、すうこ心臓の音が聞こえる」

「どう?」

「そうやって澪に触れられてることも恥ずかしこのは言わなこでおこつ

「クスッ…また新しく空也が見れた」

「お前の恥ずかしがりはどこに行つたんだよ…」

「だつて此処には空也しか居ないし、空也なら私は大丈夫」

「やつですか…」

時間を見ると、時計は十一時を過ぎてこた

「じつで既にはまだ…澪、俺はもう既にから寝るか?」

「ああ、私もそろそろ寝るよ」

「一人で俺の寝室に向かつ…ん? 一人?」

「ああ…そつだつた…」

「俺は今日寝れるんだろうか?」

「やつなんやつなんやれ…」

開き直ればた多分寝れる……だろ？…

俺は後ろの澪に気付かれない様にそいつを、寝室の扉を開けてベッドに横になる

「お邪魔します」

澪がもぞもぞと布団の中を移動し、俺の横に顔を出す

「空也の匂いだ」

澪が横になつた俺の体を抱き枕にする、本当にこんな性格だったか…？もつと凛々しかったような気が…

「今日は離せないから…」

俺の耳元で澪がそつ眩ぐ、一瞬で俺の顔が赤くなるのが分かる

「わかつたからもう寝る…」

澪の方を見ず、俺がそつ眩ぐ

「うそ、おやすみ…空也…」

よつ一層俺に抱きつく力が強くなる、腕に柔らかい物が触れる

「お、おやすみ…」

本当に今日、俺は寝れるのだろうか？

不安一杯で俺が寝付けたのは三時を過ぎていた…

翌朝…

腕に圧し掛かっている重みで俺は日が覚めた、時計を見ると七時過ぎを指していた

「まだんど寝れてねえ…」

隣には無防備で寝ている澪が居た

「ま、夢でないのは確かだな…」

俺の腕は痺れていて、冷たかった

「さて、澪が起きる前に朝食を作るか…」

澪が巻きついている腕を抜いて、寝室から出で、顔を洗いに洗面所に向かい…

「ナイスファイトー俺の理性ー」

鏡の前で親指を立てる

「何やつてんだ…俺は…」

さつと顔を洗ってキッキンに向かう

「朝はやつぱり」「飯だな！よし…鮭でも焼くか

米を洗い、炊飯器にセッテして、鮭を塩焼きてする

「あとはお吸い物でも作るか…」

朝なので、簡単にあつさつしたお吸い物を作る

「こなもんだな、あとは澪を起しとねえ」と

俺は寝室の扉を開けると澪はまだ寝ていた

「澪、起きよ、朝だぞ」

澪の胸に触れて軽く揺らす

「まだ寝て……ママ…」

ママ…」「マジ、ママ、パパって呼んでんのか…

「誰がママ…だから起きて…」

俺は布団を下りてが

「お前…どうだけ無防備なんだよ…」

「どうやから着だけで寝ていたようで、ズボンを履いていなかつた

「どうあえず…戻すか…」

布団を戻して、澪を起しの再開する

「ん……空せ?」

「やつと陆がつた……着替えて顔洗つて来い、飯できてるから、待っててせるな」

俺はベッドからひきつむ

「雫じゅんこんだなっ」

「少なくともな、おかげで俺の腕と理性が死ぬといだつた」

雫の顔がパツと明るくなる

「おひと、抱かつていりとおな。俺じゅんな前が困る」といた
「ふ

「見なかつたことにしてあるから、わつやと着替えろ、コビングで
待つてせるか」

雫は布団を被つて顔を赤くしてコクコクと頷いた

「あ、それと……お前の親の事、ママ、パパって言つたのな

「なつ……」

一気に雫の顔が真っ赤になる

「さつさ寝ぼけて自分で言つてたぞ」

「なななな！！」

澪は顔から湯気が出そうなほど真っ赤になっていた

「はっはっはー！それでこそ、澪だ。じゃ待ってるからな」

俺は寝室から出てリビングに歩いてこへ、リビングに来てしばらへ
すると着替えてきた澪がやってきた

「お、来たな。じゃあ飯食うか」

作つてあつた朝食を温めなおし、テーブルに置く

お吸い物を一口飲んだ澪がそう言つ

「口にあつて何よりだ」

俺も朝食を食べ始める

「へ、空也は昨日より落ち着いているんだな…」

澪がギクシャクしながら俺に話しかけてくる

「ん? まあな… 何だ? 今になつて恥ずかしくなつてきたか?」

澪が静かに頷く

「ま、その気持ちも分からんでもない、昨日の澪は感情が抑えきれなくなつてた感じがしたしな。けど俺はこれで良かったと思つてる」

「え？」

「お前のおかげでお互いの気持ちを知れたんだ。気持ちなんてものは聞かなきや分からなーいし、昨日までの俺には聞く勇氣も無かつた」

澪は黙つて聞いていた

「だから、その壁を壊してくれた澪には感謝してる。ありがとな」

俺はニーッと笑う

「空也……やっぱり大人だな……」

「ほめ言葉と受け取つておくよ」

俺は朝飯を完食し食器をキッチンに持つていき、お茶を淹れる

俺は澪にお茶を渡す

「毎前の電車に乗るから、そのつもりでな

俺はリビングから出ようとする

「空也はどこに行くんだ?」

「スタジオに居る。作詞しなきゃな」

古い紙を取り出して澪に見せる

「そういえば、それが目的だったな」

「忘れんなよ……」

「めん」「めん」

俺達は笑いあつた

「なあ空也?」

澪も結局スタジオに来て、俺に話しかける

「ん?」

俺はルーズリーフに目を落としたまま応える

「空也はどうやって歌詞作ってるんだ?」

「まず、何が伝えたいかを決める事からかな

俺は顔を上げる

「歌で何かを伝える……」

「ああ、『Funny Bunny』は自分の夢、『キミノトモダ

チ』は友達の大切さ、『永遠の明日』は梓の為に

「梓の為?」

澪は首をかしげる

「梓はなんでも一人で背負い込もうとするからな、もつと俺たちを頼つてもいいんだぞって意味を込めて作った」

「よく見てるな、空也。今作ってるのも何か意味があるのか?」

俺は頷いて、ルーズリーフに目を向ける

「この曲には、大人になつても今の友達と同じ気持ちでこよつて意味を込めて作ってる」

「だから、『タイムカプセル』なんだな

「澪みたいに俺は歌詞を書けないからな、伝えたい事があるから俺は曲を作る。いつか澪の為に曲を作るよ」

「ああ、楽しみに待ってる…」

俺が笑顔を見せると澪も笑顔で返してくれる

「あ、そろそろ帰らつか

時間を見ると出なくてはいけない時間が迫つてきていた

「わかった、部屋から荷物を取つてくるよ

俺は領地、玄関に移動する

「お待たせ」

澪が大きい鞄をもって現れる

「貸せ、俺が持つよ

澪から鞄をもらい、肩に担ぐ

「じゃ、行こうか」

俺達は別荘を離れる、少し離れると俺は足を止めて別荘に振り返ると澪もつられて振り返る

「うーん、また新しい想い出が出来たな…余計に売却しちゃくなってしまったな…」

「売るつもりだったのか?」

「ああ、俺達はもう殆ど使わなくなってしまってな、地元の町に売つて公共の場にするつもりだったんだが…それも白紙だな」

澪は首を傾げる

「この別荘は、売るのを止める。俺に色々なきっかけてくれた場所だから…」

「きっかけ?」

「ああ、ギターを初めて触ったのも、料理を教わったのも、そして
澪とのきっかけをくれたのも紛れも無くこの別荘だからな…」

俺は澪に手を差し出す

「行くつか…」

「うそ

澪の手の影と俺の手の影が重なる

また来るよ…そう思いながら俺と澪は手を繋いで別荘を去つていった
それから予定していた電車に乗つて見慣れた町に戻つてくる…時刻
は既に夕方になつていた

「一日連続で遅くなるのは親御さんに悪いから、送つてこへよ

「すまないな、空也」

手は繫がなかつたものの、かなり近い距離を一人で歩いて澪の家に
立つ

肩に担いでいた鞄を澪に渡す

「ああ、ありがとな…また、鞄返しに行くから

「返しに来る必要はねえよ、澪でさう」

「いいのか?」

俺は頷く

「ありがとう、大切にするよ」

「ああ、やうじてくれ。じゃまた明日、学校でな」

俺は踵を返して歩き出す

「…………空也……」

少し歩くと、澪が前を呼ばれ、振り向くと

「…………ん……」

「…………?…………?」

唇を塞がれた、向こになぜ田の前に澪の顔が?

少しすると澪の顔が放れていた

「わ、私のファーストキス……く、空也に……貰つてほしくて……その

……」

言葉が尻すぼみになり、顔を真っ赤にしながら俺の反応を待つ澪

「俺もファーストキスだったんだがな……」

「えー? セ、そつだつたのか? !

澪が慌てていたのを見ると俺は笑ってしまった

「澪...」

「へ、空也...ん...」

今度は一からキスをする

「これでおあいこだな」

「.....ばか.....もつ離せないか...」

澪が顔を真っ赤にしながら俯いて、小さく呟く

「離れないのは、じつも同じだ。ずっと俺の傍で面てくれる

澪の頭を撫でる

「じや、本当に俺は帰るな

「うそ、また明日...」

澪が頷くのを確認し、さう離れていない俺の家に帰つていった

「お帰りなさいませ、空也様」

家の扉を開けると和田が待つていた

「ああ

「俺はコーヒーを頼んで自室に入る

「空也様、コーヒーをお持ち致しました」

「早いな

「そろそろ帰つてくるだろ? と、準備してました

「気が利くな。もう一つ頼まれてくれるか?」

「何なじと

「親父に云えてくれ、あの別荘を売却しないという事と、所有権を俺に譲つてほしいという事をな

「畏まりました。よかつたですね、空也様

「お前の向でも知つてゐるような口ぶりは、時に腹が立つなか

「嫌ですねえ、いち執事が何でも知つてゐるわけが無いじゃないですか

俺の言葉に和田はとぼけていた

「まあいい、じゃ頼むな

「畏まりました」

和田はお辞儀をして出て行った。今回は和田にも助けてもらつたな。食材や部屋の件も含めて、うちの執事で俺の身を一番案じてくれてるのかもしけないな……とにかく俺は周りの大人にも助けて貰つていい事を忘れてはいけないと強く思つた

夕食を食べ、部屋で曲を作つていると不意に俺のケータイが鳴り響いた

「親父……」

ディスプレイには親父と書かれていた

「なんだよ……」

「自分の親父になんだよってのは酷いんじゃないか?【空也】

親父はアメリカに行つても変わらないな

「で?用件は?」

「ああ、別荘の件だ」

もう伝えたのか…仕事が速いな…

「空也のその言葉を待つてた

「は?」

親父から聴いた言葉は予想外だった

「一番小さくて、俺達も殆ど使わなくなつたのは確かだが、今まで
売らなかつたのは、俺が一番最初に建てた別荘だからだ、それに…」

「それに、なんだよ…」

「あそこにはお前も思い入れが有るんじゃないのか?」

時々核心を突いてきやがる

「まあな…」

「なら、尚更だ、あの別荘はお前に譲る」

「ああ、ありがとな… 親父…」

「お前が素直に礼を言つなんて珍しいな

「なんだ? 罷倒の一つでも言つて欲しいのか?」

「はつはつはー! もつと素直になれ、来用には少し戻れるから、澪ち
ゃんと仲良くな

「やかましいわー!」

俺は乱暴に電話を切つた

なんでうちの大人共はこんなに鋭いんだよ…

「まあいい、曲作るか…」

こうして夜は更けていった
…

第十六話（後書き）

はい、甘つたるいですね

私は書いてキーボードを投げたりなりましたw

次回は吟唄をします

第十七話

「今年も合宿をします。」

夏休みに入り、澪が部屋でビシッと全員を指差す

「おお～！今年もやるのか！」

「つっちちゃん～！楽しみだね～。」

律と唯が確実に別のことでの喜んでいた。遊ぶ気満々だな、こいつら…

「あの…ビレでやるんですか？」

梓が澪に聞く

「それは、ムギ…今年もお願いできなかな？」

澪が紬を見るが、浮かない顔をしていた

「じめんなさい～！今年は近隣の別荘全部、予定が埋まっちゃって
借りれそうに無いの…」

紬が深く頭を下げる

「え～…。」

それに反応したのは遊び人一人だった

「去年が運が良かつただけだ、そつ何度も借りられねえよ」

俺が紺のフォローをする

「じゃあ…どうか…」

澪が再び考え始め、遊び人一人がまだブーブー言つてゐる

「やれやれ…うちの別荘使つか?」

俺の言葉に澪が顔を上げる

「ナヒにえ、クウの家も金持ちだったな」

澪の言葉を横田、「元は澪に近づく

「心配すんな、あの別荘じやねえから」

澪にしか聞こえない声で弦へ向

「う、うん…」

澪に向かって頷くと俺は振り向く

「クーくんー何処に有るの?..」

唯が俺に近づいてくる

「お前らのいる期待に応えて、海だ」

俺の言葉にはしゃべ一人を横田に俺は紬に田に向ける

「お前の望みの普通とは少し違つかもしれないが、それでもいいか？」

「いえいえ、私の事は構いません。ご招待謹んで御受け致しますわ」

口調がお嬢様になつてゐるな

「」招待なんてした覚えはねえよ、これは合宿だからな。それと俺に對してはその口調は禁止な

紬の話し方に釘を刺して、俺は梓を見る

「梓、行き先の詳しい事は言えないが、楽しみにしてけ」

「はーー！」

「元気が良くて何よりだ」

「なあ空也、私にも詳しいことは教えられない？」

澪と二人でいつもの帰り道を歩く

「ま、澪になら構わねえよ。よく聞けよ？」

澪が頷くのを確認すると俺は場所の詳細を澪に告げた

「島だ」

「は？」

案の定ポカンとしているな

「 もう一度言つたまへ、島だ」

「島？」

「ああ、ついの所有する島があつてな、確かにその別荘が今年空いてた」

説明したところですと澪がポカンとしていたから説明をやめて、家に帰った

「お帰りなさいませ、空也様」

「おひ、こきなりで悪いんだが、頼みたい事がある」

「何なりと承ります」

和田は手帳を取り出す

「今年の軽音部の合宿で、近くの島の別荘を使いたい、食材の調達、及び清掃、船のチャーターを頼む」

「何泊あるる？予定ですか？」

「三泊で多分七名になる

「恐まりました。早速手配致します」

和田が家の奥に消えていく

「頼りになる執事だな…」

俺は部屋に戻り、『タイムカプセル』の仕上げをした

数日後、澪が夏期講習に行つたので、一人で商店街をブラブラしていると律に出会つた

「なんだ…お前も商店街に来てたのか

「そういうクワニヤ…」

「ま、せつかくこつして会つたんだ。適当にブラブラするか

「そうだなーじゃいくぞークウー！」

一人でゲーセンに行つたり、ウインドウショッピングをする

「そろそろ飯食おうぜ？俺は腹減つたぞ

「そうだな、ハンバーガーでも食べに行くか

俺たちはいつものファーストフード店に向かつた

「あれ、梓と憂ちゃんんじゃないかな？」

ファーストフード店の窓を見ると憂ちゃんと梓が居た

「よし、入りに行くぞ！クウはその胸のサングラス掛けるよー。」

「俺、これ掛けるとただの不良になっちゃうけど？」

ためしに俺は律の顔を見ながらサングラスを掛ける

「おお…！確かにこええ…でも似合つてるからそれで頼むなー。」

俺に構わず店に入していく

「やれやれ…」

俺もつられて中に入る

「涼しいなつて律ー何食つんだよー！」

「クウと一緒に良いよ。私コーラねー。」

律は一人の隣の席に座る

「やれやれ、ハンバーガーセットーつ、ドリンクはコーラとアイス
「一ヒーで」

「は、はいー」

あ、そうか…今サングラス掛けてるんだった。そら軽くビビるわな
代金を払って、店員さんから御盆を貰い、律のところに向かう

「全く… 罪も無い店舗を怖がりてしまつたじゃねえか」

律にハンバーガーセットを渡す

「サンキュー」

俺は向かい側に座つてハンバーガーを食べだす

「ねえ 空也さんって軽音部でどんな感じなの？」

憂ちやんが話題を俺のことに変える。俺がピクッと反応する

「ん~ 空也先輩は何でも出来る凄い人つて感じ、ギターも凄く上手いし、唯先輩や私にギターを教えてくれる時も凄く分かりやすいし、曲も作れるし、ムギ先輩に聞いた話だとお金持ちらしいし、イケメンだし、何より優しいし面倒見がいいし…」

べた褒めされてる俺…

「空也さん、料理も出来るんだよ!」

「やうなのー?」

憂ちやん、別に今それ言わなくたつて良いんじゃない?

「は~やっぱり凄いな~空也先輩。何か靈の上の存在つて感じがする」

梓、それは言こすぎじゃないか?

「私は頼れるお兄さんって感じがするな」

「優ちゃん良い事言つた！」

「お兄さんか～私は澪先輩みたいなお姉ちゃんが欲しいな～」

「澪さん、優しいしカッコいいもんね」

「一人とも、本当のアイツは子供だぞ？ってかしつかり聞いてんな俺
も…」

「律さんは？」

優ちゃんの言葉に律がピクリと反応する、梓…下手な事言つと酷い
事になるぞ…

「律先輩は…いいかげんに大雑把だから…バス…かな」

途端に律の目が光る

「ほお～～～誰が大雑把だつて？」

「一 やー！」

いきなり声を掛けられた梓が飛び跳ねる…一 やつて…ホント猫みた
いな奴だな…

「律さん？」

「よー、憂ちゃん！」

梓の隣に席を移動して梓にチョーキングする

「やれやれ…」

俺は食べ終わったハンバーガーの包み紙とポテトの入れ物をゴミ箱に捨てて律達の所に立つ

「あ、あの…何か御用ですか？」

憂ちゃんが怯えながら俺に聞いてくる

「やっぱ怖いか？」

俺はサングラスを外し笑う

「空也さん…？」

「よ、失礼するよ。憂ちゃん」

俺は憂ちゃんの隣に座る

「えらくクウのことを褒めてたな～梓は～」

「も、もしかして聞いてたんですか！…？」

「申し訳ないが、しつかりとな」

見る見るうちに梓の顔が赤くなっていく

「悪かつた、でも嬉しかつたよ」

梓の頭を撫でる

「卑怯ですよ…そんなことされたら許すしかないじゃないですか…」

梓は心地良さそうに笑う

「お前、ホントに猫みたいだな」

「猫じやないもん…」

「はっはっは…憂ちゃんもありがとな」

憂ちゃんこも梓と同じように頭を撫でる

「へへへ」

憂ちゃんも嬉しそうに笑う

「今日は澪先輩はいないんですか?」

「澪は夏期講習に行つてる

梓の質問を律が答える

「先輩方は行かなくて良いんですね?」

「あたしが?…夏期講習に?…何で?」

危機感を感じないのか……お前は……

「ですよね……空也先輩は行かなくて良いんですね？」

「澪にも誘われたんだがな、一度留つた事をもつて一回遊びには無い、時間の無駄だ」

「【空也】先輩、勉強もできるんですね……」

律とは違つて反応を見せる梓

「あ、そういえば先輩方に聞きたかったんですけど」

「ん？」

「ムギ先輩つて自前のティーチャーシートや別荘を持つてますけどかなりのお嬢様なんですか？」

「もうだぞー、何せムギの家には執事が居るし、夏休みとかは海外に行くんだからな」

「ホントですか?！」

「だつたらいいなーって」

ま、全部正解なんだが……別に言わないでもいい。そのまづが面白そうだ……

「結局知らないんじゃないですか……」

「だつたら、今からムギの家に行つてみよ!」

律がケータイを出してムギのケータイに電話をかける

「あれ……出ないな……家のほうに電話をしてみるか……」

律はケータイをいじり家のほうに電話をかけるとすぐに反応があつたようだ

「はい、もしもし……」

律のケータイから年配の老人の声が聞こえた

「あ、紬さんのお父さんでしょ? つか?」

「いえ、私は琴吹家の執事で御座います」

「「ホントに居たあー。」」

律と梓が同時に声を上げて慌てだす

「ク、クウ! 頼む! 変わってくれ!」

律が俺にケータイを差し出す

「やれやれ……」

俺はケータイを受け取る

「すいませんね、ご迷惑をお掛けしまして」

「いえ、構いませんよ」

「申し訳ありません、申し遅れました、私は天城空也と申します」

「空也様で御座いましたか、とんだけ無礼を致しました」

「いえいえ、その節はお世話になりました。多分ですけど父が今年もそちらに伺うやうなので、その時は宜しくお願ひします」

「いかがな宣しくお願ひ致します」

その間三人はポカンとしていた

「そういえば、紺さんは在宅でしようつか？」

「紺お嬢様は現在フィンランジに行つておられます。何か火急の御用でしようつか？」

「いえ、大丈夫です。紺さんに宣しくお伝えください。では失礼します」

「畏まりました、失礼致します」

俺は電話を切った

「ん? どうした?」

「 「 「.....」「」」

三人が固まつていた

「まさか…空也さんの家にも…」

「まさか…クウの家は金持ちだけど大きさは普通だからなー。」

俺の返答を聞かず俺の家に電話をかける

「はいもしもし…」

和田の年齢がまだ若いので律が勘違いをする

「あ、もしもし空也君のお兄さんですか?」

「いえ、私は天城家の執事で御座います」

律の手からケー・タイが落ちる

「「居るんだ…」」

後輩一一人が口を揃える

「居ないとは言ってねえからな」

そつ言いながら俺はケー・タイを拾つ

「よ、和田!」

「空也様ですか?」

「ああ。悪かつたな、手間取らせて」

「構いませんよ。どのよひなご用件で？」

「例の件の進行状況は？」

「滞りなく、順調で御座います」

「そうか、それだけが聞きたかったんだ。じゃあな」

俺は通話を切つて、律にケータイを返す

「「」」の一人の家つて一体……」

後輩一人がそんな事を言つていた

「さて、長居しちゃ一人に悪いからな。俺は失礼するよ

俺は席を外し、店を後にした

「さて……ゲーセンでも行くか……」

わざと律といったゲーセンに向かう

「これやりたかつたんだよな」

俺は腕相撲の機械にお金を入れてレベルを最大に上げる

『レディー・ファイト!』

スタートの合図と共に俺は右腕に力を込める

「コノヤロ…」

機械は予想以上に強かつた

「ぜつてえ負けねえ…」

五分近くかけて俺の優勢までもつてくる

「これで終わりだ…！」

最後に本気の力で機械の腕を倒す

『おおーーー』

いつの間にか観客が出来ていた

「何だ？」

「すげー！兄ちゃん！」

観客の中から聰が出てくる

「おお、聰か。久しぶりだな」

「あのゲームでレベル最大に勝ってる人初めて見たよ！」

「そりゃ良かつたな」

聴の頭をポンと叩いて俺はゲーセンを後にして家に帰つてギターの練習をした

それからまた数日…

「失礼しまーす」

唯が元気良く職員室の扉を開ける

「あら、貴方達って空也君、制服くらいちやんと着なさい」

俺は夏服のカツターシャツのボタンを全て開けて、中に柄の大きいシャツ、頭には汗を落とさないようバンダナを巻いていた

「似合つてるだろ?」

「確かに良く似合つてるけど… そいつ問題じゃありません」

めんどくさくなりそうなので無視して本題を話す

「そんなことより、来週から合宿すんだけど、先生も来い」

「ああ…合宿ね…」

今思いつきりめんどくさそうな顔をしゃがつた

「行き先も聞かずにその顔をするのは感心せんな。とこつよつ強制参加だから」

俺がビシッとさわぢゃんを指差す

「行き先は海！それもクウの別荘だぜ？！」

「別荘？！海？！」

律の言葉にさわちやんの顔が一気に明るくなる

「せうこうことならもちろん参加させてもいいわ」

なんだここの態度の変わりよは、遊び人が三人に増えただけか？

「んじゃ月曜の朝六時に駅に集合だから」

場所と時間をさわちやんに説明して、音楽室に戻つて練習する

「久しぶりに皆揃つた事だし…合宿の買い物に行くか！」

夕方になり、片づけをしていると、律がそつと顎が頷き、俺たちは商店街に来た

「何買い物に行くんですか？もしかして新しい機材ですか？」

梓が俺に話しかけてくる

「さあな…」

大体予想は付いているがな…

「水着だよ」

唯が水着を指差す

「遊ぶ気満々…？」じつはそんな事だらうと想いました

梓が不満げな顔をする

「別にずっと遊ぶわけじゃないぞ」

「そんなの信用できないでよ。」

「な、何で？」

律の言葉は信用が無いな

「まあ、たまには息抜きも必要だから…なー」

澪が梓を説得する

「やつ…か…そりですよねー。」

澪は笑つて梓の頭を撫でる

「ま、ゆっくり選べば良さ。俺は帰る

澪が俺を止めて寄つてくる

「待つてくれ空せー。」

澪が俺を止めて寄つてくる

「水着買つんだつたら俺いらねえだろ」

「やうじやなくて…空せはどんな水着が好みのかなって…」

澪が少し赤くなつて俺に聞いてくる

「似合つてれば何でも良いよ」

俺は笑つて頭をポンと叩く

「じゃあな」

右手を上げて俺は帰つた

そして合宿当曰…現時刻早朝五時

「ねみー、和田あ。アイスコーヒー頼むー」

リビングに下りて既に起きている和田にアイスコーヒーを頼む

「空也様も眠たそうですね」

「朝五時だぞ、バカヤロー…唯一の救いが荷物が少ないつて事ぐらいだ…」

机に頃垂れて力なくこたえる。今年はうちの別荘なので事前に着替えなどは持つて行つっていたのである

「どうぞ」

「カンキョ……」

アイスバーへと共にサンディッチを出された

「留守は任せた。好意を使え」

サンディッチを食べ、髪をセザンしてギター一つと貴重品が入つて
いる鞄を肩に担ぐ

「じゅ、行ってくれから」

「行っていらっしゃいます。私はこれからまた少し休ませていただき
ます」

和田は少し眠たそうだった

「ゆくつ休み、じやな

そつて俺は家を出ると優ちゃんに電話をかける

早朝だとこの辺りは起きていた

「おまよひ、ひよこます。おさん

「あ、今日から合宿でしたね。今起きるか?」

やつぱり寝てたか…去年みたいな事は御免だからな…電話して正解
だった

時計を見ると五時半だった

「おはよお……クーくん……」

ケータイから唯の声が聞こえる

「挨拶はいい、遅れんなよ」

「はーい……」

力なく唯が応えると憂ちゃんに代わった

「『』みんな、朝早くから電話して

「いえ、私は大丈夫ですか。お姉ちゃんの心配をして貰わって
ありがとうございます」

「やうじってくれるとありがたいよ。じゃ憂ちゃん、またな

俺は電話を切つて、駅に向かつた

「なんだ、皆早いな

駅には唯以外の全員が待つていた

「クウ、荷物少くないか?」

「俺は既に荷物は別荘に有るからな

「卑怯だぞークウー！」

律がブーブー文句言つてゐるがとつあえず無視する

「初めて家の別荘じやないといふに行へからワクワクします」

「はは、」期待に添えられるか分からんがな

紺が落ち着かない様子でワクワクしていた

「私は別荘に行くのが初めてよ」

「ま、普通はそつだうつな、さわちやん、梓も初めてか？」

「あ、はい」

梓も頷く、初めての別荘が島じやあちよつと驚くだうつな

「く、空せ…」

澪が俺の腕を掴んでこし離れたところで話す

「本当に島なのか？」

「お前に嘘偽りないあるよ」

まだ澪は信じられない様子だったがこればかりは仕方ない

しばらく雑談していると集合時間ギリギリで唯が来て、俺たちは電車に乗つて港に向かう

「」の方向つて去年マギの別荘と同じ方向だよな

律が俺に聞いてくる

「ああ、降りる駅もそこだ

「今年もやいで合宿かあ…」

律が楽しそうにしていて、ま、それじゃないんだけど…

電車から降りると、俺は別荘地とは違つ方向に歩き出した

「おーい！ クウー！ そっちは別荘地じゃないぞ？」

「誰がそこって言ったよ、いいから付いて来い

行き先を知つている澪とつりすと場所に気付いた紬が付いてきて、全員が付いてくる

「これにて乗るぞ

俺は少し小さめのクルーザーを指差した

「つっちゃん！ クルーザーだよクルーザー！」

「そうだなー唯…」

「空也君、貴方一体…」

唯、律、さわちやんがいい反応を見せる

「 「…………」 」

澪と梓がポカーンとしていた

「空也様、お待ちしておりました。いつでも出せます

英雄さんが俺たちを待っていた

「英雄さん、よろしく頼みます」

「あ、紬お嬢様も宜しくお願ひします」

英雄さんが紬にも頭を下げる

「澪、律、この人が大地の父親だ」

二人に紹介する

「大地の父の不動英雄と申します。息子がお世話になつてます

「「大地の父親と思えないくらい礼儀正しいーー」 」

二人の感想が被る

「 も、いいで喋ってても仕方ない、乗るぞ」

俺たちはクルーザーに乗つて各自荷物を置く

「では、出港します」

英雄さんがクルーザーを運転し港から出港する

「つっちゃん！動いてるよー。」

唯と律は甲板ではしゃぎ、梓とさわちやんは中に備え付けてあるソファでポカンとしていた。紬は落ち着いた様子で唯と律を見ていた

「どうだ？少しばら現実味を帯びてきたか」

甲板で風を感じていた澪に話しかける

「ここまで来るとな……初めてだよクルーザーに乗ったのは

「だらうな……」

「空也はクルーザーの運転はできるのか？」

「一応出来るぞ。中学の時親父から習つた

「じゃあ、今度は一人で来たい……」

澪がすこし赤くなつてそう呟く

「ああ、分かった。約束な」

俺は笑つて澪の頭を撫でる

「じゃ、俺はまだ固まつてゐる一人を正気に戻してくるな

俺は船内に入る

「梓？」

1

梓に話しかけるが応答が無い

一
お
い

1

梓の前で手を振るが応答が無い

一
猫
」

一 猫じやないもん！」

猫には反応した

一
あ、
空也先輩……

「まだ緊張してんのか？」

「緊張といふか… 私なんかがこんな所に居るつて思つても見なくて

■ ■ ■

「その気持ちは俺には分からんが、あいつ等を見てみろよ」

俺はまだはしゃいでいる唯と律を指差すと梓も一人を見る

「ま、あれではしゃげとは言わんが、もつと年相応こはしゃいでこことゆづや」

「空せ]先輩もあんなになしゃいだ事あるんですか?」

俺は頷く

「意外ですね」

「今の俺からは想像できないだろうな、まあせつかく来たんだ楽しめよ」

梓に冷蔵庫から出したジュースを渡す

「あつがとうござります。私澪先輩のところに行つてきますね

「ああ」

梓はトロトロと澪のところに向かった

「空せ]君は向しても似合わね

「やうでもねえよ」

さわひやんが俺に話しかけてくる

「ある意味女性の敵ね」

「何でだよ」

「貴方のそのルックスであんな優しい言葉かけられたり誰でもドキッとしたじゃつわよ。それを無意識で出来ちゃつんだから」

そんなつもりじゃないんだがな、それが無意識で出来るって事なんだろうな

「褒め言葉として受け取つとくよ」

めんどくせこので適当に相槌をつけておく

「なんで特定の相手が居ないのか不思議なくらいによ」

「なにをこきなり言つてんだよ」

その言葉を聞く限り、俺たちのことは隠れてないみたいだな

「だつてやうじやない。澪ちゃんにも言える」とだけど、ファンクラブまで出来てる人気者なのよ、特定の相手が居ても不思議じやないわよ」

「人気者はその手の事は慎重なんだよ、よく芸能人が金曜日なんか撮られてるからな」

適当に返しておく

「もしかして、空せ君と澪ちゃんが出来てるとか？」

〔冗談が半分以上あるんだろうけど、バツチリ正解なんだよな…〕

「さ、ほー」

俺は否定できず、曖昧な返事をする

「あら、何だしないわね、もしかして正解?」

わわちゃんが悪い表情になる

「なんの根拠も無しに推測でものを語るのは感心せんない

「あら、根拠はあるわよ

「なんだよ?」

「女の勘よー」

わわちゃんが立ち上がる

「話にならないな」

俺は冷蔵庫からアイスコーヒーとペーパーホールを取り出す

「これでも飲んでる

わわちゃんとペーパーホールを渡して甲板に出る

「あ、空也。わわちゃん梓と話してたんだけど、別荘にスタジオはあるのか?」

「スタジオはあるぞ、思いつきり音出しても大丈夫だし、もちろん電気や水道、ガスも問題ない」

俺は船尾に行き、レーダーを見る

「かうなことでも思へばくると感心」

「ほんとかー！クウ！」

「ああ」

「樂しみだなー！唯！」

遊ぶ気満々だな……時間を見ると十時だった

「以前には着くな」

「 そ う な の か ? 」

ああ、高速船をチャーリーしてくれてたからな！」

しばらく雑談していると蟹が見えてきた

「見えてきたぞ、あれだ」

全員が俺の指差した方向を見る

「やつと着いたー！遊ぶぞー！」

Г Г Г Г Г

律の言葉に、唯、紺、さわむらさんが声を出す

「合宿に来てんだろ？」「…」

俺の呟きも虚しく響いた

クルーザーが速度を落とし、桟橋に近づいていくと俺は手すりに足をかけた

「空也何する気だ？」

「飛び降りる気だ」

桟橋にさしかかると俺は手すりに掛けていた足に力を込めてジャンプした

「よつと…英雄さん、投げてくれ」

英雄さんがロープを手に投げる、それを受け取り近くの杭に縛り付ける

「これでよしつと」

クルーザーが止まると出入口が開いた

「全く…驚いたじゃないか…」

「悪い悪い、いつもなら出迎えの執事がやつてくれるんだが、今回
は誰も居ないんでな」

そつ言いながら俺の荷物を持つ

「そ、行こうぜ」

俺を先頭に一行は船を下りて別荘の前に立つ

「何これ…」

「でつけー…」

目の前には城みたいな別荘が聳え立っていた

「素敵ですね、でもまだ小さい方ですね」

「「「「「えー」」」」

紬の言葉に全員が振り向く

「まあな、ちよいと狭いかもしけんな

「「どれだけの金持ちなんだ…この二人」」

澪と律がそんな事を言つていたがあえて無視

「さて…入るぞ」

玄関の扉を開けると広いエントランスが現れる、俺は気にすることなく中に入っていく

「エリスがリビング」

エントランスから奥に入ると広いリビングがあつた

「で、階段を上がつて右手に行くと六人分の部屋を用意してある。好きなところを使つてくれ、奥の階段からは直接リビングに行ける」

エントランスのリビングの扉から両脇にある階段をあがつて説明する

「あたしたちは七人だぞ?」

「俺の部屋は別であるから大丈夫だ」

「エリスにあるんだ?!」

澪が目をキラキラさせて見てくる

「うつちだ…」

再び階段を上がり、三階には一間しかなかつた

「もしかして…これ?」

「ああ

俺は扉を開ける

「広つ……」

リビングとをして変わらない広さがあつた

「奥にはやっぱり直接リビングに行けるから、あまりエントランス意味無いんだよな」

俺の部屋にとりあえず荷物を置いて部屋の奥の階段からさつき説明した密間に移動する

「荷物置いて、リビングに集合な

各自好みの部屋に荷物を置いてリビングに集合する

「ま、見てのとおりこのガラス張りの向いはプライベートベーチだ

バルコニーがあつてそこから続く階段を通りプライベートベーチが広がっていた

「唯一」

「つづちゃんー！」

「遊ぶぞーー！」

どたどたと四人が部屋に消えていった

「紺ときわちやんも行きやがった……」

「とにかく遊びたかったんだな……」

俺と澪が呟く

「“じゅあるんですか?”」

梓が俺を見る

「まだスタジオの場所とか説明してねえんだけど、まあいいか…お前らも着替えて来いよ」

「【エ】ははどうするんだ?」

「俺は冷蔵庫を見てくる、英雄さん、頼むな」

「畏まりました、じゅわー」

英雄さんはキッチンに向かって歩を出した

「先に遊んでるよ。後から行くから」

澪の肩をポンと叩き、英雄さんにっこりこく

「【エ】が食料庫になつておつます。四田分の食材を保存しておつます」

英雄さんから鍵を貰い、重たい扉を開くと大量の食材が入つていた

「足りなくなるよつ、余つた方が宜しいと思いまして」

「やうだな」

「では、私はこれで失礼致しますね。四日後に迎えに来ます」

英雄さんは踵を返す

「英雄さん、喋り方。直しといてね」

「やつぱり駄目だつたかい？」

英雄さんが笑いながら俺に向き直る

「何かね、気持ち悪いから。そんな言葉遣いをされると」

「はつはつは、『ごめんごめん。飯をつけるよ、じゃあ田後に迎えに来るから。あ、空也君の部屋にいつもの置いてるから』

「気が利くね。家の執事たひせ」

「褒め言葉として受け取つておくよ。じゃあね

英雄さんはクルーザーに乗つて帰つていった

第十七話（後書き）

合宿編その一です

初めて話を跨ぎます。ご了承を

第十八話

「あつた…」れだな

俺は服を脱いで置いてあつたウェットスーツに着替え、スノーケル付きのマスクとフイインを持つてさつきは見せなかつたエレベーターで下りる

「さて、水流するか

俺はエーチに歩き出した

「なんだ、しつかり遊んでんじやねえか

「空也、遅かつたなつて空也も遊ぶ気満々?...」

パラソルの下に澪と紺がいた。澪は紺のビキニで紺は黄色のビキニを着ていた

「こここの海は潮の流れが穏やかで綺麗でな、珊瑚礁や熱帯魚が見れるんだ」

「そうなのか?」

「ああ。じゅ、行つてくるわ

俺はフイインを足につけて海に向かう

「あ、そだ

頭にマスクをつけて振り向く

「一人とも、水着良くなじむよ」

俺は笑いながら言つて。再び海に向かう

「あ、ありがと…」

澪が照れながら俺に言つていたのを聞くとマスクを顔につけて海に飛び込んだ

太陽光がキラキラ光る海の中を潜る。某熱帯魚映画のアレやテレビでよく見る珊瑚を見る。「これは変わらないな…

酸素ボンベを背負つてないので一度海面に顔を出し、もう一度潜る。それを繰り返していくとさすがに疲れたのでビーチに戻り、海上ではウエットスーツは張り付いて気色悪いので上半身だけ脱ぐ

「クウつて意外と筋肉質な体してんだな～腹筋割れてんじゃん

ビーチで唯と背中合わせに座つていた律が言つてくる

「まあな、といひで疲れたのか？」

「そつですーだから練習のほうが良かつたんですねー」

梓が日焼けで真っ黒になつた体で俺のほうに寄つてくる

「梓…真っ黒だな…」

「それは……その……私が一番はしゃいでたから……」

梓が恥ずかしくなつて俯く

「それでいいんだよ、遊ぶ時はしつかり遊べ。気を張つてばかりじや出来る事も出来なくなるからな」

梓の頭を撫で、別荘に向かう途中、澪がこっちを見ていた

「どうした?」

「いや、意外と逞しい体つきなんだなつて思つてな」

澪もか…

「ま、俺の裸を見る機会も無いからな。そう思つて当然だ。各自着替えて楽器持つてリビングに集合だ」

「「え~!お腹すいた~」」

遊び人二人が文句を言つてくる

「やかましいぞ、もともとここには練習するために来てるんだ。文句を言うな」

ブーブーと未だ文句を言つ遊び人一人

「よし、今日練習せず、明日から四六時中練習と、今日練習して、明日以降午前中は遊び、午後は練習のどっちがいい?それでも文句

を言つ奴は飯抜きだ

「わつわと行くべやー・唯..」

「つさー。」

律と唯が別荘に帰つていく

「扱いが上手くなつてきましたね」

梓が俺を見る

「あいつ等には飴と鞭方式のほうが素直になる。俺としては明日からずつと練習でも構わんのだがな」

そうじつて俺も別荘に歩き出し、バルコニーから中に入ると俺は階段とは違う方向に歩き出した

「空せ、どこに行くんだ?」

澪の言葉に振り向きながら俺は出しつつこちらの壁に手を当てる

「階段で三階まであがんのめんどくさんだよ」

俺の手の周りが反応して壁が開く

「指紋感知式のドレベーターだ。家族だけが使える」

「.....」

澪が固まつて俺を見てると、遅れて梓が現れた

「澪先輩？どうしました？」

「…………」

澪が静かに俺を指差すと梓と田代が合ひつが俺は気にせずエレベーターに乗つて扉を閉めた

「な、なんですか？！あれ？！」

梓がただの壁になつた所を指差していた

「やつぱ驚くよな……」

三階の俺の部屋に入り、着替えて、ギターを担いでさつき使つたエレベーターを使い下に下りるとさわちやん以外が集まつていた

「なんじやそりやー！」

「す、ぐーーー！」

律と唯が俺に駆け寄つてくる

「この別荘には色んなところに隠し通路があるんだ。親父の遊び心でな。これはその一つだ」

簡単に説明して全員が私服に着替えてきているのを確認すると

「もつさわちやんは放つて置いて、スタジオに案内するぞ」

俺たちはエントランスに出て玄関から見て左手にある通路を歩く

「うるだ

防音扉を開くと西側がガラス張りになつて海が一望できるスタジオがあつた

「広いね~」

「あんなアンプ見た事ないです!」

紬、梓が第一印象を語つ

「律はあのドラムを使え」

俺は律に新品のドラムを指差す

「おお~新品のドラムだ!」

律がドラムに走っていく

「あのガラスの壁は夕方になつたら眩しくないのか?」

「それはそここの壁についてるボタンを押せば…」

澪の質問に俺がボタンを押すと上から口よけの壁が下つてくれる

「とまあこんな感じだ」

「なんかもつ向でもあつだな……」

澪がそう呟いていた

「それは否定せんよ

そういうながら俺はギターを取り出してチョークングを始めた

「あすこやんのそれって何?..」

唯が梓が持つてこるギターのヘッドに墨線をやる

「ただのチューナーですけど?..」

「へー、チューナーって書うんだ~」

なかなかの爆弾発言だな。音楽をやつてこる身としては致命的じゃないか?

「え?...じゃあ誰先輩はじつはつけてチューニングしてたんですか?..」

「え?...適当にいつかって...ほりー...」

唯がギターを弹くとチューニングは合っていた

「へー 空也先輩...」れつて...」

「絶対音感つてやつだ

俺はチューニングしながら答える

「つて空也先輩もチューナー使ってないし！」

「俺は小さい頃に叩き込まれたんだよ。絶対音感なんて持つてねえよ。努力の賜物だ」

「どんな教え方をされたんですか？」

「どんなつてチューナーを使わずにチューニングして、その音を外したら蹴られてた」

「スバルタ！？」

梓が驚いていたが、そのスバルタ特訓のおかげでこうやって出来てるからな

「よし」

軽く弾くとチューニングは合っていた

「とりあえず皆に渡しておくな」

俺は『タイムカプセル』の譜面を全員に渡す

「出来たんだな。この曲」

澪が俺にさづさづつ

「ギリギリで間に合つた。とりあえずギターパートだけだが弾くな

『タイムカプセル』をボーカル込みで弾き語りする

「相変わらず」の手の曲を作るの上手いなクウは

「いい曲…」

「さすが空也先輩です！」

「クーくん凄いねー！」

律、紺、梓、唯の順番で感想を口にする

「『』の曲は『』の合図で音あわせをしどきたい、各自練習頼むな

律の号令を合図に音あわせを中心に練習を始める

「よし、じゃあやるか！」

（　）

一、三曲音あわせをする

「今の感じ良かつたな」

「そうですね！唯先輩も…」

普段練習しねえのになんていつ上手いかな…これが天才か…

「律もリズムが走らなかつたな、何か特訓でもしたのか？」

澪が律を見るところへいたりしていた

「ハラ減つた」力が出ない」

ただ単に空腹で余計な力が抜けただけだった

「私も……」

紬が遠慮しがちに手を上げる

「んじゃ、飯にするか……当初の予定通りバーベキューするわ

俺たちは楽器をスタンドに置いてバルコニーに向かう

「遅かつたわね皆！準備オッケーよ！」

さわちゃんがバルコニーで準備を済ませていた

「じゃあ食材取つてくるか、澪、紬、梓、手伝え。さわちゃんは火を頼む」

俺は比較的安全できるメンバーを選抜し食料庫に向かった。てか教師に指図したな俺：

「いいのか？」

キッチンの脇を抜け俺たちは食料庫の扉の前に立ち、英雄さんから預かつた鍵を使って扉を開ける

「凄い量ですね……」

入って一言梓がそう言つ

「皆は野菜を頼む、俺は肉を持つていくから」

全員が領き、玉葱やピーマン、かぼちゃといった野菜を持っていく

「肉はこれでいいか…」

真空パックされた牛肉の塊をしてバルコニーに向かう
「空也君、そんな大きな塊持ってきてどうするの?」

バルコニーに出ると律と唯が野菜を切り、澪と梓がおにぎりを作り、
さわちゃんが炭に火をつける事に悪戦苦闘し、紬が俺に聞いてくる

「どうするって捌く」

俺はこのときの為に買ったM'y包丁を取り出し、軽く上に投げてキ
ヤツチして、大きいまな板に塊を乗せて手際よく捌いていく

「空也君つて本当に何でも出来るのね」

炭に火をつけたことに成功したさわちゃんが俺の手元を見る

「これくらいなら見てれば出来るよになつたよ」

「ほんとに入間か?クウ?」

「失礼だな、れつきとした人間だ。よし、終わり」

喋りながらでも肉を捌き終え、律達を見るとまだ野菜を切っていた

「ちゅうどだけ切ってやる」

かぼちゃを取り、一口サイズにカットしていく

「かぼちゃが豆腐みたいに軽々と……」

「あがり、次…」

玉葱を二つ取り紬とわちやんに投げる

「皮剥いといてくれるか~包丁取つてくるから」

「うそ、(ええ)」

わわわやん…やけに素直だな

「サンキュー」

一人に?してもらった玉葱を受け取り、一般的な包丁で切っていく

トタタタタ

「はやいわね」

「つちちやん、クーくん凄いよ~玉葱切つてのに涙が出でない!」

「鼻で呼吸すると、玉葱の成分が鼻に入つてその刺激で涙が出るん

だよ。だから玉葱を切る時は息を止めるか口で呼吸すればいい

そんな事を言つてゐる間にも玉葱を切り終わる

「こんなもんで後は任せて大丈夫だろ」

「クーくん~とつもろこしが切れない~」

大丈夫じゃなかつたようだ

「やれやれ…貸せ」

とつもろこしをもらひ包丁で切つて唯に渡す

「串にさすのは任せた」

さすがに疲れたのでバルコニーのベンチに座る

「お疲れ様、空也」

澪が俺におこぎりの皿を見せる。見事に大きさが一人でぜんぜん違つていたが、俺は大きいほうを取る

「やっぱり私の手つて大きいのかな…」

澪が自分の手を見ながら俺に言つてくる

「なんことねえよ、手え出してみな?」

澪が左手を出すと俺の右手と重ねると俺のほうが一周り以上大きか

つた

「な？」

「クスッ…本当に…」

やつと笑顔になつた澪を見ながらおにぎりを食べる

「ところより梓と比べるのがどうかしてんだよ。あいつ他の子と比べると手が小さいからな」

「そんな事ないもん！」

俺の話を聞いていた梓が乱入する

「なんだ、聞いてたのか」

「酷いです、空也先輩…」

梓が分かりやすく拗ねる

「はつはつは…悪い悪い、これから成長するんだもんな」

俺は笑いながら梓の頭をポンと叩くと梓は笑顔になつた

「あ、そろそろ律たちのところに戻るか…」

俺は立ち上がりてテーブルに向かつた

「はー 空也君」

紹が炭で焼いていた肉や野菜を皿に乗せて渡す

「サンキュー」

「よーしーみんなグラスを持ったな!」

ジユースが入ったグラスを持たされ律が全員を見渡す

「かんぱーい!」

『かんぱーい.』

律の声に全員が反応し声を出す

「ねえ空せ頃、お酒はな?」

「学生の前で酒飲もうとするんなよ」

バーベキューを楽しんでいたちわちわんが俺に聞こえてくる

「いじじやなこ、お酒ぐらー」

「やれやれ……」

俺は皿を置いて中に入る

「ちわちわんも来いよ」

「分かってることあるわよ~」

わねわやんが嬉しそうにうごく

「ま、さすがに冷蔵庫には入ってねえな」

キッチャンにある冷蔵庫には入ってなかつた

「わねわやんは飲めるのか?」

わねわやんがどびつめつの笑顔で額のを確認するとワインセラーに向かつた

「なに……」

「なに? ワインセラーだが?」

俺は壁に手を当じると壁が光つた

「なにそれ……」

「指紋認知装置」

「ガガガ」と重い音を響かせて扉が開く

俺は適度に一本手に取る

「ほれ、グラスはキッチャンにある」

わねわやんがワインボトルを両手で受け取る

「ロマネ・コンティって書いてあるんだけど…」

「心して飲め、人生で初のロマネ・コンティをな

俺はそう言って、バルコニーに戻り、さわちやんが帰つてくるのは
十分後だった

「遅かつたな

「遅かつたなじゃ無いわよ！」

おずおずとワインのコルクをあけようとするが、まだためらつていた

「さわ子先生ビデオしたんだ？」

澪が俺に聞いてくる

「酒が飲みたいだけだよ」

俺はバーべキューを食べ続け、食事が終わる

「はー食った食った！」

律があなかをポンと叩く

「じゃあ花火やろ」「

紬が手持ち花火を持ってきて女子五人が花火をやりだす

「空也はやらないのか？」

バルコニーから海を眺めていると澪が花火をやめて近寄つてくれる

「俺はいいよ、皆で楽しんでこいや」

俺はアイスコーヒーを飲みながら花火をしている女子を見る

「梓もだいぶ馴染んだな」

「ああ、まだ少し戸惑つているけどな」

「いい傾向だ」

「随分、梓の事を構つてるんだな」

澪が不満げな顔で俺を見てくる

「まあな…って何でやきもち妬いてんだよ」

「やきもちなんて妬いてないもん」

そんな可愛く田を背けないでトド

「やれやれ…心配すんなよ。俺はいつでもお前の傍にいるから

澪の頭を撫でる

「ほり、花火をしに戻れよ」

澪の背中を少し押す

「わかった……」

澪が皆のところに戻るのを確認すると俺は中に入つていった

「さて、少し練習するか

俺はスタジオに入り、ギターを持つ、しばらく練習していると律が入ってきた

「クウ！ 肝試しをするので…」

「頑張れ」

俺は律の言葉を一蹴し、ギターを弾く

「クウもやるんだよ…そ…いくぞ！」

アンプの電源を落とされ、腕を引っ張られる

「俺は練習がしたいんだが…」

「いいじゃん！」

外に出されると澪が待っていた

「何で俺まで…」

俺が不満を漏らしていたが律は気にせずくじを出してくる

「二人は脅かし役で、一人ずつペアになつてもうつかり

各自ぐじを引いていき最後に残された一枚を律と俺で引く

唯と紺、俺と澪、律と梓が脅かし役に決まった

「なんでお前が肝試しに参加してんだよ」

「勢いで言つてしまつて…」

見栄はつたんだな…

「梓！ 行くぞ！」

「はい！」

一人が森の中に入つていき、数分後に俺たちが出発する

「なんで高校生にもなつて肝試しなんてやらされてんだよ」

懐中電灯を持つて澪と歩く

「とこつよつ、手え痛いんだけど…」

俺の右手がこれでもかといつほど澪に握られていた

「そ、先に行くなよ…空也…」

澪が震えながら歩く

ガサツ！

突然誰かが飛び出してきた

「み～お～せ～んぱ～い」

梓がふらついた足取りで出てきた

「キヤ-----」

俺の右耳に強烈な高音が鳴り響いた

「なつ！」

驚かせる側だつた梓が驚いていた

「澪、落ち着け…」

未だ右耳がキーンとなっていたが澪を宥める

「澪先輩ってこんなに怖がりだつたんだ…」

梓が呟く

「たぶんだが、澪は最初はやらないって言わなかつたか？」

「ええ、言つてました」

「その理由がこつこつ」とだ」

呆然としている澪を見る

「澪、大丈夫だから」

澪の両肩を揺らす

「黙田だな、これは……」

平常心を取り戻せそうに無かつたのでとりあえず澪をおんぶする

「俺たちは先に戻る、梓は残りの三人を頼むな

「あ、はい」

梓の返事を聞くと俺は別荘に向かって歩き出した

「やれやれ……」

別荘に着くと、澪の部屋がどこか分からなかつたのでとりあえず俺の部屋のベッドに寝かせ、俺はアイスコーヒーを入れてソファに座る

「ん……？」

しばらくすると、澪が田を覚ました

「目が覚めたか？」

アイスコーヒーを机に置いてベットに向かう

「空也？」

澪が体を起こす

「気を失つてからなじめから参加すんなよな

「私気を失つてたのか?」

「だから俺のベッドで寝てんだろ」

澪は今更気付いたようで顔を赤くする

「や、起きたなら、下に下りるが。そろそろ歸つてる筈だからな」

俺はエレベーターを起動させる

「行くぞ?」

俺は澪に手を差し出す

「あ、ああ……」

澪は俺の手をぎこちなく取つてエレベーターに乗り、リビングに戻ると澪が帰つてきていた

「歸つてくるな」

壁が突然開いたので再び驚く面々、何度も見ても面白いな

「や、風呂に入るか。場所はエントランスを玄関から見て右側の通路を進むとあるから、間違つても男の方に入るなよ

驚いていた面々にそれだけ言つて再びエレベーターを起動し、俺の部屋に戻り大浴場に向かつ

「ふう…」

体を洗い湯船に浸かって体を伸ばす

「一人だけだと無駄に広いな、とつとと上がるか…」

風呂から上がり、自室に入る

「何か飲むか…」

俺はリビングに下りると律がいた

「お前前髪を下ろすと別人だな」

「つむせーークウー！」

律が牛乳を取り出して飲んでいた

「でもや、お前、前髪下ろしたほうが可愛くね？」

「なつー。」

律の顔が赤くなる

「はは、やっぱお前も女の子だな」

アイスバーを取つて律の頭を撫でる

「クウは無意識でそういう事するよな」

「ん? 何がだ?」

「せり無意識だ」

なんのこいつや…?.

「まあいい。じゃ、おやすみな」

「うそ、おやすみ」

俺はエレベーターに乗りて自室に入った

「おやすみとは言つたものの眠たくねえんだよな

とりあえずアイスバーを飲んでベッドに横になる

「今日はギターの練習あまり出来てねえし、練習するか

俺はスタジオに向かつた

「ん? 誰か居んのか?」

スタジオの扉に付いている窓から光が漏れていた

「梓: と唯か?」

俺はスタジオの扉を少し開く

「リリが難しいんだよね~」

「最初はゆっくり弾いて見ればいいんですよ」

「あ、そうか!」

テンポは遅いが『ふでペん』のパートをじつかり弾けていた

「弾けたあー! ありがと~あずこや~ん!」

唯が梓に抱きつくと梓は戸惑いながらも嬉しそうに笑った

「お楽しみの所悪いが、もういいか?」

いつまでも此処に居てられないので、一人に声をかける

「空也先輩! い、いつからそこ?...」

梓が顔を赤くして慌てる

「ま、じいて言つたらお前が誰にゆっくり弾けばいいって言つた辺りからだな」

「ほほ最初からじやないですか!」

「やうなのか? ま、気にするなよ」

「気にします!」

梓がやいやい言つてこるのをやんわり回避する

「やつこえばクーくんはなんで」
「...」

唯が俺に聞いてくる

「お前ひと一緒に理由だよ」

そう言つて俺はギターを持つ

「せつかくだ、しつかり教えてやるよ。梓もな」

「あつがとーークーくんー！」

唯が俺に抱きつこうとするが唯の頭を押されて制止する

「わかつたから。抱きつかんでもいい」

「空也先輩」

梓を見ると新曲の譜面を持つていた

「どうした？」

「うーなんですか？」

梓の質問に答へつつ、唯の練習に付き合つてこた

前田…前田の言葉通り午前中は遊びにきて、午後は練習をする

「唯…凄く上手くなつてゐるな」

音あわせをした後、澪が唯を褒める

「クーくんとあずこちゃんのおかげなんだ」

唯が俺たちを見ると澪もつられて俺たちを見る

「昨日、俺たち三人で練習したんだよ。唯は飲み込みが早くてなかなか出来てんだる」

唯の頭に手を置いて澪に向つ

「や、そうだな…」

澪は複雑な表情で俺に向つた

「複雑でちゅね～澪ひやん」

律がからかう様な田線で澪に向つ

「や、そんなこと…ないもん…」

なんか俺と付き合つ様になつてから凛々しいお前が見れなくなつたな…ま、そろそろ戻すのも限界だな…

「むづ、この際だから話題を替へようが、澪に向つていい

全員の前に俺と澪が立つ

「俺たが、せわしくいつしたか」「ひい

俺の爆弾発言で漆を含め全員が固まる

「へへへへ[密]…こ、こくなつ何を…」

「何で漆まで流れてんだよ…遅かれ早かれ気付かれる事だらうが」

「…聞…」

誰が手を上げる

「はー、誰

「クーベルトッハ…ちひきんとせー」

愚問だな…

「彼女だ」

俺は漆の肩に手を置く

「なんて生々しこ…葉…」

唯が膝をつく

「おめでとー漆ちゃんー。」

紬が漆に抱きつくる

「やつとくついたか～」

律の言葉はなかなか爆弾発言だな

「知つてたのか？」

「あたしも中学から一緒にんだぜ～がつちやかない、わいつべつつけよ鬱陶しこつて思つてた」

それはぶりやけ過ぎだな

「私達も澪ちゃんがクーくんの事を好きなのは見てたよ」

唯の言葉に紺が頷く

「お前バレバレじゃねえか

澪の頭に手を置く

「うう……」

澪は恥ずかしくなつて俯いてしまつた

梓がポカンとしていた

「梓? どうした?」

「…………」

「空也先輩のギターと濬先輩のベースが息ペシタリだつたのはそつ
いつ理由だつたんですね」

「まあな、練習再開するわ」

「俺はギターを持つと全員がスタンバイする

「ワン・ツー・スリー・フォー」

律がリズムを刻んで練習を再開した

夕食と入浴を済ませ、ベッドに横になる

「ンンン

不意にドアがノックされる

「開いてるぞ」

扉から現れたのは梓だった

「空也先輩はもうお休みになられますか？」

「いや、まだ寝る気は無い

「じゃあ少し練習しませんか？」

俺は頷くと梓は笑顔になつた

「梓は練習好きだな」

「はい、今はギターを弾くのが楽しいんです」

俺は梓の頭を撫でると壁のボタンを押した

「ニヤー」

いきなり開いた通路に梓が驚いていた

「いや、隠し通路其の一、スタジオまでの直通通路だ

俺はその通路を歩いていくと梓がついてきた

「行き止まりですよ?」

薄暗い通路を歩いていくと行き止まりに着く

「見てな」

行き止まつの壁に手を当てるといくと壁が淡く光り壁が開く

「……」

梓が固まっていた

「この別荘、なかなか面白いだろ」

そう言いながら、俺はスタジオに入ると唯が居た

「クーくん、あずにゃんも凄い所から出てきたね……」

「ま、いきなり壁が開いたら誰でも驚くわな」

扉を見ると普通の壁に戻っていた

「なんか、もう…何でもアリですね…」

俺と同じように梓が壁を見ながら言つていた

「それ、澪も言つてた。や、練習しようか」

俺はギターを手に取る

「はい！」

梓が笑顔でギターを取り、前日と同じように三人で練習していた

合宿二日目…

「今日くらには、一日練習にしないか？」

朝食を全員で食べていると澪が提案してきた

「俺は構わんぞ」

「私もです」

俺と梓が賛同する

「えー！」

「遊びたい！」

律、唯が反論する

「私は舐へ縒なりとおひらでも

継世の御子と申された二子

後記

跡で一粒はわれぢやんを貪るとめんとくわいへな顔をしていた

現狀
總票數
過半票數
無效票
票力

三七 何が案なしか

源氏物語

緑川緑水一毛いしハナ

紅茶與茶
紅茶論

唯一の法律「んなのはどうだ?」

俺は一一の案を出す

「明日の脳過ぎに迎えが来る。明日はそれまで自由に遊べ、その代わり今日は練習」

俺の言葉を聞いて、一人は少しグラつく

「で、今日の夕食は腕によりをかけて俺が作ってやる。豪華な夕食にしてやる。どうだ?」

「やるー。」

一人が賛同する

「その代わり今日練習中に遊びたいとか言つたら豪華な夕食は無しだからな」

二人が頷いた

「それでいいか? 淩?」

最後に澪に確認を取ると澪が頷いた

「さわちゃんも強制参加だからな」

俺はジンジンとさわちゃんを指差す

「え~私も~?」

まだ渋つてんのか…仕方ない…

「今日の練習、まあ主に唯のギターの指導を付き合つてくれたら、ロマネ・コンティ一本出してやるけど?」

「やりますー!」

さわぢやん陥落と…

「ロマネ・コンティって私たちでも聞いたことがあるけど、高いワイヤンじゃないのか?」

澪が俺に聞いてくる

「ロマネ・コンティって言つても高いのと安いのがあるの。ロマネ・コンティは一年で六千本程度作られるんだけど、テレビとかでよく見るロマネ・コンティはその中で高級な物を出されるから高いだけなの」

俺の変わりに紬が説明し

「安いっても一本三十万程度だから。高いものだと二百万位するやつもある」

俺が補足する

「何か凄い会話だな。一介の高校生がロマネ・コンティの説明されてる」

律が俺たちを見る

「ロマネ・コンティはよくお父さんたちが飲んでるから

「俺んとこも、家には無いがパーティーや別荘に来ると親父が飲んでるから」

「「「」」れぐりいは普通」」

俺と紬の最後の言葉が被る

「おー一人の家つてどれだけ大きいんですか…」

「「」想像にお任せするよ。やー練習するか!」

俺は立ち上がり皿を洗つてスタジオに向かい、夕方まで練習していた

「さて、俺は夕食の用意でもするか…」

俺はギターを置く

「何作つてくれるんだ?！」

「合宿中は肉料理が多かったからな今日は魚だ。すぐに出来るから待つてる」

俺は壁に手を触ると前口使つた通路が現れる

「もう慣れてきたな、壁が開く」とこ…」

「だらうな…」

俺は通路を通り、リビングに下りる

「さて…」

俺はキッキンの壁に手を触れる

「パ、パ、パ」と音を立てて寿司屋でよく見る冷蔵庫が現れる

「酢飯は毎の間に作つておいたからよし、後は魚の切り身を冷蔵庫に…」

食料庫から色んな魚の切り身を冷蔵庫に入れていく

「出来たかーークウ！」

全員がリビングに入つてくれる

「良いタイミングだ」

「つひ何だこりやー！」

「何つて寿司を握る？と思つてな、何が食いたい？」

全員がダイニングに座る

「大トロー！」

「サーモン」

各自好きなものを言つてくれる

「了解だー！」

言わされたものを俺が握つていいくといふスタイルで夕食を済ました

「お寿司も握れるんだな

俺の分の寿司を食べていると澪が話しかけてくる

「まあな。このセットも俺のために作られたようなものだからな

俺はそれを自分で寿司を握っていたところを指差す

「とこづか…これどうして持つてきたんだ?」

俺は寿司を食べ終わると立ち上がった

「ちゅうと下がってな

俺は澪の頭をポンと叩き、俺は風呂に入つてベッドに横になる

「わからやすい説明だな

「あ、いいい」とだ

「だろ?まだこの別荘には秘密があるんだがそれはまた今度な

前日に続き誰かが俺の部屋をノックする

「今日は疲れた…」

「ノック

「開いてるよ」

「空也、ちゅうといいか？」

現れたのは澪だった

「構わんぞ。じりした？」

「明日帰るんだと思うと少し話をしたくてな」

「話ないうつでも構わんが、じりせなら場所変えるか……」

俺は立ち上がり、ベッドの近くの壁に手を触るとまた新しい通路が現れる

「ついてきてくれるか？俺のつておきの場所だ」

澪は頷いて俺についてくると元明かりに照らされたバルコニーに着いた

「綺麗……」

海に月が写つても幻想的な場所だった

「俺と親父以外は知らない秘密の場所だ」

手すりにもたれながら澪に振り向く

「ありがとな、空也」

突然お礼を言われた

「何の事だ？」

「皆さん私達の事を話してくれて」

「あの時も言ったと思うが、遅かれ早かれ気付かれる事だよ」

「それでもだよ。嬉しかった」

「私ね、空也に想いを言ったあの日からまるで実感が沸かなかつた。部活中も一緒に帰ってる時も空也はいつもと変わらない。私たちは本当に特別な関係になつたんだろうかってずつと思つてた…」

確かにそうだ、俺自身が学校や下校中も澪と必要以上に接してはいなかつた。といつより接そうとしていなかつたのだから

「それを空也は一気に吹き飛ばしてくれた、彼女だつて言つてくれた事が嬉しかつた…」

「あの時は彼女つて言つたが、正確には少し違う…」

澪が俺の顔を見る、俺と澪の目が合ひつているのを確認すると

「澪は俺の……恋人だよ」

「恋人……？」

「ああ、俺の勝手な持論なんだが、彼氏彼女の関係はお互い好きあつてはいるけど、どこか軽い感じがするんだ。恋人の方が俺にとつてかけがえの無い存在、大切な人なんだって思つてる。誰かを好きになるのは簡単だ。LOVEじゃなくてLIKEでも好きつていう意味だからな。けど恋つてのはLOVEからしか出てこないものだと思つてる、だから恋人だ…」

俺の言葉を聞くと澪は抱きついてきた

「私も空也はかけがえの無い存在だ、空也以外の人を好きになれそうになー…」

「光栄だね」

澪の頭を撫でて澪を抱きしめ、そしてキスをする

「空也…」

唇を離すと澪が甘えた声で俺の胸に顔を押し付ける

「やつぱ皆の前と一人だけの時とで性格違うなお前は」

「だつて恋人だもん」

しばらくいやついて澪が落ち着くと部屋に帰つていき、翌日の昼まで遊んで俺たちは別荘を後にした

第十八話（後書き）

初めての一万多ーバーの文字数です

長かつた…最後の方ぐだぐだ…いろいろ問題ありますね…ぐだぐだにならないよう頑張ります

第十九話

合宿から帰つて数日がたつたある日…

『澪 Side』

私は商店街に買い物に来ていた。本当は空也も誘つたんだけど、仕事が忙しくて家から出られないって断られた

「後で差し入れ持つて行こう」

そんな独り言を呟きつつ、行きつけの楽器店に入る

「えっと…ベースの弦は…」

目的の品を手に取った時、不意に私のネックレスが切れた

「あ…せっかく空也から貰つたのに…」

私はその時はただの不運だと思っていた…

『空也 Side』

「元気だつたか…空也…」

俺の部屋の扉が勢いよく開いて親父が入つてくる

「あんたがやらなかつた仕事が無かつたら元気だつたな」

俺は仕事の手を止めて親父を見る。仕事さえなかつたら漆と買い物にいきたのにな…

「細かい事は気にするなー着替え、出かけるぞー。」

去年もあつたなこんな事が…

「琴吹家に行くのか?」

「察しがいいな、流石俺の息子だ。下で英雄が待ってるからなー。」

それだけ言つて親父は部屋から出て行つた

「ち、空也様、着替えましょうか」

和田がタキシードを出してくれる

「何でお前がいんだよ…」

「お気になさらず

「気にするわー。」

もつひとつものもめんどくせくなり、渋々タキシードに着替え、外に出る

「空也君、待つてたよ」

英雄さんが車のドアを開けて待つていた

「英雄さん、合宿のときは世話になつた」

「ははは、気にしないでいいよ。ち、乗つて」

英雄さんに促され車に乗り込む

「これはもう毎年恒例になるのか?」

運転している英雄さんに話しかける

「空吾が乗り気でね、琴吹家会長も君に会いたいみたいだよ」

「もう完璧に繋がりが出来たな…もつこの国乗つ取れんじゃねえのか?」

物騒な事を言ってみる

「否定はしないよ」

せめて否定していくだれい…

「わざわざ空吾から聞いたんだけど、彼女が出来たんだって?」

「まあな…」

否定する必要も無いので頷く

「天城グループは安泰だね」

「気が早いな」

「だつてやの子とゆくゆくはつと思つてゐんじやないの？」

俺の周りの大人はなんでこいつ鋭いかな…

「まあ……な……」

窓に手を向けながら肯定する

「ははは、まだ照れるよね。でも僕達からしたら喜ばしい事だよ」

それを言つ英雄さんは本当に嬉しそうだつた

「や、着いたよ」

英雄さんが車のドアを開けると去年と同様に紺がお出迎えてくれる

「中で待つてりやいいのに、暑いだろ」

「空也君が来るのに、中で待つてなんて居られないの」

紺が笑顔でこたえてくる

「そりゃ光榮だな」

紺の頭をポンと叩く

「や、行くわ」

中に入ると、会場の中心に紺の父親が待っていた

「空也君、久しぶりだね」

「会長もお変わりなによつて何よりです」

俺は軽く挨拶をする

「空也君、君はギターが弾けたね」

「ええ、それほど上手くは無いんですけど」

「謙遜する事はない、どうだ？今年のステージで弾いてみる気はないかね？」

「それは構いませんけど、肝心のギターを持ってきませんよ？」

「それは心配要らないよ」

振り向くと英雄さんが俺のギターを持っていた

「空也君、和田から預かってきたんだ」

英雄さんが田上で見るよつ合図ある

「あのやひ……」

和田が一階で二つにに向かつて親指を立てていた

「空也君、ひょつといいかい？会長少し失礼いたします」

英雄さんが俺の腕を引っ張つて会場から出た

「どうしたんだ？」

「空也君は気付いているかい？」

英雄さんが真剣な表情で俺に聞いてくる

「会場の雰囲気か？」

去年には一階に入なんて居なかつた。一階に居るのは琴吹家のS.Pとうちの執事たち、うちの執事たちはS.Pも兼ねているので警備についているものと思われる

「さすが、空也君だね。空吾も感じていたけど、今年のパーティーには何か不穏な空気が漂つてる。空也君にもこれを渡しておくれよ」

英雄さんが拳銃を一丁渡してくる

「随分と物騒だな」

俺は受け取つて弾を確認すると内ポケットにしまつ

「使わないのが一番良いんだけどね。護身用で一応持つてほしいんだ。使い方は忘れてないよね」

俺は頷く

「田星はついてんのか？」

今度は英雄さんが頷く

「去年からなんだけど、うちと琴吹家が仲良くなることを望まない連中が居てね。そいつらがこの会場に居るから」

「このパーティを使って、炙り出すって算段か」

「そう、会長にも伝えてあるんだ」

「紺には？」

「お嬢様にはまだ話していない」

「紺にはこのことは話すな、そんな社会の醜を紺には知らせるわけにはいかないからな」

「分かった」

英雄さんが頷くのを確認すると、俺は会場に戻り、英雄さんは親父の警護に戻った

「文句があるなら直接言つに来いってんだ…」

「どうやら君も知つてしまつたようだね」

会長がこの方に向かってくる

「紺はどう？」

「あの子は先にスタジオに入ってるよ、こんな事細には言えないからね」

「同感です」

俺は内ポケットに手を触れる

「それを使わなのが一番なんだがね…」

内ポケットの中身を察知していた会長がそう呟く

「会長は今回の件に関して心当たりはあるんですか？」

「少し場所を変えよ」

会長の提案に領き、俺たちは別室に入る

「私の勝手な憶測なのだが…」

そう前置きして話し始める

「おそらく政界の人間が絡んでる」

「政界？政治家が何故？」

「我が琴吹財閥も空吾君の天城グループも政界にはなんの支援もしていない、これが何故だか分かる？」

「目先の金儲けしか考えてないから」

俺の返答に会長は頷く

「聰明だね、その通りだ。先代までは政界にも干渉していたような
んだが、私の代になつてからは干渉を無くしたんだ、理由はさつき
空也君が話したとおりだ。干渉をしなくなつて、更にここにきて天
城グループと琴吹財閥が関わりを持つ、その意味が空也君には分か
るはずだ」

朝、「冗談交じりで言つたことを本氣にしている政治家が居るってこ
とか…

「政治家の中にも馬鹿なことを考える奴が居るんだな…となると標
的是は…」

「私と空也君、それに君と紺だ」

「でしようね…」

俺はため息をついて苦笑いをする

「空也君はあまり怖がらないんだね」

会長は驚いていた

「これからこのことは中学の時から慣れています、会長は何で俺の家
が一般家庭とそれほど変わらないかご存知ですか？」

「空也君からは普段から贅沢をしないためと聞いてはいるが?」

「それも理由の一つですが、本当の理由はカモフラーージュです」

俺は理由を喋りだした

「天城グループは親父が一代でここまで築いた、大企業としてはまだ新参者です。その新参者がいまや琴吹財閥に匹敵する大企業まで成長したことに妬みや怨みを持たれるのは当然のこと、だから敢えて豪邸を建てずに、住宅街にひつそりと建てたんです。それで俺の命を狙つてくる奴は後を絶たなかつた」

「空吾さんの人柄を考えるとそんな事も無さそうなんだが…」

会長が首を傾げる

「元々、向こうは聞く耳を持たなかつたですからね、それでもと親父は何度も足を敵視されてる会社に足を運びましたから」

「空吾君も大変だつたんだな…」

「今までこそ、豪快な性格になつてますけどね」

一人で笑いあう

「今回の件は天城グループの全身全靈で相手させもらいます。まず向こうの戦意を落とさなければ話を聞いてもらえませんから。会長たちは自分の身を守ることだけをお考え方さい」

「同じことを空吾君にも言われたよ。でも大丈夫なのか?」

会長が首を傾げる

「大丈夫です。俺自身も胸のコイツもやうですが、武術も習つてしまつたから。それに慣れてますから」

そういうて俺は立ち上がる

「じゃ、俺は紬の所に行きますね」

俺はそういうてスタジオに向かつた

「空也君、遅かつたね」

紬がキー・ボードを触りながら俺を見る

「悪いな、待たせて…何を演奏しようか?」

「私、『タイムカプセル』がいい!」

紬が手を上げて提案する

「了解だ、じゃあ音あわせしようか」

俺たちはしばらく音あわせをしてると時間が来たようで、係りの人がやってくる足音が聞こえた

「悪いが紬は俺のギターを持つて先に行つてくれるか?」

俺は紬にギターを渡し、先に行かせた

「おー人…そろそろつてあれ?」

見慣れない係りの人がスタジオのドアを開けると、俺しかいないことに驚いていた

「俺の読みどおりだな、あんた誰だ?」

「お、俺は…し、執事です」

執事を名乗る男は慌てる

「残念ながら、この家の執事は俺つていわねえんだよ。誰の手先だ、答える。こちらも手荒な真似はしたくない」

俺はタキシードを脱ぐ

「チツ！バレたならしかたねえ！」

男がナイフを持って襲ってくる

「刃物を持つてるからって勝てると思つな」

ナイフを避けて腰に差していた拳銃でナイフを打ち抜き、空いている左手で相手の腕を掴んで押し倒し、拳銃を構える

「さ、吐いてもらおうか？誰の差し金だ」

「誰が貴様なんかに…」

男は答えようとしなかった

「空也様…」無事ですか？」

琴吹家のSPらしき人物が入ってくる

「いいところに来た。コイツをつておい！」

SPじゃなかつた敵だつた。俺は避けて一人と対峙する

「介の高校生相手に大の大人が一人がかりかよ」

「ほぞいでろ！天城空也！死んでいただく！」

男が一人で俺に向かってくる、一人はナイフを持っていた

「手荒な真似はしたくなえって言つてんだろ？が！」

ナイフを持つている手を蹴飛ばし、ぐら付いた所にこめかみを狙つてもう一発蹴る

「ぐあつ！」

助けに来たのであろう男が壁に激突し気絶する

「なつー！」

最初に来ていた男は一瞬俺から目を放すのを見ると一気に距離を詰める

「正当防衛だ、悪く思うな」

相手の頭に踵落として氣絶させる

「思つてゐるより、敵が多いな…本氣で潰しに来てやがる」

「空也様…」

騒ぎを聞いて駆けつけた和田が入ってくる

「遅かつたな、もう終わつたぞ?」

「流石ですね。ここは私に任せとて、空也様は紬様の所にお行きなさい」

俺は頷いて、ステージに向かつた

「紬!」

「空也君…一体何があつたの…?家の皆も騒いでるし…」

流石に紬も騒ぎこなしきづいていた

「理由は後だ、ここから離れるぞ

紬は巻き込みたくなかったんだが…そんな事も言つてられないよつだ

「じつこいな…お前ら

追っ手が来ていた。ステージの上なのでギターとキーボードが置いてあるから暴れられんな、仕方ない…

「空也君…何を…?」

俺は拳銃を構えて、ナイフと足を打ち抜き、ひるんだといふを思いつきり蹴飛ばす

「紺、近くに隠れられると「ひま無い」のか？」

「あるわー」「ちち…」

紺が指差した方向に向かうと一人分の隠れられるスペースを発見した

「よし、じつとしてる。終わったらまた迎えに来るかい

「うん！絶対死なないでねー空也君が死んだら一番悲しむのは澪ちゃんなんだから」

「分かってるよ。勿論死ぬつもりもねえし、お前にも傷一つつけさせやしない」

俺はいつもの笑顔を見せる

「さて、こくか…」

紺が隠れているとこから離れるために走り出した

「おお、空也か！無事だったか！」

会場に出ると親父と英雄さんが鬪っていた

「そんな簡単に死ねるかよ、俺には帰りを待つ人がいるんだ。会長は？」

「避難してもらつてゐる。会長には専属のＳＰが着いてるから大丈夫だ。そつちは？」

「紬も、大丈夫だ。安全なところに隠れてもらつてゐる」

お互に状況確認を簡単に済ませる

「空也様…」無事で…？」

二階から和田が飛び降りてきた

「いいところに来た、手伝え…」

英雄さんが和田に声をかける

「はい…」

英雄さんと和田、俺と親父で背中を預けあう

「親父、腕はなまつてねえだろ？」「

「誰に物言つてんだ？空也？お前に武術を教えたのはこの俺だぞ？」「

俺と親父はニヤリと笑い、同じ構えをする

「和田！我等の命は」

「最後の一滴まで天城家のために…」

専属の執事一人はお互の意思の確認を

「ほんとに頼もしい執事だな」

俺と親父の言葉が被る

『居たぞー全員仕留めろー』

敵がわらわらと入ってくる

「誰一人として死なすな！全員、徒手空拳で対応しろー！」

親父の言葉に全員が頷く

「いくぞー和田！」

「はいー空也様！」

俺と和田が出入り口の一つに走る

「来るぞー空也！」

「分かつてー！」

自然に一人一組に分かれて各個撃破していく

「お前らナイフばっかりだな！」

馬鹿の一つ覚えみたいに持っている武器はナイフだった

「序の口の構成員ですね！そんなことでは空也様は倒せませんよー。」

「挑発せんでいい！」

「嫌ですねえ… 挑発なんてしていませんよ」

「こんな時でも俺たちは何時もの調子だった

「あいつら息ピッタリじゃねえの」

「空吾が思つてゐるほどあの一人は弱い絆じゃないよー間違いなく
これから天城グループを支える一人だからね」

「大地君はいいのか？」

「あの子はあの子で進みたい道に進ませるぞ」

親父たちは余所見をしながらでも敵を倒していくた

「あーしんど…」

しばらくすると向こうも人が少なくなつてきていた

「先が見えましたね」

和田をチラツと見ると後ろに刀を持つた男が立っていた

「和田！後ろ！」

俺は叫んだが少し遅かつたようで和田は背中を斬られた

「あのやう…」

「空也！…そいつで最後だ！」

親父が叫んでいるのを聞くと俺は目を閉じた

「最後くらい楽しませろよ？本氣でいくから」

俺は、拳銃と上半身に着ている服を和田に渡し、刀を持っている男との距離を縮める

「ふん！」

男は刀を振り回すが、少し違和感を感じた

「あんた、剣術をならつてねえな？太刀筋がバラバラでなつてねえ
よ」

隙を突いて顔を蹴り上げ、手から落ちた刀を遠くに投げる

「これで終わりだ」

みぞおちに拳をめり込ませ膝を着いた所にこめかみに向かつて蹴りを入れ、気絶させる

「大丈夫か？和田」

気絶したのを確認してから和田を見る

「かすり傷です」

和田は少しふらつたながらも立っていた
「いいから座つてろよ。救急車呼ぶから」

全員が油断したその時だった

パン！

突然銃声が響き俺の左肩が熱くなる

「ぐあっー！」

俺は左肩を撃ち抜かれていた

「空也……」

親父の声にを聞きながら弾丸が飛んできた方を見る

「空也君……」

紬が敵のボスらしき中年の男に捕まっていた

「紬……！」

俺が声を上げると左肩から激痛が走る

「あんたが……黒幕か……」

俺は左肩を押さえながら聞く

「そうだ、私はお前らが憎い。事もあろうつか琴吹財閥に自由に出入りしている不届き者よ」

銃口を俺に向ける

「あんた…会長が言つてた政治家だな…？」

「ああ、そうだ！私はお前らに代わつて天城グループを手に入れ、私を捨てた琴吹財閥を陥れ、この国の霸権を取る！」

いつてる事が滅茶苦茶だな

「霸権ね…そんな物に拘つてるから琴吹家との関わりが無くなつたんじやねえのか…」

「若造に何が分かる！」

「わかんねえな、あんたみたいな私利私欲に走る奴の気持ちなんて」

俺は肩の痛みに耐えながら構える

「人を統べる者としてお前を許すわけにはいかない…」

俺は近くに落ちていたナイフを拾う

「動くなつて言つた筈だ！この女が死んでもいいのか！」

袖に銃口を向ける

「お前…紬が…何者かもわからんねえのかよ…」

意識が少し薄くなってきたな…

「その方は、琴吹紬様、琴吹家のいじ令嬢でござります」

俺の変わりに英雄さんが答えてくれる

「な…何を…！」

俺から視線が反れた、今しかねえか…

「……」

声を出す」ともせず避ける程度にナイフを投げ、俺は走る

「うわっ！」

それに気づいた男は紬から離れる

「やつと…紬から離れたな…」

俺の左腕は真っ赤になっていたがもう気にしない、これで終わる…

「ちょ…ま…」

言い分を聞かず今だせる精一杯の力で殴る

「ハア…ハア…約束したからな…傷一つつけさせやしないって…」

体力が底をついたようで足がふらつく

「空也君！大丈夫？！」

紬が寄つてくる

「あーちょっとヤバイ…かな…」

俺は紬に笑う

「全く、無茶しすぎだ。今、英雄が救急車を呼んでくれてる」

親父が俺に近づいてくるので振り向いた時…

パン！

再び銃声が響き、俺の横腹に衝撃が走る

「クク…貴様も…道連れ…だ…」

そう聞こえ、振り向いてみると男は既に気絶していた

「流石に…駄目…だ…」

俺は膝から崩れ落ち、意識が遠くなつた

私の隣の空也君が倒れる…

「【空也】……………」

【H姫】さんが空也君の名前を叫ぶ…

「く、空也君…」

私は空也君の体に触れる、ピチャリと液体が私の手に付く…その液体は真っ赤な色をしていた

「い、嫌……………」

私は気が動転していた

「【空也】君…起きて…起きてもよ……」

私は泣きながら空也君の体を揺さぶる

「紬ひやん、気持ちは分かるが、今は揺わばつては駄目だ…」

【H姫】さんが私を止める

「英雄！」

「はーー。」

【H姫】さんと英雄さんが空也君の肩と腹部に脇においてあつたタオルを巻いて肩と腹部を押さええる

「絶対に死なせやしないからなー空也ー」

「やつですよ、まだ空也様には死なれでは困ります」

和田さんも自分の怪我を無視して空也君の腹部を押さえる。すると救急車と警察の方がやってきて空也君と和田さんが救急車に乗せられ、空也さんが付き添いで救急車にのって近くの病院に運ばれていった

「詳しいことはあちらに…」

英雄さんが警察の方に監視カメラを指差して座るとお父さんがやつてきた

「英雄君、申し訳なかつた。今回の事は、琴吹家の問題だつた。許してほしい」

お父さんが一部始終を警察の人から聞くと英雄さんに謝つた

「私の気持ちはどうであれ、その言葉は空也君に言つてあげてください。あの一人が一番頑張つてましたから…私たちはその手伝いをしたまでです」

そういうと英雄さんが立ち上がつた

「では、私は病院に向かいます。会長、申し訳ありませんが」この片づけをお願い致します」

英雄さんは返事を聞かず行つてしまつた

「お父さんー私も行つてきまーす」

私は英雄さんの後を追つて英雄さんの車に乗り込んだ

「来たか…」

病院に着くと入り口に空也さんと和田さんが待つていた

「和田、立つて大丈夫なのか？」

英雄さんが和田さんに聞く

「私は大丈夫です。それより、空也様の所にお連れします」

英雄さんと和田さんの案内で手術室の前に連れていられた

「せつしき運び込まれたところだ」

手術室のランプは光っていたのを見る

「わ、私… 霧ちやんに連絡してきます…」

私は「」に困れなくなり出入り口に向かつた

「霧ちやん…」

私は涙を堪えながら霧ちやんに電話する。着信音が聞こえると霧ちゃんはすぐに出でてくれた

「ムギから電話してくるなんて珍しいな、どうしたんだ?」

「澪ちゃん…」

澪ちゃんの顔を覗くと涙が止まらなくなつた

「澪ちゃん…ヒック……君が…君が…」

まるで泣かれない…君が大変なの…

「マサ～君がどうしたんだ？」

「織ちゃん…俺から戻る、代わつてもいいのか？」

君が手を差し出してくれると私は素直に携帯を渡した

「澪ちゃん、覚えてるかな～君の父、君だ」

《澪 S.ue》

突然ムギジヤなこ声が聞こえて少し驚いた

「はい、お久しぶりです。君のお父さんが何で？」

素直な疑問を聞いてみる

「紹介され今は今ひとつ話せなくてね。悪いが俺から戻されちゃつても
いいよ。澪ちゃん」といつては辛い話だと感づ

やつ置きました上でも君がなんば私も一言でも言った

「今、空也は死ぬかもしれない」

死ぬ？誰が？

「こんな短い説明じゃやつぱり伝わらないよね、でもこれは真剣な話なんだ、紺ちゃんのお家と僕の家がお金持ちだってことは知ってると思うナビ、今日この二つの家が一緒にパーティを開いたんだ」

空也さんが順を追つて話し始めた

「でね、そのパーティはこの二つの家が仲良くすることを良く思わない人たちに襲われたんだ。僕も空也も必死に戦つたんだけど、紺ちゃんを人質にとられて空也は紺ちゃんを助けるために…戦つて、撃たれた」

私の携帯を持つ手が震える…空也が撃たれた？

「…」惑うのも無理は無いが、今、空也は緊急手術をしている。お医者さんも最善をつくすって言つてもらつたが、もしかしたら…落ち着いたら病院に来てほしい。空也も喜ぶと思つ…

携帯からさう聞くと通話が切れた

「行かなくつけ…」

私は殆ど無意識に、病院に歩き出した

「や、戻りつ..綾ちゃん…」

綾ちゃんが私に携帯を返し私に言ひたへるナビ、私は首を振った

「私は、ソリで綾ちゃんを待ちます」

「わかった…」

綾ちゃんは私の頭をポンと呑ぐ、やつぱつ綾ちゃんのお父さんだ…

「じゃあ待ってるかい」

綾ちゃんは手術室前に戻つてこつた

「空也君…」

私は、私をあの場所に隠してくれた時の空也君の笑つた顔を思い出す…

(死ぬつもつけねえし、傷一つつけさせやしない…)

空也君のこの言葉が蘇り、私はその場に座り込み、涙が溢れ出す

「空也君……死んじややだよぉ…。」

私の涙が止まる」となく流れる。私の手には空也君の血がまだ着いていた

「…………ヒック…………ヒック…………」

「紬様… そんなところで泣かないでト said、あひらごベンチが御座いますから…」

和田さんが痛々しく体に包帯を巻いた姿で現れ、私の体を支えてベンチに座らしてくれる

「空也様も幸せ者ですね… こんなにも大切に思つてくれるお友達が居るのですから…」

和田さんが私の隣に座り話し出す

「紬様、大丈夫です。空也様は絶対に死にませんから…」

和田さんが私に笑顔でそう言つてくれる… 私はたまらず和田さんを抱きつき泣きじゃくる

「今は、一杯泣いてください。そして笑顔で空也様に会いましょう」

《澪 S·u·d e》

「はつ…はつ…」

私はひたすら走っていた… 嘘だつて信じたかったけど… ムギの泣きじゃくる声、空吾さんのあまり聞かない真剣な声を聞いて嫌な予感がした…

合宿から昨日まで空也はいつもと変わらなかつたのにどうして…?

私はその答えも知りたくて病院にむかってひたすら走った……

「ムギ……」

病院に着くと、ベンチでムギが和田さんに抱きついて泣いていた。不安が一気に膨れ上がる……

「秋山様、お待ちしておつまました……紳様、秋山様がお着きになりました」

和田さんがこっちを見てムギに話しかけるとムギが泣きながら抱きついてきた

「澪ひやん……空也君が……空也君が……」

ムギの頭を撫でていると、和田さんもベンチから立ち上がりつち歩いてくる

「和田さん……その姿……」

和田さんは体に包帯を巻いていた

「かすり傷です。じつは、空也様の所にお連れします」

和田さんの足取りがふらつきながらも案内してくれる……澪ひやん……

「手術室……」

手術室の前だった、手術室の前に頭を抱えている空也さんと、とても暗い表情の英雄さんが居て、振り向くとすっと泣いているムギ、

私の隣で氣丈に振舞つてはいるけど辛かつた和田さん…

「嘘…嘘だよなー。ムギー。」

私はムギを見るがムギは泣きながら首を振るだけ…

「和田さんー。」

和田さんも無言で田を背ける

「空也さんー英雄さんー。」

一人も無言で嘘じやないって首を振るだけ…

「嫌…」

私の田からも熱いものが零れ落ちる…

「私達…やつと…やつと始まつたんだよ…?ねえ…[空也]…?..」

【田】へ【田】へ【田】へ【田】私の田から涙が零れ落ちる…

「嫌だよ[空也]ー私は…こんなとこ[空也]とお別れしたくなーよ…
ー[空也]ー。」

私はその場で泣き崩れた

「[空也]さんが私とムギの頭を撫でる
「[空也]さん、紺ちゃんも、大丈夫だから。[空也]を信じる」

[空也]さんが私とムギの頭を撫でる

「やつぱつ空也君は大地の息子だね」

英雄さんが空吾さんを見て笑う

「どういひ意味だよ」

「空也君も良くなつて頭を撫でるからね」

英雄さんが少し笑う

「当たり前だらうが、俺の息子だぞ」

空吾さんが英雄さんのお腹を軽く叩く、何か空也と大地君を見ているようだ…

そんな時、手術中のランプが消えた…

第十九話（後書き）

アクション要素を取り入れて見ました

多分この話以外ではやらないです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8594z/>

けいおん! 僕の奏でる音

2012年1月14日20時54分発行